

源波古墳

～発掘調査報告書～

昭和 62 年

箕輪町教育委員会

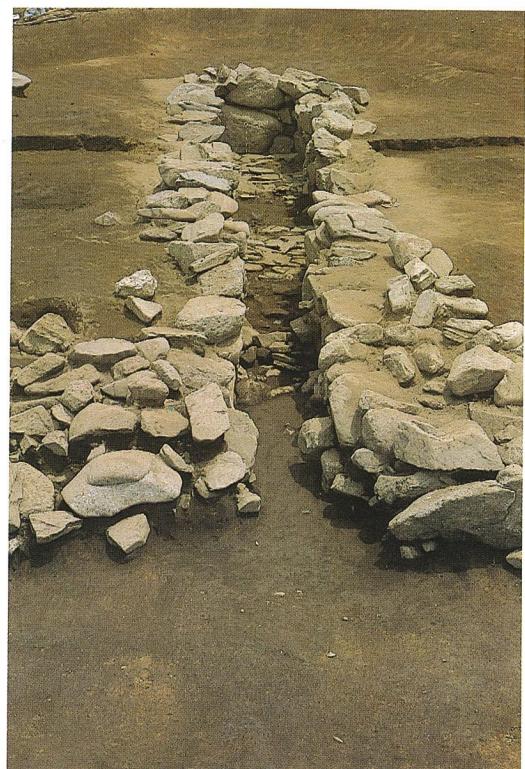
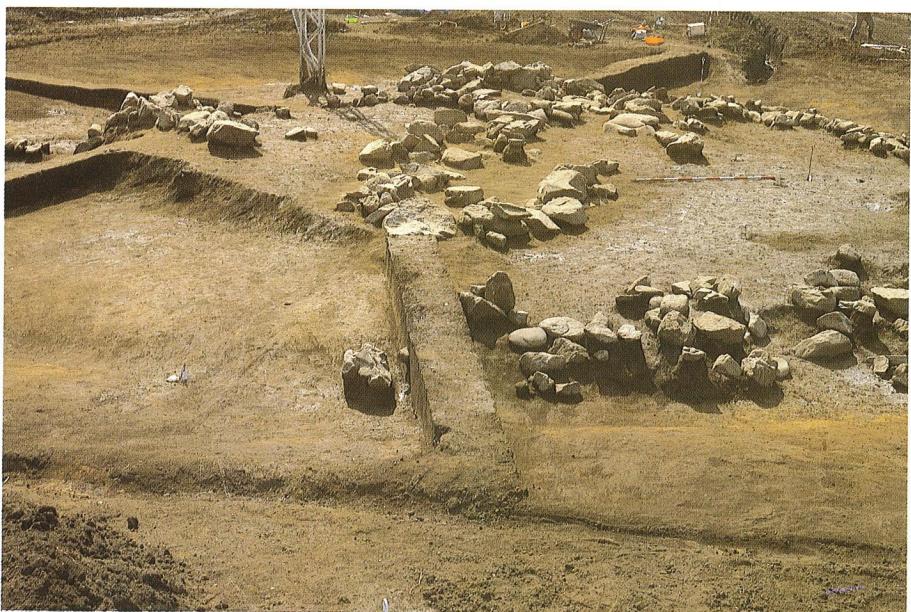
源 波 古 墳
源 波 遺 跡

昭和 62 年

箕輪町教育委員会



出土金属器 1



古墳全景・石室出土狀況



直刀・馬具出土狀況



出土金属器 2

序

箕輪町教育委員会

教育長 樋口彦雄

長岡段丘の周辺には古墳が多く、いわゆる長岡古墳群といわれ、10基程現存するものがある。源波古墳はこの古墳群より東に離れて山麓に近く、段丘の上では古墳群を眼下に見る高い位置の、畑地帯に独立して一基あったものである。

長岡区は新田地区に箕輪ダムが建設されることに伴い、区の記念事業の一つとして、長岡運動公園の造成を計画した。グランド造成予定地がこの源波古墳を含む一帯の地域であった。この地域は畑作地帯として肥沃な土壤のため、長年根菜類、特に長芋の産地として耕されていた為、一見古墳らしい形態は僅かであった。先に発掘復元した天王塚古墳と同じ位の規模を予想していた。

緊急発掘調査を進めるに従い其の規模が広大であることが判明した。細部については章を追つて明らかにするが、出土した遺物は多様で箕輪町では珍しい出土品が多く、調査団を湧かせた。

緊急発掘調査後、既に持ち去られた一部の天井石などは、ダム関係企業の協力を仰ぎ、搬入した岩石を組み立てて、運動場公園の一隅に1,400年前の源波古墳を復元した。また300年前の古文書を収納する、古文書館を建設し、更に200年前の長岡神社本殿と、現在開設したグランドとを合わせて、長岡区はこの一帯を陵園と命名し後世に伝えようとしている。

例　　言

1. 本書は、長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪82番地に所在する源波古墳及び同遺跡の報告書である。

2. 本調査は、長岡区の委託を受けて箕輪町教育委員会が実施した。

発掘調査は昭和62年5月8日～6月23日まで実施し、引き続き整理作業及び報告書の執筆作業を行った。

作業分担は次の通りである。

土器の復元－福沢幸一、竹入洋子。遺構実測図の整理－竹入洋子、根橋とし子。土器・石器・鉄器実測・トレース－竹入洋子、根橋とし子、柴登巳夫。土器拓本－山内志賀子。挿図作製－竹入洋子、根橋とし子、柴登巳夫。写真図版の作成－柴登巳夫、根橋とし子。

3. 本書に掲載した遺構の写真是、柴登巳夫、石川寛が撮影したものを使用した。なお、出土遺物の撮影には征矢進氏の御協力をいただいた。

4. 金属類については桐原健氏、土器・陶器類については小平和夫氏にご教示いただいた。

5. 本書の執筆は、柴登巳夫、竹入洋子が行った。

6. 本書の編集は発掘調査団が行った。

7. 本書の資料は、箕輪町郷土博物館に保管されている。

8. なお、古墳は元の位置から約70mほど離れた場所に移転復元されている。

古墳復元作業は沢、若木屋造園が実施した。

目 次

題 字	教育長 橋 口 彦 雄
序	教育長 橋 口 彦 雄
例 言	
本文目次	
付表目次	
挿図目次	
図版目次	
第Ⅰ章 遺跡の立地	1
第1節 位置	1
第2節 自然環境	2
第3節 歴史的環境	3
第Ⅱ章 発掘調査の経過	5
第1節 発掘調査に至るまで	5
第2節 調査の概要	5
第3節 発掘調査日誌	7
第Ⅲ章 古墳の構造と副葬品	16
第1節 古墳の構造	16
1. 古墳周囲の状況	16
2. 墳丘	17
3. 内部構造	18
第2節 副葬品	26
1. 石室内遺物の出土状況	26
1) 鉄製品 イ) 直刀	29
ロ) 直刀鍔	33
ハ) 刀装具	34
ニ) 刀子等	35
ホ) 鉄鎌	38
ヘ) 金環	38

ト) 留金具	39
チ) 轆	41
リ) 雲珠・辻金具	43
ヌ) 鞍	45
ル) 斧具	46
ヲ) 鐙・鉤	48
ワ) 鏈	48
カ) その他の金属器	49
2) 玉類	50
3) 人骨・歯の検出状況について	51
4) 人骨及び歯についての所見	52
5) 出土土師器・須恵器	58
第IV章 その他の時代の遺構と遺物	61
第1節 縄文時代	62
1. 遺構	62
1) 集石炉	62
2. 遺物	62
1) 土器	62
2) 石器	63
第2節 平安時代	66
1. 遺構	66
1) 住居址 イ) 第1号住居址	66
ロ) 第2号住居址	67
2. 遺物	68
1) 第1・2号住居址出土土器・陶器	68
第V章 まとめ	69

表 目 次

表－1 石室内遺物出土分布表	28
----------------	----

挿 図 目 次

第1図 位置図	1
第2図 遺跡周辺の地形	2
第3図 周辺遺跡分布図	4
第4図 墳丘地形図	17
第5図 莖石分布状況及び縦横断面図	21
第6図 石室実測図	22
第7図 周溝断面地層図	23
第8図 周溝断面図	24
第9図 羨道閉塞状況図	25
第10図 石室内遺物分布図	27
第11図 直刀実測図No.1	30
第12図 直刀実測図No.2	31
第13図 直刀実測図No.3	32
第14図 直刀锷実測図	33
第15図 刀装具実測図	35
第16図 刀子実測図	36
第17図 鉄鎌実測図	37
第18図 金環実測図	39

第19図 留金具実測図	40
第20図 繡実測図	42
第21図 雲珠・辻金具実測図	44
第22図 鞍実測図	46
第23図 鋸具実測図	47
第24図 鐙金具・釧実測図	48
第25図 鎏実測図	48
第26図 その他の金属器実測図	49
第27図 玉類実測図	50
第28図 人骨・歯の垂直分布模式図	51
第29図 石室内骨・歯出土分布図	54
第30図 出土土器実測図No.1	55
第31図 出土土器実測図No.2	56
第32図 出土土器実測図No.3	57
第33図 大甕実測図	58
第34図 遺構全測図	61
第35図 集石炉実測図	62
第36図 出土土器拓影	63
第37図 出土石器実測図No.1	64
第38図 出土石器実測図No.2	65
第39図 第1号住居址実測図	66
第40図 第2号住居址実測図	67
第41図 第1・2号住居址出土土器・陶器実測図	68

図版目次

原色

"

"

"

図版 1 源波古墳

" 2 源波古墳

" 3 調査中の石室上部

" 4 蓋石の状況

" 5 石室状況

" 6 羨道閉塞状況

" 7 周溝

" 8 側壁裏積

" 9 遺跡調査状況

" 10 遺構状況

" 11 視察状況

" 12 調査状況 1

" 13 " 2

" 14 " 3

" 15 遺物出土状況 1

" 16 " 2

" 17 出土遺物 1

" 18 " 2

" 19 " 3

" 20 出土金属器 1

" 21 " 2

" 22 " 3

" 23 " 4

" 24 " 5

図版 25 出土金属器 6

" 26 " 7

" 27 玉及び金属器 1

" 28 " 2

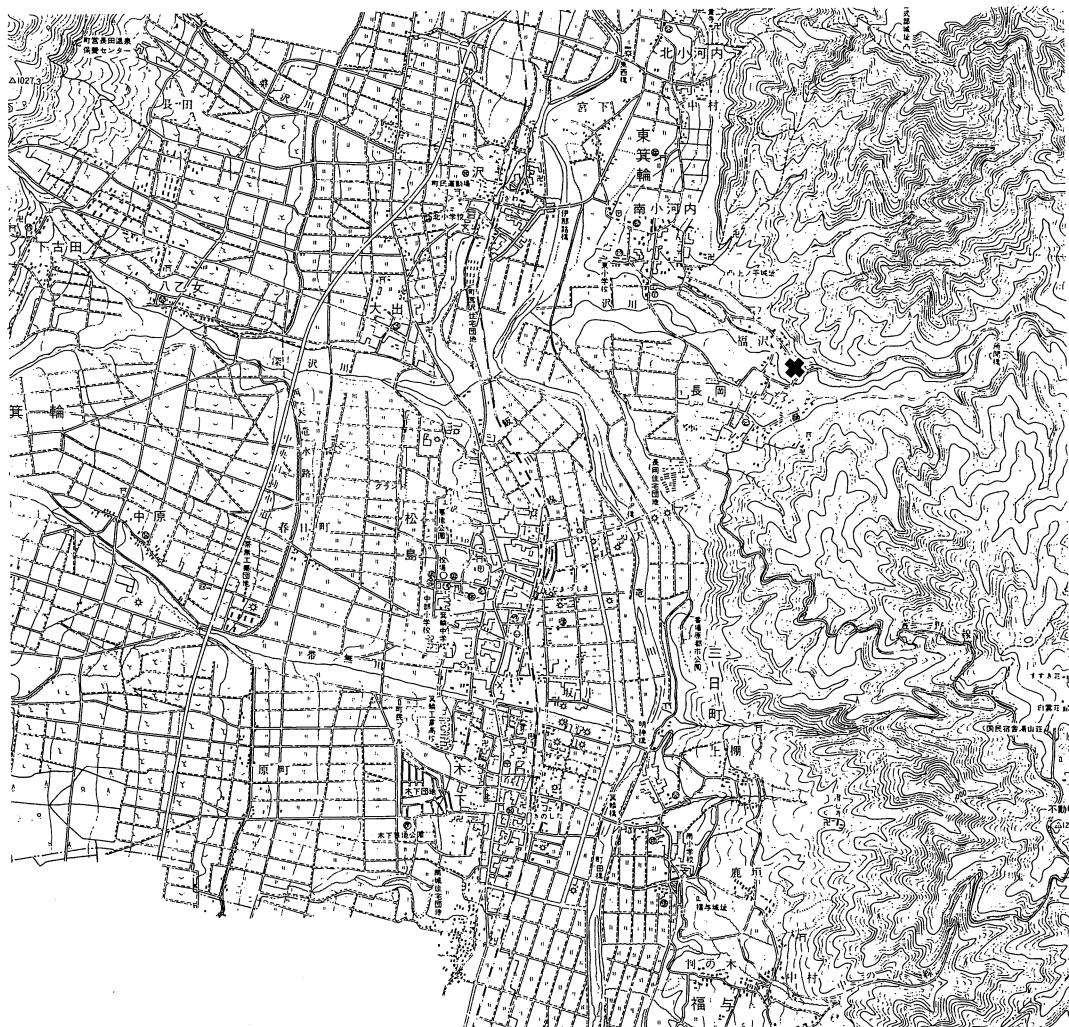
" 29 調査参加者

" 30 古墳復元状況

第1章 遺跡の立地

第1節 位 置

源波古墳は、長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪82番地に位置している。天竜川左岸段丘上の長岡区は、沢川の押し出しによって形成された扇状地であり、古墳はその扇頂部に在る。標高770m前後の山裾には、長岡神社、長松寺が位置している。天竜川との比高約100mを計るこの地は、箕輪町内から駒ヶ岳まで一望にできる絶景の地であり、王者の墓にふさわしい場所である。



第1図 位置図

第2節 自然環境

南流する天竜川に流れ込む中小河川は、扇状地や台地地形を形成している。天竜川左岸においては、箕輪地籍では、沢川が最も流路が長く、10km余を計り、この沢川によって形成された扇状地上に長岡区が位置している。一帯は西に面した緩やかな傾斜を呈し、土地が肥沃で、地深なため、根菜類の栽培に適し、長い間続けられている。古墳の所在する源波地籍も、長芋の栽培が行われている。この地籍は東側に山を背負い、北は沢川を隔てて、山が舌状に張り出し、日当たり良く、風も少なく暖かな場所である。

長岡の台地は町内では最も地味がよく肥沃な場所の1つである。この土が大きな経済力と権力を有する基盤となったと推定する。良い自然環境におけるこの地は、古代より人々の集まる所となり各時代を通して長く人々の生活の舞台として栄えたのである。



第2図 遺跡周辺の地形

第3節 歴史的環境

天竜川左岸段丘上一帯は、竜東地区と呼ばれ、ここには長岡区南小河内区及び北小河内区が東部の一単位として位置している。地形は天竜川沿岸水田地帯から小段丘や扇状地を経て伊那丘陵に連なっている。主な道路は伊那・辰野停車場線が天竜川に並行して走り、この間に県道南小河内・伊那松島停車場線がある。

この地域一帯の歴史的環境は、先史より近世に至るまで、密度の高い内容を示しており、大きな特徴は、いわゆる「長岡古墳群」と、「上の平城跡」が存在していることである。

古墳は長岡の台地上にほぼ全域に分布し、その数は30基前後にのぼったと伝えられている。しかし、現在は10基程度が確認できるのみである。現状では段丘上突端に位置する羽場の森古墳が最も形状の整ったもので、三基が連なっている。けれども、残存する石室の状況から推測した時、角畠古墳は石室を形成する自然石は2～3トンの大きさを有し、天井石の架構状況も一部残り円墳としては竜東地区においては最大級のものであったと思われる。

これは長岡を中心とした竜東地区に大きな力を持った首長の存在を物語るものである。また同区内には縄文時代の遺跡も非常に豊富で角道遺跡等遺物の出土も多い。また昭和61年度に調査を実施した源波第Ⅱ地点においては、縄文時代早期押型文土器の検出があり、数千年の昔よりこの地が人々の生活の舞台であったことを物語っている。

次に沢川を隔てた南小河内地籍には、前述した上の平城跡が位置している。上の平に城を構えたのは伊那源氏の祖といわれる源為公で、その時代は11世紀後半と考えられている。為公は上の平を中心に勢力を広げ、南信地方における一大勢力となった。城の存在した舌状台地は、南北の見通しもよく、築城地形としては非常に適した自然条件を整えていたといえる。

この地はまた、先土器時代からの出土遺物も検出され、柳葉形尖頭器等、町内では最も古い遺物の一つが確認されている。縄文時代に入ってからの遺物も豊富で、特に石鏸の検出数が多い。このように上の平は先史よりの歴史に最も興味深い場所である。

また、近年箕輪ダム建設による長岡新田地区の埋蔵文化財発掘調査において、出土した遺物は非常に古く、新田の歴史を一気に数千年の後方に引き上げたのである。そしてダム建設と共に継続されるであろう発掘調査によって、新たな遺跡、遺物が発見を予測される。このように源波古墳周辺の歴史的環境は実に密度の高いものである。



- | | | | | | | | | | | |
|----|---|----|----|-----------|-----------|-----------|----|----|-----------|---|
| ①源 | 波 | ②田 | 畠 | ③天 | 王 | 塚 | 古 | 墳 | ④おしりょう様古墳 | |
| ⑤御 | 射 | 山 | ⑥小 | 学 | 校 | 庭 | ⑦鹿 | 垣 | ⑧石 | 仏 |
| ⑨大 | 原 | ⑩矢 | | 田 | ⑪上 | | 金 | ⑫黒 | 津 | 原 |
| ⑬箕 | 輪 | ⑭猿 | | 樂 | ⑮南 | | 城 | ⑯北 | | 城 |
| ⑰上 | の | 林 | ⑯藤 | 山 | ⑯中 | | 山 | ⑰本 | | 城 |
| ㉑王 | 墓 | 古 | ㉒堂 | 地 | ㉓中 | | 道 | ㉔大 | | 出 |
| ㉕十 | 沢 | 坂 | 下 | ㉖羽場の森三号古墳 | ㉗羽場の森二号古墳 | ㉘羽場の森一号古墳 | | | | |
| ㉙中 | の | 森 | ㉚ま | せ | 口 | ㉛直 | 路 | ㉜久 | 保 | 畠 |
| ㉝上 | の | 平 | ㉞上 | の | 平 | ㉟日 | 向 | ㉞久 | 殿 | 敷 |

第3図 周辺遺跡分布図

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 調査の契機

上伊那郡箕輪町長岡新田地先に建設が進んでいる箕輪ダムは、洪水調節と流水の正常な機能の維持、並びに上水道用水の確保を目的としている。このダム建設によって大きな携わりをもつた地元長岡区はダム建設を記念して事業を計画・実施した。

それは「長岡・ダム記念公園事業」として、グランド造成、資料館建設、児童遊戯施設の建設、グランド周辺道路整備等である。

昨年（昭和61年度）資料館建設に伴い、館建設に先立って遺跡の発掘調査を実施した。建設地は源波遺跡の一部であったのである。

資料館建設地と地続きであるグランド造成予定地も、同じ源波遺跡が含まれていたのである。このためグランド造成計画の話しが始まった昭和60年9月には、県教育委員会文化課の担当主事立会にて、現地協議を実施した。その結果、グランド造成における切り土の部分と同地区内に位置する「源波古墳」は発掘調査を実施して、記録保存の方向で計画を進めることになった。

昭和62年県教育委員会文化課の指導のもとに調査計画を実施する運びとなった。なお古墳は発掘調査終了後、グランド脇に移転復元が計画、実施された。

第2節 調査の概要

- 遺跡名 源波古墳・源波遺跡
- 所在地 長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪82番地
- 発掘期間 昭和62年5月8日～6月23日
- 調査委託者 箕輪町長岡区
- 調査受託者 箕輪町教育委員会
- 調査団の構成は下記の通りである。

調査団

- | | | |
|-----|------|---------------|
| 団長 | 樋口彦雄 | 箕輪町教育委員会教育長 |
| 担当者 | 柴登巳夫 | 箕輪町郷土博物館主任学芸員 |
| 調査員 | 石川 寛 | 箕輪町郷土博物館学芸員 |
| 〃 | 竹入洋子 | |

発掘調査団員

井上武雄	後藤又市	藤森由幸	野村金吉	松本道枝	小池久人	唐沢清人
松田幸雄	唐沢正十	岡 正	小林光治	浦野 弘	山岸 工	井上 清
山内志賀子	荒川織光	山口雪枝	根橋とし子	小林信義	藤森秀男	唐沢光国
夏目元江	小平和子	堀内昭三	小松敬一郎	小松かほる		

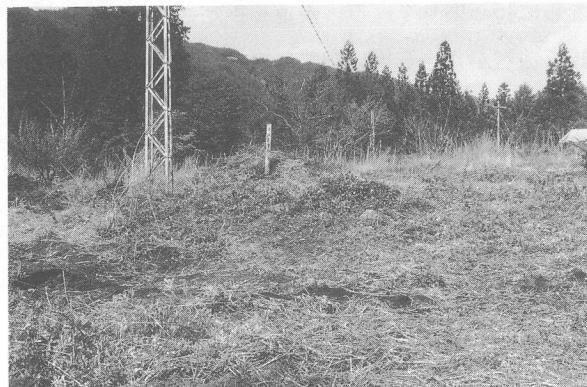
調査に関する事務局の構成組織は下記の通りである。

樋口彦雄	箕輪町教育委員会教育長
上島富作夫	箕輪町教育委員会社会教育課長
太田文陳	箕輪町教育委員会社会教育係長
柴登巳夫	箕輪町郷土博物館主任学芸員
石川 寛	箕輪町郷土博物館学芸員
赤沼悦子	箕輪町郷土博物館臨時職員

第3節 発掘調査日誌

5月8日 (金) 晴

先月発掘調査を終えた中山遺跡よりテント4張りと機材類を運搬して、発掘調査地近くに設置する。午後より作業に入り、まず古墳を覆っている雑草等を取り除いて、外観を出す事にする。葺石の一部と石室を構成すると見られる、やや大き目の石が二ヶ所に分かれ頭を出している。古墳全体の規模の推定が困難である。古墳の東に位置する遺跡の表土の排土と、排土作業終了部よりグリッドの設定を行う。



5月9日 (土) 晴

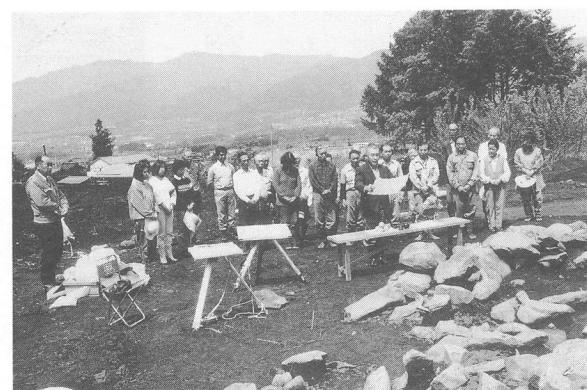
昨日に引き続き、墳丘上の整地を実施し、その後に幅50cmのベルトを東西に1本、南北に2本、直行するように設定し、続いて現状の測量を行う。30cmセンターによって図化する。地続きの源波遺跡の調査も平行しているため、調査地の東北の角からグリッド掘り作業を実施する。

5月11日 (月) 晴

昨日に引き続き、グリッド掘り作業。北側より掘り進む。土質が柔らかい為、作業は順調に進む。16グリッドの掘りが完了する。いずれのグリッドも遺物は散発的に若干出土したのみ。水道配管工事の跡が明瞭に出た為、管を傷つけないよう注意する。明日雨天を予想するので、休憩後機具機材置場が大雨に耐えられるよう整備する。

5月12日 (火) 曇

本日より古墳の発掘を開始する。50cm幅のベルトを設定し、6区に割る。作業は第1班から第4班までグループ分けし、4班は測量班である。各班ごとに古墳の排土作業を行う。縄文、土師器、須恵器片が10片ほど出土する。今日の時点では前庭部、羨道部等の確認はできない。明日も引き続き墳丘上の発掘を実施する予定。



5月15日 (金) 晴

各班混成で4、5、6区を先日よりさらに15cm掘り下げる。羨道を推定される積石が4、5区に列状に出る。当初石室と推定した位置から大分はずれた場所に石群が集中している。葺石も出はじめた。古墳の直径は20mに及びかなり大きなものと考えられる。墳丘の高さの実測、葺石の実測にかかる。

明日も引き続き葺石の実測を継続する予定。



5月16日 (土) 晴

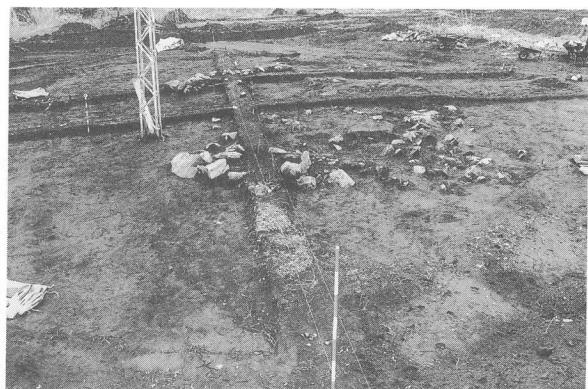
古墳の全景を鉄塔の最上部に登って撮影する。撮影終了後、ベルトをはずす作業にかかる。ベルト部分より須恵器、灰釉陶器、黒曜石等の破片が出土する。テントの入口近くからすばらしい石器が発見される。2班と3班は石室内部の排土作業に手を付ける。土師器、黒曜石等少數出土する。測量班は葺石の測量をする。

5月18日 (月) 曇

9時50分頃まで古墳の周辺を重点的に発掘する。10時から普済寺の太田住職により古墳埋葬者の慰靈祭を行う。上島課長、長岡区の山口豊春さん、旧地主の柴さん等が作業員と共に参列した。本日から測量班は2組に分かれ1組は第6区、もう1組は第4区及び第5区の葺石と羨道、玄室の石積の測量にあたる。周辺近くの葺石の間から須恵器、灰釉等が出土した。

5月19日 (火) 晴

再度ベルトを残すためピンポールを立て、水糸を張る。地層断面の測量をする。ブルドーザーでの整地が一応できたので、1班は遺跡のグリッドを全面に設定。東の道路側にアルファベット表示を、北の資料館側にNo.の杭を打つ。又、1号住居址の手掘り作業をはじめる。1号住居址は古墳の東に設定したグリッド北西側に出た平安の住居址である。2班、3班は古墳の4、5、6区を発掘して、葺石の付近を昨日より50cm程掘り下げる。5区から1個体と思われる土器片多数出土。写真撮影する。9時30分、長岡区長以下3名が、又午後2時40分に樋口教育長が訪れる。明日も1号住居址発掘予定。



5月20日 (水) 晴

1班は前日に引き続き1号住居址を担当。床面が明瞭に表れる。土師器7点が出土し、水洗い後写真撮影を行う。地層断面図をとる。2、3班は始業時より約1時間、5、6区に入り葺石付近の発掘調査。その後3、4区の発掘をする。3、4区の間のベルト付近より「鉄製品」が出土。葺石の状況が大分明瞭になってきた。須恵器の大型のものの上部が5区から出土。4区のベルト近くの外周より焼土が出、骨らしい白い粉も出土する。古墳の外周をブルドーザーで排土。周辺の外周をバックホーにて掘り下げ、作業しやすいようにする。休憩時、天王塚古墳の調査報告書が配布され、内部の石の配列や出土品について勉強会を行った。

5月21日 (木) 晴

始業時より4区と6区の葺石等の測量を終日行う。明日も継続の予定。2、3班は周辺全域の排土作業を終日行う。土器、金属の出土状況を写真撮影する。前庭部から刀の鍔出土。前庭部を中心に土師器、須恵器、高壺が多く出土した。暑さも加わり、午後になると作業員の疲労の声を聞く。

5月22日 (金) 曇

1号住居址発掘完了。かまどは耕作により攪拌させられたためか残っていないが、焼土が多く出る。写真撮影完了し、測量も一部を残すのみ。古墳は前日に引き続き周辺の排土作業を行なう。1、2区で周辺が確認できた。全域にわたり土器、金属類等多数出土。金環1、金銅製金具1、馬具と思われる鉄類、壺蓋完形品、高壺の脚部が出土する。前庭部付近羨道入口の葺石測量継続中。降雨のため3時40分にて作業終了。明日は日曜日との繰替休日とする。

5月24日 (日) 晴

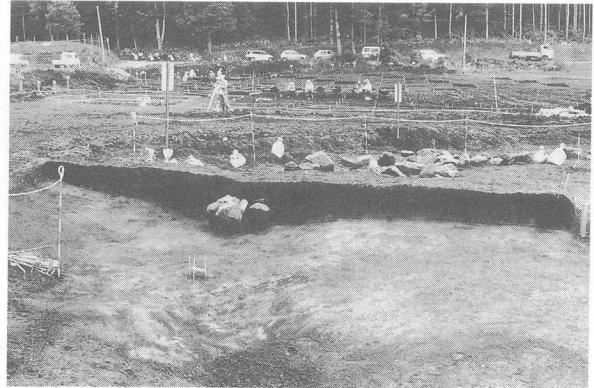
23日から24日早朝までの雨で、発掘現場は水びたしである。大雨洪水警報が出た程の降り様でシートをかけておいても水が流れ込み、排水に手間取る。古墳の方は長岡区の婦人会と老人クラブの見学があったので、全員でグリッドの方の掘りを進めた。C・D・E列の6・7・8グリッド内に縄文住居址



と思われるものと集石が出土するも今
の處では不明。各グリッド共攪乱が多
く土器片が散見するのみである。明日
もグリッド掘作業を進める予定。

5月25日 (月) 晴

古墳周辺は23日の雨で足場が軟弱で
あるため、午前中は全員でグリッド掘
りを実施する。縄文土器が少量出土す
るも住居址は明確にできなかった。今



後は南側グリッド掘り作業に期待をつなぐ。午後は測量班は3、4区の葺石の測量と1、2区
の周辺付近の葺石測量に入る。

5月26日 (火) 曇

No.2・3・4ベルトの断面をそれぞれ整地し、写真撮影を行う。攪乱跡がある。昼食後、こ
の古墳の大きさ、概要説明が行われた。想像以上の大きさに驚いた。6月中旬迄かかりそうで、
大変な作業である。1・2・3区の葺石測量終了。本日の午前中をもって葺石の測量を全部完
了する。午後は1号住居址平面測量、古墳ベルト地層断面の測量をする。

5月28日 (木) 晴

昨夜の雨でシートの上に相当量の水がたまり排水する。もう何回も繰返しである。古墳周辺
全域および葺石の整備清掃作業を行う。整地完了後三方より古墳全形写真撮影をする。3時す
ぎよりNo.3、5のベルトをはずして調査する。No.5のベルト内より須恵器片多数出土する。各
ベルトの地層断面測量終了。第4区前庭部右側付近の葺石の傾斜状況の実測をする。本日で古
墳発掘の半ばに達した模様である。土篩い作業も併せて行う。

5月29日 (金) 晴後曇

1・2班は午前中はグリッド掘り作業。3班は古墳のベルトを取りはずし調査を行う。午後は
作業を交代する。グリッドからの遺物
は極めて少ない。又、前回出土とほぼ
同じ第3区周辺より金環1個が出土す
る。5・6区の葺石をバックホーと一
輪車で域外に運び出して、復元する
とき使用できるよう1ヶ所に集める。古
墳東西の全体断面測量、No.3・5ベル
トカット後の葺石の測量を行う。昨日
より前庭部及び羨道部の排土を篩にか



けているが、現在のところ目立つものは出てこない。

5月30日（土） 晴

古墳復元敷地確保のため、10時からテントの移転をする。周辺の排土作業を行い、3区の鉄塔近くより馬具と思われる鉄製品が、2区より高壇2点が出土する。須恵器片も多数出土する。

測量作業はなし。助役、収入役、課長等

視察に見える。いよいよ月曜日からは墳墓の主体部発掘に入る。

6月1日（月） 晴

本日より羨道と石室の掘りにかかる。石室上部より馬具の一部で銅に金箔を施した物1点、刀子、鉄鏃が出土する。又、羨道より須恵器の碗と蓋らしきものが出土。5区より礫が1個体に近い形で出る。周辺の掘り下げも引き続き行う。午後、玄室石積上層部の平面測量をする。周辺断面の実測も行う。見学者が多くみえるようになってきた。明日以降の調査が大いに期待される。

6月2日（火） 曇

玄室、羨道の掘り下げを行う。今日の作業で約20cm程レベルを下げるが羨道入口部は閉塞石が重なっていて調査に手間どる。玄室内より金箔の残っている馬具の一部と思われるものと鏃2点が出土。4区より刀の锷と思われる鉄製品出土。日増しに慎重な発掘作業となる。午後から周辺4区の排土作業実施。土師器、須恵器等少数出土。測量は玄室石積上層部の平面測量と羨道上部の断面測量を行う。又、古墳東側のグリッドを拡張し掘りを進めたが、住居址は発見できなかった。明3日は雨模様につき、休日とする。

6月4日（木） 快晴

午前中の玄室発掘調査では目新しい出土品は出なかつたが、午後になって大物が顔を出した。直刀が3振り、羨道の側壁に立てかけてある。通常の出土状況と違つてるので明日からの発掘に期待したい。鉄鏃3、刀子2、高壇1等が出土する。玄室内に落下した大石が掘りの邪魔をしている。2号住居址、集石炉、かまどの平面測量と羨



道内に崩れ落ちた葺石等の平面測量を行う。主体部の発掘に重点を置いているので、篠にかける土が多くなり、1人での作業が大変なので各班から助手交替で出すようとする。休憩時を利用して勉強会を行う。H2住居址内の集石炉を半カットする。小児の頭大から同じく握り拳大の石が直径1m程の穴の中にぎっしり埋められ、高熱で焼かれた石は少しの衝撃でも割れてしまう。太い木が炭になって見え、集石の上部には動物の脂が沁み込んだと思われる石で、その間には煤と思われるものがつまっていた。

6月5日（金） 晴

玄室内に落ち込んだ石の平面測量を行い、位置、レベルを記録する。掘り下げる毎に石が露出してくるので、順次補足測量を行う。午後、職人の若木屋さんによって玄室に落ち込んだ石の運び出し作業が行われる。玄室より平根鎌1、馬具の金具2、人骨2ヶ所、羨道中央部より高坏の皿部を欠いたもの1出土。日本考古学会員友野先生が視察され、30分程度講話を受ける。今日、明日で古墳の発掘作業も終盤に入るので、玄室内は特に慎重に作業を進める必要がある。遺跡グリッドからは縄文、黒曜石が若干出土したのみ。教育長、学校教育課長、長岡区長、伊那毎日、箕輪新聞、有線放送外来訪者多し。

6月6日（土） 晴

昨日から真夏を思わせる暑さが頭上から照りつける。昨日の最高気温は32度以上とか。玄室内は蒸し風呂の中にいるようだ。赤土が細かいほこりとなって中の作業者に降りかかるので、水を付近にかけてほこりをしづめて作業をする。玄室の左側鏡石より手前2mあたりから金環出土。同じく右側より金環、人骨（頭部と思われる）出土。羨道内の閉塞石の平面測量と、羨道と玄室の界付近の集石を平面測量する。出土した遺物の位置、レベルを記録する。グリッド掘りも引き続き実施するが、縄文土器片少量出土するのみ。箕輪北小学校の児童が学習に来る。作業は午前中で終わりとする。

6月8日（月） 晴

終日風強し。作業開始早々、前庭部の篠出し中より金環が出る。金環をは



じめ人骨、歯、鉄鎌、刀子、馬具、鏡、
土器等40点余り出土し記録に忙しい。
午後に入つて直刀が石積に立て掛け
てあった場所の下から横に並べて直刀が
4振り出土する。羨道閉塞石の平面測
量と断面実測をする。遺跡グリッド掘
りを続けるも縄文土器片が少数出土す
るのみ。長岡区、地主さん、公民館長
課長等が見学に訪れる。



6月9日（火）曇

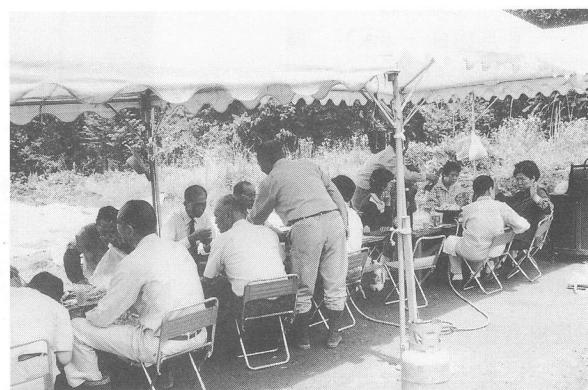
総員が玄室、羨道の発掘調査にあたる。10時頃、県文化課の小林主事がみえられ、現場へ入つて作業の進め方や古墳全般に対して指導を受ける。出土遺物は金環をはじめ20点あまりである。出土遺物の位置及びレベルの記録をする。午後玄室、羨道の上にテントを張り、南北にシートをかけて主要部に雨が入らない様にする。上古田婦人会、町議会、総務委員会が教育長と共に見学に訪れる。雨のため作業は3時で中止。

6月10日（水）曇

昨日午後からの雨は相当量のものであったが、厳重な防水対策をしておいたので主要部の浸水を防ぐことができた。前庭部の葺石除去始まる。ガラスの首飾りの玉約40個、馬具、人骨、高壙の上部等多数出土。亀腹の敷石と思われる平たい石が見えだした。羨道、玄室の積石がだいぶせり出して危険と思われるので、出入りは羨道入口からのみにして、石積の上にはロープを張って立入禁止とする。出土遺物の位置、レベルを記録。玄室内人骨の平面測量。羨道より玄室入口に至る配石状況の平面及び断面実測。地元の見学者数人。

6月11日（木）晴

古墳の発掘調査も今日あたりが出土品のピークになった。記録が間に合わぬ程出る。馬具で
飾り金具の雲珠、ガラスの親玉、金箔
の刀鍔、金鍍金のリング等出土する。
金環の数も通算16個となる。午後3時
すぎ、前庭と羨道を閉ざしていた閉塞
石の取除き作業をする。玄室の亀腹も
全容を現す。又、周辯の整備、東側の
トレンチ掘りもして、縄文、須恵器片
が10点程出土する。羨道閉塞石断面実
測及び前庭部左側葺石平面測量をする。



午後文化財保護審議会委員の視察があつた。今日で全員の作業は終了し、発掘作業は交替で行う事にする。測量は当分続ける

6月12日 (金) 晴

作業範囲も狭くなり、人員を縮小する。遺物の出土もそれほど期待しなかつたが、予想に反して曲玉ほか40点ほど出土する。昨日に續いて出土遺物の位置、レベルを記録する。羨道左側葺石平面測量及び断面測量、玄室亀腹平面測量をする。長岡区長外見学に訪れる。古墳復元時の天井石が運搬されてきた。

6月13日 (土) 晴

今日で発掘作業はほぼ終了する。遺物も出尽くした感あり。9点を記録するのみとなった。玄室内亀腹の平面測量。出土遺物の位置、レベルを記録する。箕輪東小学校児童が見学にみえる。

6月15日 (月) 曇後雨

墳丘右側の葺石の一部を取りはずして運び出す作業とその下を発掘調査する。作業前より空はすっぽりと厚い雲が垂れ下がり、今にも雨が落ちてきそうな気配。測量もできない。9時30分頃よりついに降り出し作業を中止する。

6月16日 (火) 晴

発掘も測量作業を残すのみ。周溝全測及び断面の各点を記録。玄室亀腹平面測量及び断面測量。羨道床石及び側壁底部平面測量をする。箕輪西小学校6年生及び先生方の見学あり。

6月17日 (水) 晴

古墳玄室、羨道の断面測量、亀腹及び側壁底部の平面測量をする。側壁石積の平面測量準備を行う。狭い所での作業であり、思うように作業が進まない。辰野町の発掘調査団が見学にみえる。

6月18日 (木) 晴

3組に分かれ測量に入る。羨道より玄室までの石積を測量する。積石が入り組んでおり作業が困難である。

6月19日 (金) 晴

古墳主体部の測量も1週間を経過し、測量担当者も昨日あたりから疲れが目立っている。本日が測量最終日と決め



終日頑張る。3組に分かれて平面測量を進めているため、実測図の繋ぎ目の部分に注意して行った。実測図も数十枚を越しており、発掘調査が始まつてから、ほとんど実測に終始した測量班の方々に心からお礼を申し上げたいと思います。

本日をもって調査のほとんどが終了した。

6月23日 (火) 晴

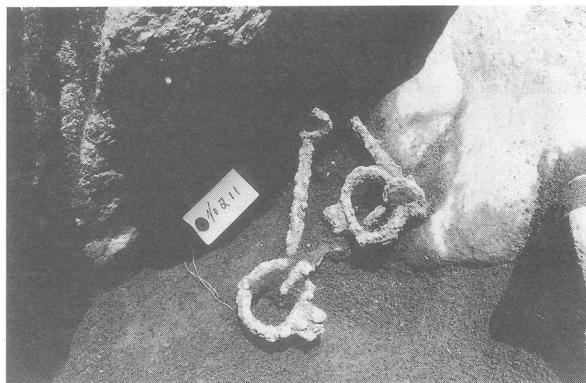
一部調査を残した為、本日その作業を実施。石室を構成する側壁の裏積み状況を調べることであった。自然石を乱積みしているので裏積みを十分に施し、石の移動や狂いが無いようにしてあるものと推定したが、裏積みはほとんど無く、ロームの赤土を練って、詰め込んでいた。石の少ない所での考えた結果であろう。

調査のすべてを本日で終了した。

6月30日 (火) 晴

古墳被葬者の慰霊祭を行う。正装した普済寺住職により読経があり、参列した町代表者、長岡区関係者、調査に参加した全員により焼香し、式を終わった。

厳肅な慰霊祭を実施できたことで、発掘調査の区切りができた。



第Ⅲ章 古墳の構造と副葬品

第1節 遺構

1. 古墳周囲の状況

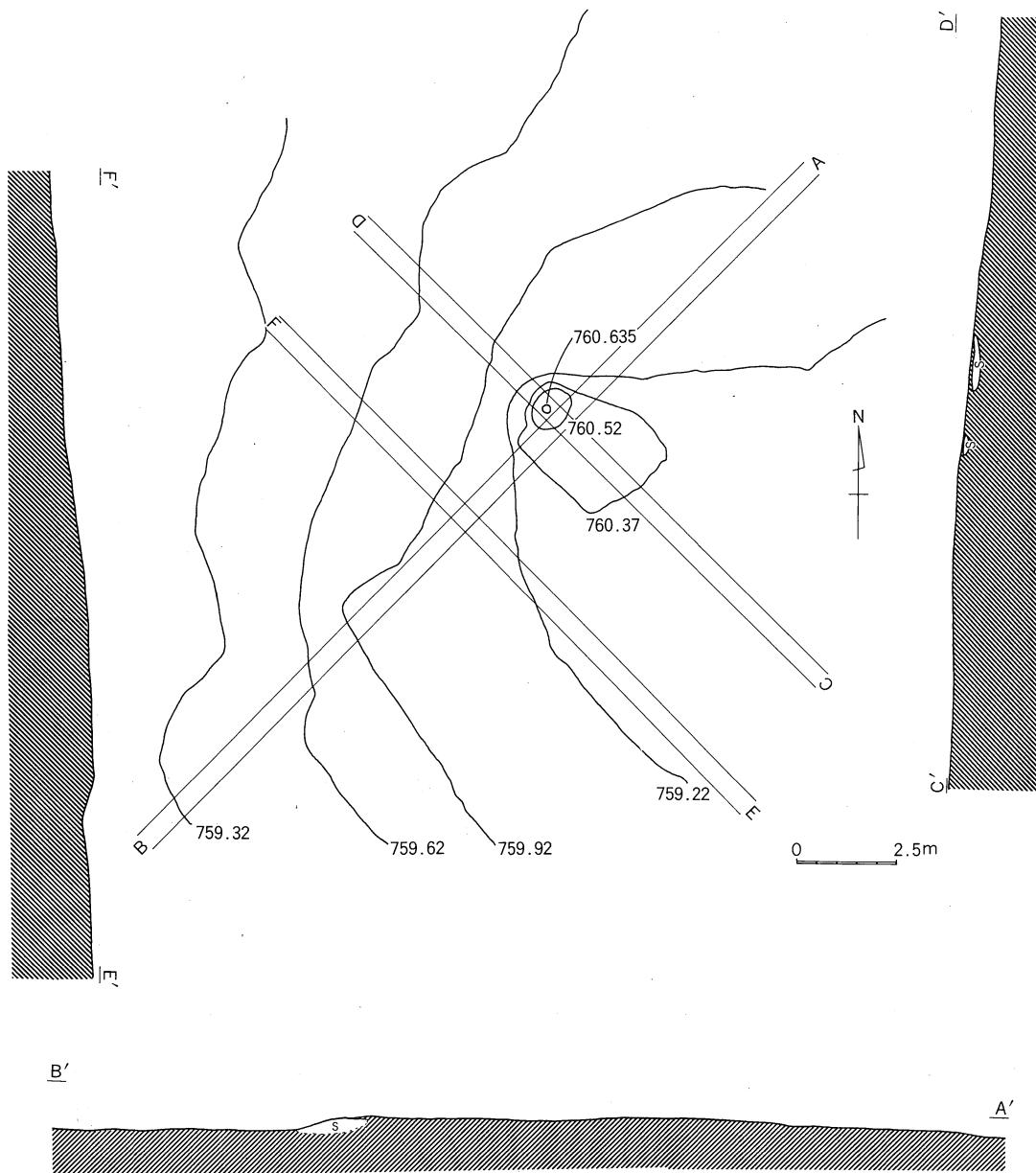
長岡は天竜川東の段丘上にあり、扇状地がエプロン状に西に張り出している。自然環境は前節に記したが、古墳の立地する源波地籍に立てば、箕輪町内はほぼ全域を、また南は伊那市、北は辰野町の南部まで、まさに一望できる場所である。古墳は長岡区内に点在する古墳群の中において、最も東側の山際に位置している。いわゆる扇頂部である。本古墳の周辺はかなり以前より畠地として開墾され、根菜類の栽培が長い間続けられたこともある。地形はしだいに変化したものと推定できる。古墳の位置する場所は周囲に梅の木が植えられ、梅畠となっていた。西に緩やかな傾斜を呈しているため、日当たりは良く、北側には山が舌状に張り出しているため、全体的に暖かな場所である。



古墳から南側の梅畠を見る

2. 墳丘

古墳周辺の一帯は西に面して緩やかな傾斜を呈しており、現在の山裾から数十メートルに位置している。畑の中の梅の木は植えられて20年も経過して、大木になっているもの、また植え



第4図 墳丘地形図

られて2年程度の若木といろいろである。墳丘の位置する畑には根元の径が3～5cmほどの若い梅の木が植えられている。また2年間ほど手入れがされない畑であるため、雑草は伸び放題である。墳丘は長い間にしだいにくずされ、ほぼ平坦にならされている。わずかに径3m余で高さ1m弱の盛土が見られるだけである。ここに「源波古墳」という白い木柱が立てられ、位置を記している。この墳丘は長芋栽培の際に、掘り上げられた葺石を耕作者が同一の場所に集め積み上げたものであった。その古墳主体部の位置とは数メートル離れていたのである。上部を覆っていた雑草を取り除いてみると、全体的に周囲よりやや高い円形の盛り上がりを見ることができた。そして羨道入口に当たる部分を中心にやや大きな石がわずかに頭を出している。標高は、759～760m前後を示し、第4図の発掘調査着手前の地形測量図を見ても、墳丘の状況を推測することは難しい。

調査を実施し、その状況を見ながら墳丘の原形を推定すると、

墳丘の径（東西）約20m

墳丘の高さ 推定3.5～4m

墳丘の裾部の葺石の配列状況を基準にして径を測定したが、周辺が全周しているため、周辺外径まで測れば径は23m余を示す。高さを推定する基準とすべきものはないが、ほぼ全周している葺石の傾斜などを考慮し、3.5～4mと推定できる。

次に古墳を覆っている葺石について述べると、第5図は葺石の配石状況を示すものである。周辺及び墳丘裾部に集中している葺石は全体的にはかなり移動しているものが多いと思われる。玄室の北側に積み上げられた一群は、小さなマウンド状を呈していた。これは北東の一角に全く葺石のない部分が見られるが、ここは葺石は長芋栽培時に掘り上げたものである。この一角を除いた他はバランスのとれた配石状況を示している。

葺石の状況で最も特徴ある部分は、羨道入口の左右で、裾部に大きな平石を墳丘の勾配に合わせて押し付け、これを根石にして段積みをしており、墳丘の同じ高さに添って列状に並べた状況を見ることができる。当時はこのように整然と列をなして数段の葺石が配されていたのであろうか。

3. 内部構造

1) 概要

古墳の主体部すなわち遺骨を埋葬した設備は墳丘の中央やや奥に位置し、玄室の奥壁を北東に、南西に開口する羨道を有する片袖式石室で、主軸の方向はN45°Eである。

石室の平面は羽子板状の長方形を呈し、ロームを掘り込んで構築されている。その規模は全長11.5m、玄室長7.5m、玄室最大幅1.65m、奥壁付近1.45m、玄門部付近で1.05mを測る。羨道長は4m、羨道幅0.95m、羨道入口付近はやや狭い状態となっている。

石室はすべて自然石を使用し、奥壁は約3トン近い大石を鏡石にして据えている。平らな面

を前に出し、足の長い控えのある石を用いているため、安定感がある。次に側壁は平坦な面を内側に向けて使用しているものが多く、特に根石には比較的四角形で大きな石（0.5～1トン）を用いている。その上に大小様々な自然石を積み重ねた乱積みになっている。比較的大きな石は平らな面を前面に出し、小さな石は小口積みにしている。壁は4～5段の石が残り平均的高さは1.2mを測る。積石が上部になるにつれ控えのある細長い石を用い、持ち送りに耐えられるようしている。石室床面と側壁のなす角度は平均で83度を示し、1m上がって約13cmほどせり出している。次に天井石であるが、調査中には一枚も検出することは無かった。これは長い間の耕作中に掘り出されたものや近隣の建造物の土台やまた畠の石垣等になったと推測できる。天井石までの高さを170cmくらいと推定すると玄室部における架構幅は1.2m前後になる。この幅に架構できる天井石は、畳ほどの大きさが必要である。その大きさで玄室最奥部から羨道入口まで並べるには約13個の平石が並べられていたと推定される。次に側壁の裏積み状況についてであるが、発掘調査の最終日に玄室側壁の裏積み状況について調査を行った。野石で石垣を築く場合を見ても積み石の裏側には、小石を十分に入れて、石が動かないように強化している。このような状態を予想して側壁裏側を掘ったところ、裏積み石は全く使っておらず、その代わりにロームを練り、石の間に詰め込んでいた。この調査をしながら古墳築造の順序が一部解明できたと思われる。それは、まず墳丘の大きさや石室の長さ等は当然考えた上で設計が行われたと考えるが、主体部構築の順序として、ローム層を長方形（4×13m程度）に掘り根石を据える基盤と側壁を調整し、奥壁から石が順次据えられたものであろう。側壁の石裏と掘られたローム面との空間に練り上げたロームを詰め込んで固めている。これは型板をしてからコンクリートを流し込んで固定する作業と同じことであり、乾いて固まったロームは非常に堅く、側壁の固定には大変な効果をもたらしている。石の少ないこの場所で考えられた知恵であろう。第7図版は裏詰めのロームの状況を示したものである。

2) 玄室

石室全体の概要については前述したが各部分について少し述べると、玄室は長さ7mを測る規模の大きなもので、主体部の調査が進行した中ほどでその概要を知ることができた。玄室内に堆積している土を除き始めて、60cm程掘り下げた状況で図版2に示すような積石状のものが二ヶ所現れた。奥は鏡石の面から約2mに位置し、次の積石はそれから約2mの間隔を示している。この積み石は玄室を間仕切りして三つの室に分けているようにも感じる。この施設の石は長方形の平石が多く、人頭大から枕大のものが多い。この間仕切り施設と考えられる石積が確認されるのと平行して、最奥部の室内の土質に変化が認められた。それは奥壁前の一帯範囲が、他と異なり、柔らかく、黒味の強い土になっているのである。この状況は床面上20cmほどまで続き、この間における副葬品はかなり少なくなっている。これは主体部の最奥部に狙いをつけた盗掘者が、天井石を取り除いてその範囲を掘ったものではないかと推測した。

他の玄室内は攪乱された状況という見方ではなく、追葬の際に、玄室内の片付けや整地をしたのではないかと見られる。人骨や金環・小さな鉄製品が移動している状況で検出されたのはそのためではないだろうか。盗掘が無かったわけではない。

次に玄室の形と石積みの状況であるが、奥壁に向かって左側壁は、玄門部から鏡石まで、ほぼ直線状を呈しているのに対し、右側壁は、玄門部付近から2mの間、円弧状に外に張り出しながら広くなっている。最も幅の広い部分で1.65mとなり、ほぼこの幅が3.5mほど続き、鏡石に近づくにつれ、緩やかに狭くなっている。

次に玄室内床面は割石の平らな石を敷きつめている。中央部に約1m²程度敷石が全く無い部分が見られるが、他は透き間を作らないように美しく並べている。この平石は、沢川の右岸に産する場所があり、そこから運んだものと考える。ほとんどの石が粘板岩である。

次に玄室入口の玄門部であるが、多くの場合羨道に差し渡しになるくらいの細長い石で仕切りをしているものを見るが、本古墳においてはそうした仕切り石も見られず、床面のレベル差も感じられなかった。両側壁の石積み状況が玄門部において、羨道と区切りをしていることが認められる。特に右側壁は15cmほど広くなり、片袖状の形をよく示している。

敷石の上には黒土が混入して、河原石の平石が、ほぼ同一レベルで散在している。一部配石のような状況も見られた。木棺をのせた枕石であろうか。玄室内部には排水設備は認められなかった。

3) 羨道

南西に開口する羨道部は長さ4m、幅は玄門部で0.95m、中央部もほぼ平行状態で、羨道入口部はやや狭くなっているが、裾部は外に向かって左右に開いていたようにも感じられた。羨道部の側壁は玄室のそれより持ち送り状態が緩く、ほぼ垂直に近いものであった。石積みも4～5段が残り1m～1.2mの高さを示している。羨道部床面は、玄室内のような石の敷きつめではなく土間状である。一部玄門部付近で平石が見られる。床面の勾配は玄室をほぼ同一レベルでそのままの状態で前庭部に続いている。

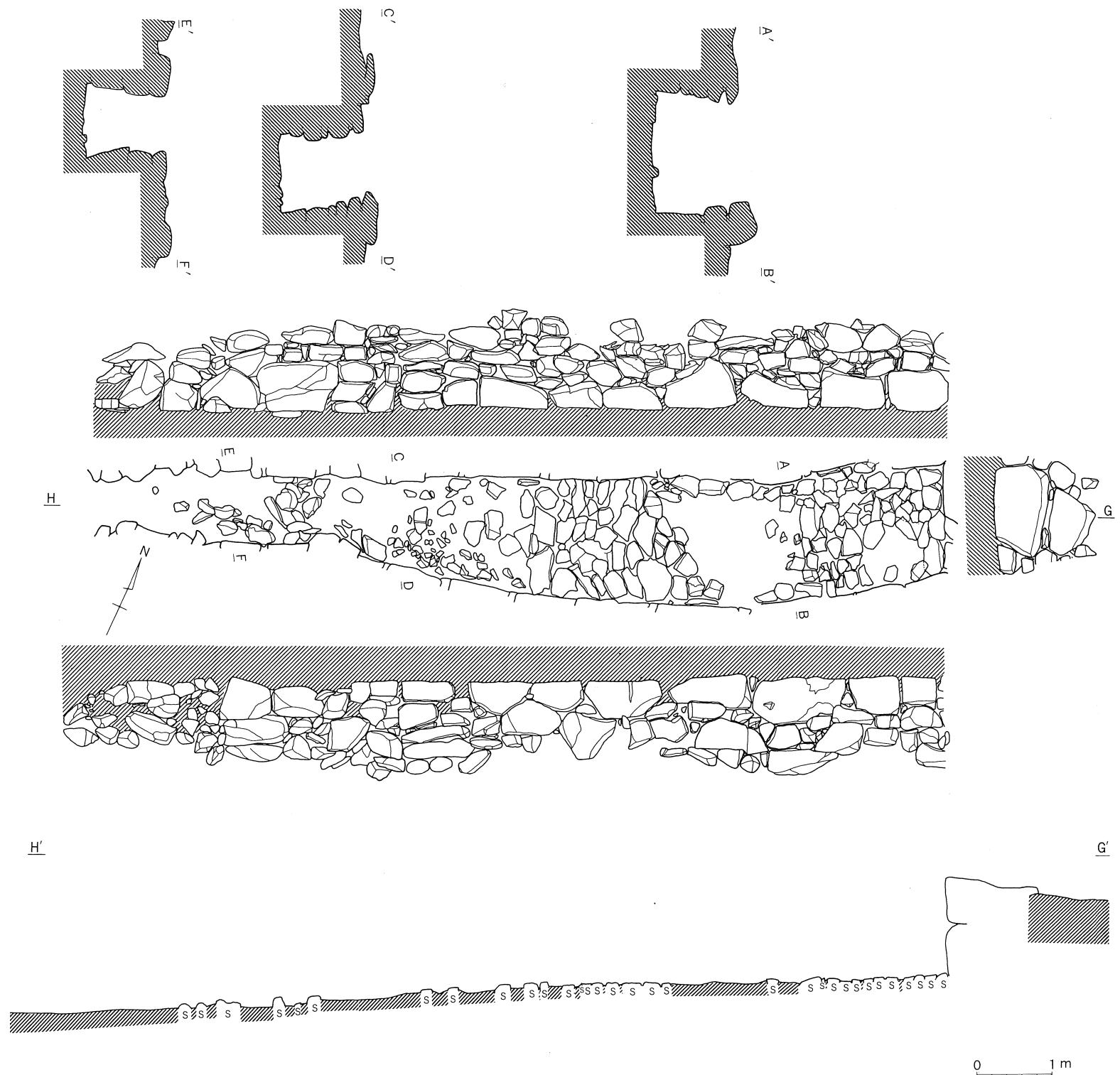
次に羨道部における閉塞状況であるが、4mの羨道ほぼ全体に石積みがなされている。第9図及び図版6の写真は石積みの状況を示すものである。写真で見るように入口と奥部共に根石は大きな平石を用いて階段状に積み、その上は河原石を乱積みにしている。石の量や閉塞している長さからして、非常にしっかりとした、厳重なものである。

4) 前庭

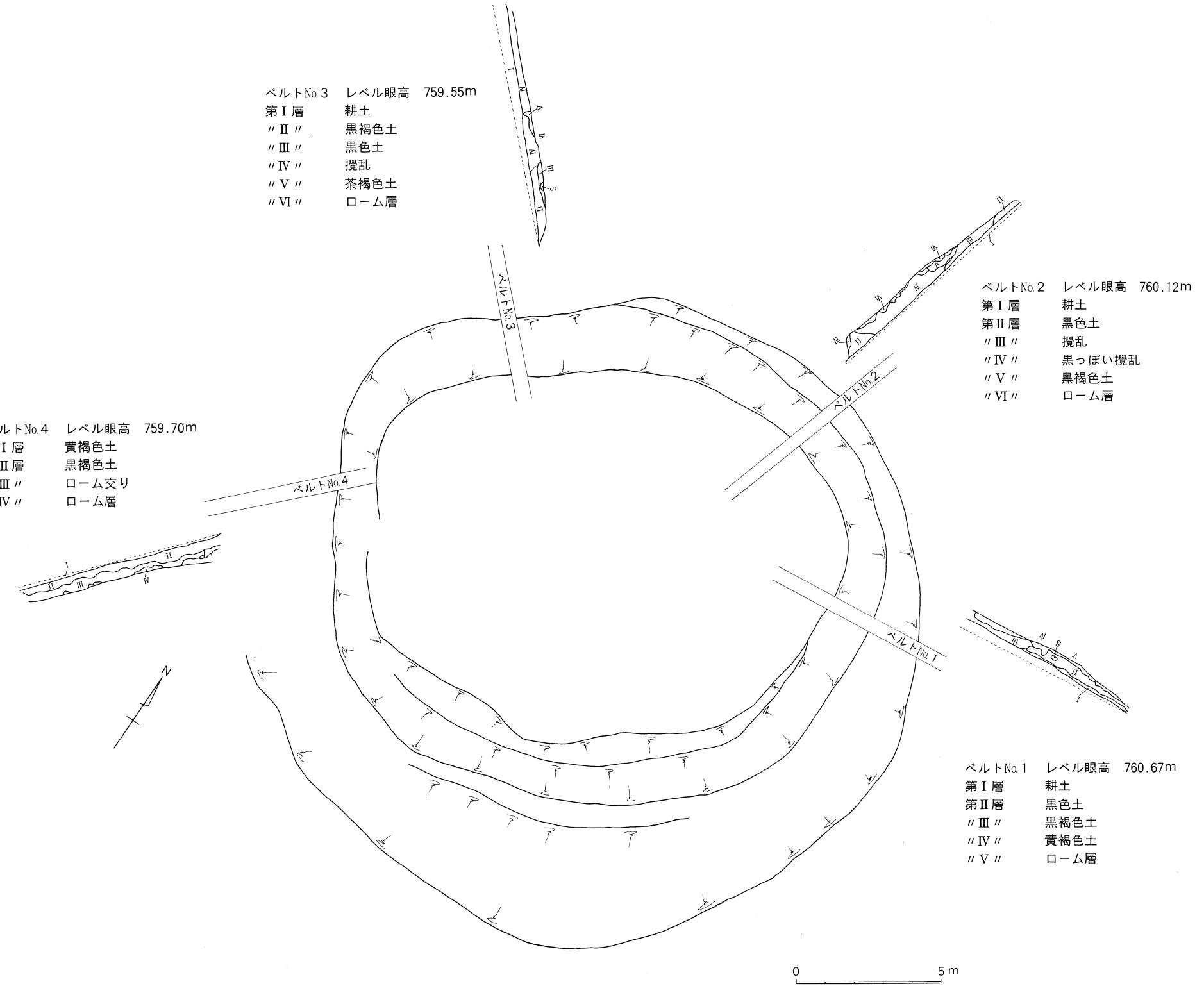
羨道入口の前部分をいわゆる前庭部と称し、埋葬後における祭祀的な行為が行われた場所と考えられている。本古墳においても、前庭部に当たる場所は周辺の落ち込みもなく平らにならされていた。また供獻に用いられる須恵器、土師器等がここから集中して検出されている。本古墳においてもこの位置で墓前祭的な行為が行われたと推測できる。また羨道部左脇から焼土



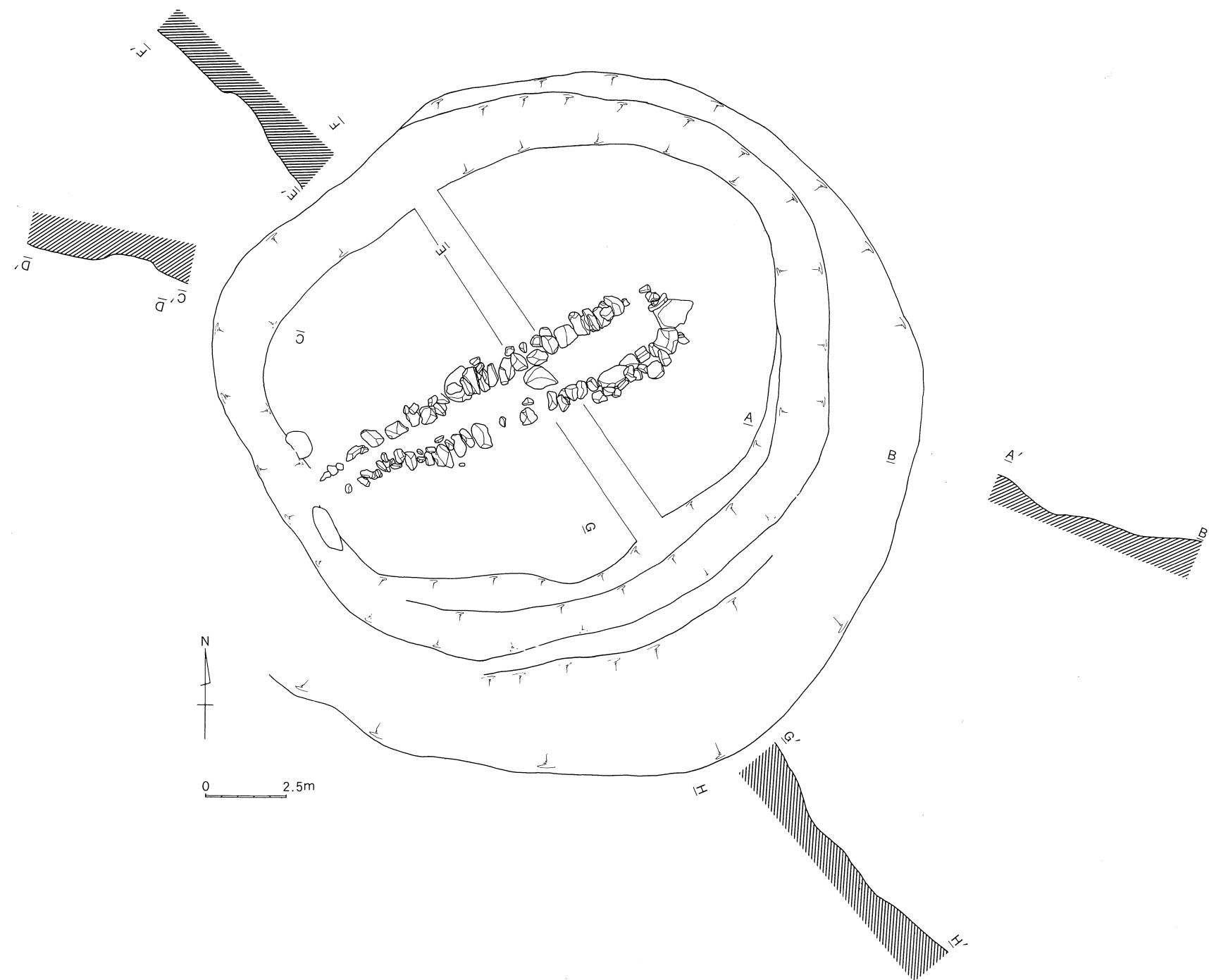
第5図 古墳葺石分布状況及び縦横断面図



第6図 石室実測図



第7図 周辺断面地層図



第8図 古墳周溝断面図

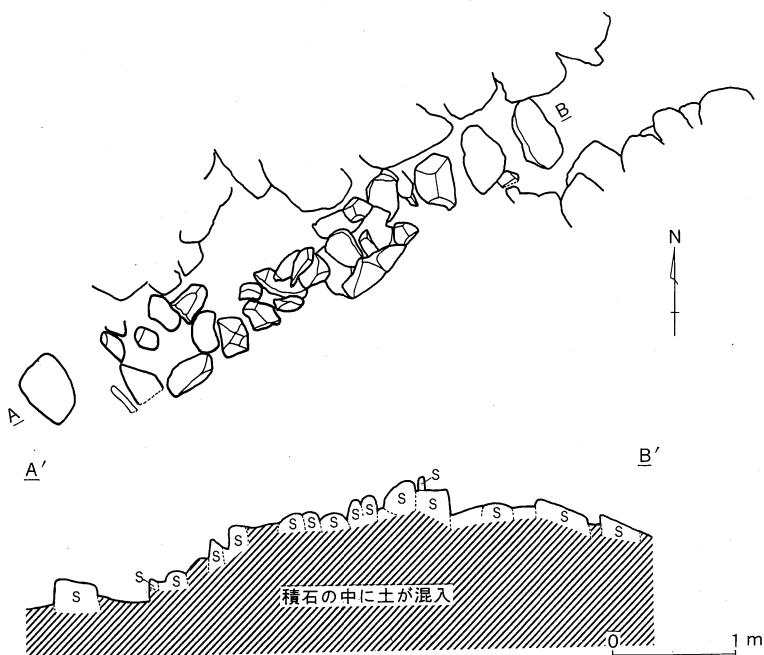
が検出されている。これは火を焚くことによって、魔除け的な意味を持って行った行為ではないかと考えたい。

次に発見された須恵器の多くは故意に破碎されたような状態で破片になって散乱している。このような状況は他の古墳にもよく見られると聞くが、本古墳においても、形を留めるものはごくわずかであった。これは葬送の儀礼を使ったものを二度と使わないように破壊して遺棄したものであろうか。追葬が何度かあったと考えられているので、それ等の行為も回を重ね、量も多くなったものと考えられる。

前庭部には祭壇施設と見られるものはないが、 3×3 mくらいの範囲がよく平らにならされていた。

5) 周溝

第8図は主として周溝の状況を示すものである。墳丘の袖部をほぼ一周するように周溝が認められる。前述したように、前庭部には堀状の落込みは認められないが、他の部分は非常に顕著である。周溝の幅で最も広いのは南側から東側にかけての部分で、4～5 mを測る。他の部分は平均して2 m前後である。周溝には葺石が落ち込み、また須恵器等の器類も多数検出された。周溝から掘り上げられた土は墳丘の覆土として使われたものと考える。実測図の7、8は周溝の状況を示したものである。



第9図 羨道閉塞状況図

第2節 副葬品

石室内遺物の出土状況

第10図は石室内から検出された鉄製品等の出土分布状態を示した平面図である。石室を構成する側壁等の配列が見られた高さから、石室内の床面までは約120cmを測る。石室内は土と、側壁等のくずれて落ち込んだ石などが堆積している。石室内は一部盜掘と追葬時における整地の際に副葬品が散乱したことが窺われる。直刀の锷が離れて検出されたり、金環、刀装具類の一部が、葺石の間から発見されたりしていることからもわかる。またこれまでの耕作中にも勾玉やその他の遺物が少量ながら出土したと伝えられている。

副葬品のうち原位置を保っていると考えられるのは、玄室最奥部から数本まとまって検出された鉄鎌、玄室中ほどの右壁寄りに発見された金銅製锷付きの直刀1振り、玄門部の直刀7振り等である。他にも玄門部付近から集中して検出された馬具類も、ほぼ同位置に副葬されたものと推定されるが、他種類のものと混同しているため確定はできない。

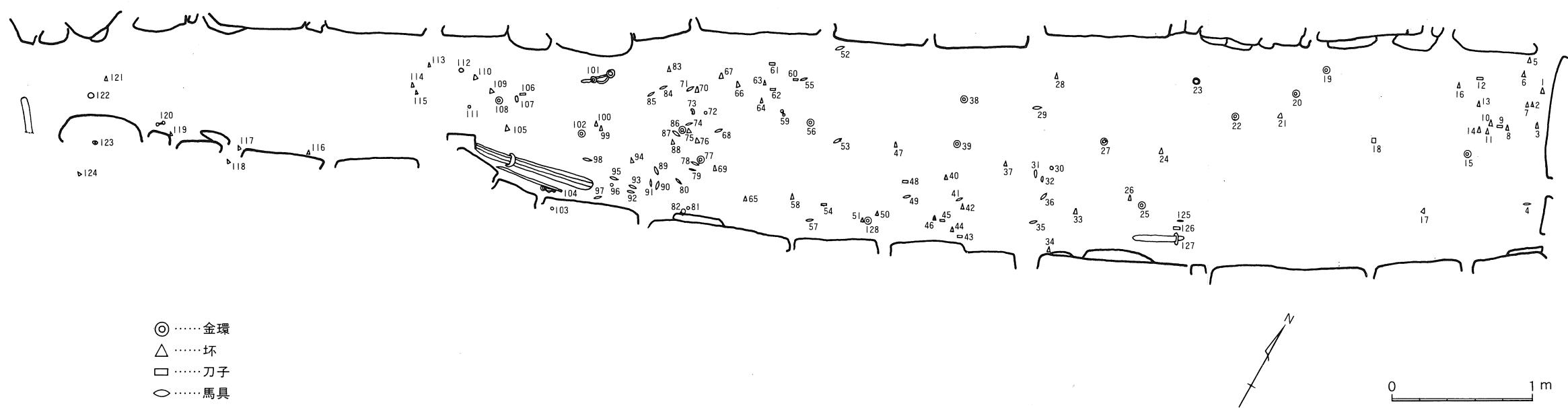
石室内から検出された金属類の主なものは次のようになる。直刀9振り、金環16個（うち鉄環1）馬具類（轡4組、雲珠1、辻金具8、鉄地金張留金具37個、銛具16個）、釧1個、刀子8本、鉄鎌41本、勾玉1、玉類49個、刀装具多数、などである。

石室内に堆積している120cm前後の土層中における、遺物の垂直分布状況について少し触れる。

石室内の調査を始めて70cmほどの深さにまでは須恵器の破片や、鉄鎌の一部分などが20点程度検出されただけであった。この深さを境に人骨や歯、金環等の出土が見られるようになる。そして人骨や歯、金環等は検出されはじめて幅35cmほどの間に集中した。この間には刀子、鉄鎌、馬具類、刀装具類等の副葬品の多くが検出されている。最下層の10～15cmの間には馬具類や鎌が多く出土している。最下層の床面は平石が敷きつめられて平らになっていたが、その上面10～15cmほどの中には、人骨や、金環類の検出はみられなかった。

埋葬者は木棺直葬であったと推定され、木棺を留めた釘や鎌も発見されている。これらの中には床面から20～30cm上に見られる。人骨、金環等が発見された同一層である。平石を敷きつめた床面に直接木棺を置いたのではなく10～15cmの黒褐色土層があり、その上に木棺を置いたものと考えられ、次々に追葬が行われたことが推測されるが、この間に石室内は徐々に土が堆積し床面が高くなっていたと思われる。

遺物の平面的検出状況は図に見るごとく、玄門部に集中している。特に直刀は9振りのうち7振りが玄門部から検出している。また馬具類も玄門部から玄室中間ほどまでに多く、それより奥は刀子や鉄鎌等で、馬具類はほとんど見られない。金環は玄門部から奥壁までほぼ全面に及び、特に集中的に出土している場所は見られない。玄室奥壁に近い部分は盜掘の痕跡が認められ、そのため出土遺物が少ないと考えられる。



第10図 石室内遺物分布図

表1 石室内遺物出土分布表

1	(9)	鏃	44	(99)	鏃	86	(66)	金環No.15
2	(43)	鏃	45	(81)	刀子	87	(69)	馬具
3	(44)	鏃	46	(49)	鏃	88	(136)	鏃
4	(94)	馬具	47	(101)	鏃	89	(72)	馬具
5	(79)	鏃	48	(85)	刀子	90	(75)	馬具
6	(89)	鏃	49	(51)	馬具	91	(71)	馬具
7	(16)	鏃(失柄)	50	(32)	鏃	92	(79)	馬具
8	(57)	鏃	51	(28)	鏃	93	(93)	馬具
9	(54)	刀子	51	(33)	金環No.4	94	(121)	鏃
10	(46)	鏃	52	(78)	馬具	95	(70)	馬具
11	(14)	鏃	53	(55)	馬具	96	(115)	馬具
12	(8)	鏃	54	(68)	刀子	97	(126)	馬具
13	(45)	鏃	55	(132)	馬具	98	(108)	馬具
14	(63)	鏃	56	(58)	金環No.7	99	(91)	鏃
15	(37)	金環No.6	57	(50)	馬具	100	(95)	平根鏃
16	(47)	鏃	58	(34)	鏃	101	(103)	銜
17	(44)	平根鏃	59	(63)	柄飾	102	(82)	金環No.8
18	(51)	帶金具	60	(77)	刀子	103	(123)	馬具
19	(28)	金環	61	(64)	刀子	104	(122)	銜
20	(29)	金環No.10	62	(88)	刀子	105	(117)	鏃
21	(113)	鏃	63	(94)	鏃	106	(125)	刀子
22	(37)	鉄環	64	(68)	鏃	107	(76)	刀の鐔
23	(66)	帶金具	65	(109)	鏃	108	(60)	金環No.13
24	(18)	鏃	66	(133)	鏃	109	(119)	鏃
25	金環		67	(131)	鏃	110	(118)	鏃
26	(22)	鏃	68	(92)	馬具	111	(61)	玉
27	(2)	金環No.9	69	(134)	鏃	112	(111)	銜
28	(52)	鏃	70	(116)	鏃	113	(91)	鏃
29	(80)	馬具	71	(138)	馬具	114	(98)	鏃
30	(20)	馬具	72	(10)	鉄	115	(107)	鏃
31	(21)	刀の鐔	73	(110)	勾玉	116	(96)	鏃
32	(30)	鞘金具	74	(137)	馬具	117	(83)	鏃
33	(18)	鏃	75	(127)	鏃	118	(100)	鏃
34	(89)	平根鏃	76	(128)	鏃	119	(62)	鏃
35	(130)	馬具	77	(65)	金環No.14	120	(120)	馬具
36	(140)	馬具	78	(74)	馬具	121	(87)	平根鏃
37	(31)	鏃	79	(59)	馬具	122	(56)	刀裝具
38	(67)	金環No.16	80	(73)	馬具	123	(53)	刀の鐔
39	(58)	金環No.12	81	(124)	辻金具	124	(105)	鏃
40	(39)	鏃	82	(112)	馬具(雲珠)	125	(21)	馬具
41	(129)	馬具	83	(139)	鏃	126	(88)	刀子
42	(48)	鏃	84	(135)	馬具	127		直刀
43	(82)	刀子	85	(114)	馬具	128	(33)	金環No.4

1) 鉄製品

イ) 直刀（第11、12、13図）

石室内からの副葬品の出土状況については概要を前述したが、直刀の発見は9振りを数え、同一古墳からの出土としては、数多い部類にはいる。第11図1～3は玄室入口の袖部の角に、^{きつさき}鋒を上にして立て掛けられた状態で発見されたものである。

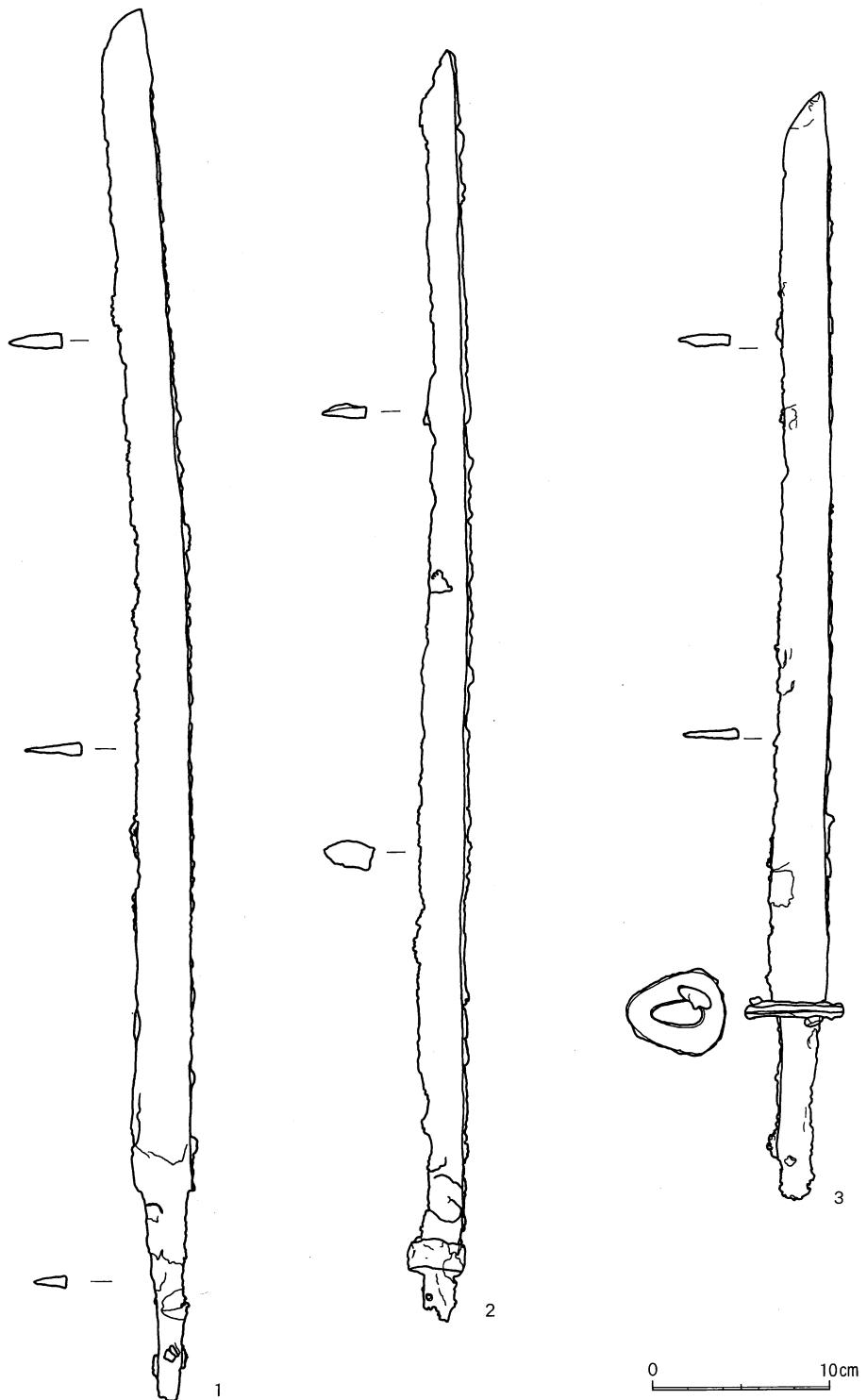
1は全長78cmの完形品である。出土の状況から判断すると、鞘、鐔、柄などは見られず、刀身だけにして立て掛けたものと推定される。刀身長66.4cm、茎11.6cm、身元幅3.4cm、棟幅8mmを計る。刀身は平棟平造りの両刃で、鋒はふくらついている。棟関は直角に3.5mm、刃関は斜角で3.5mm切れ込んでいる。茎部における棟はほとんど直線上であるのに対し、刃側は緩やかな曲線をなして茎尻に至っている。茎尻幅は1.2mmで、形状は栗尻である。茎尻から2.6cmの位置に長さ2cm、径4mmの目釘が残っている。大刀全体は大型で、刀身はやや内湾している。

2も同じく平棟平造りの直刀で、現長72cmで茎部はかなり欠損している。刀身幅2.6cm、棟幅6mmであるが、鋒付近と、鍔元付近の刀部が欠損し、全体に細身の感じである。茎部は棟関から4.3cmのみが残っているだけである。棟関は直角に3mm切れ込んでいる。この位置に鍔元金具が残り、3.2×2.3cmの楕円形で、幅1.5cmの板金で造られている。鋒は刀部が欠損しているため形状がはっきりしないが、ふくら鋒であろう。

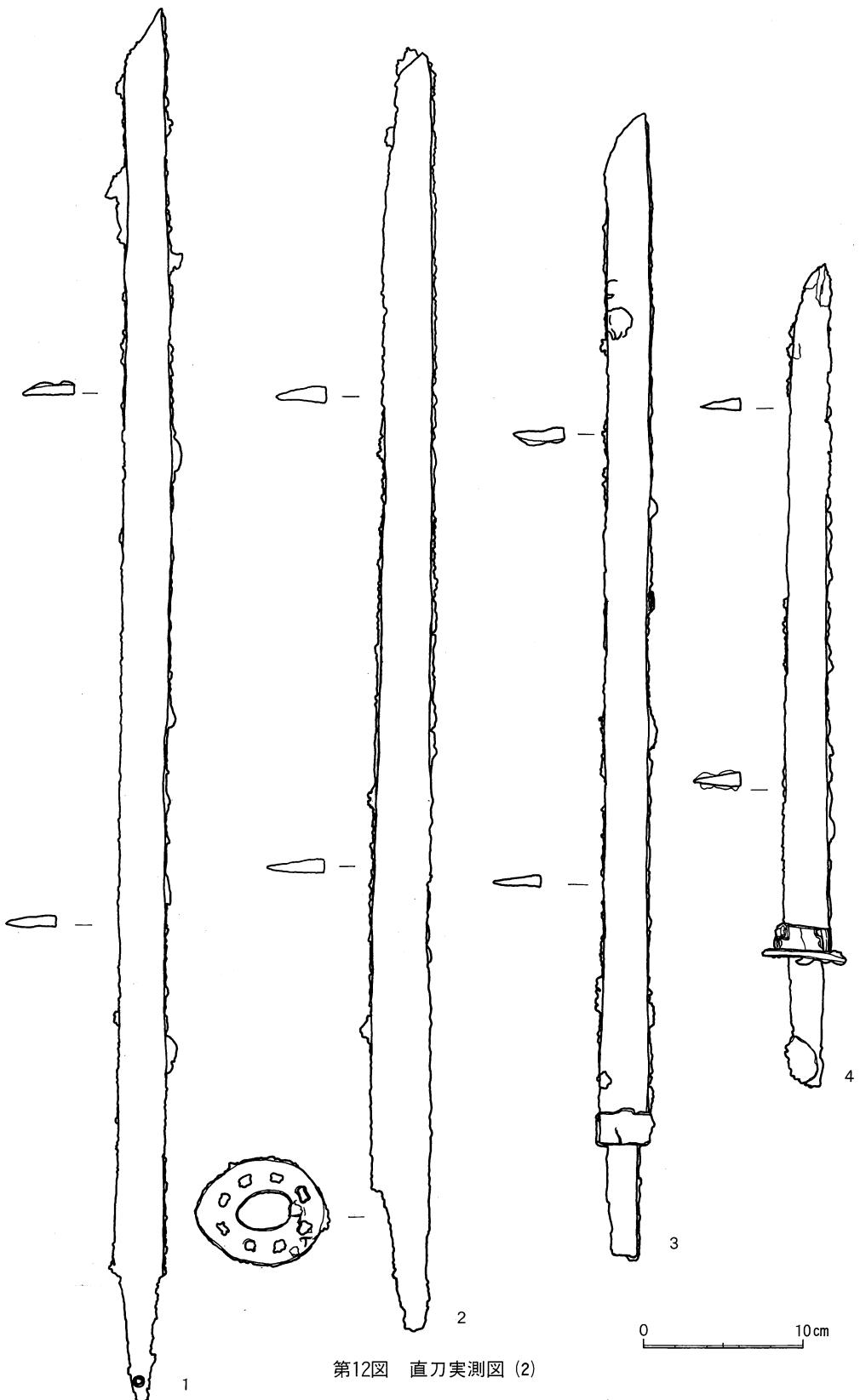
3は、全長62.8cmを有する直刀で、遺存状況の良好な直刀である。刀身長51.5cm、茎長11.3cm、身元幅3cm、棟幅6mmの平棟平造りである。茎尻付近には木質が残り、また鐔もついたままになっているところから、前記した、1、2と違って、鞘、柄等が伴ったままで、立て掛けられたとも考えられる。鋒はふくらついている。関は両関であり、棟関幅は4mmで直角に切れ込み、刃関は斜角で3.5mmを計る。茎は直線的に茎尻に向かって細くなっている。茎尻は栗尻で、1.8cm入ったところに長さ2.3cm、径3mmの目釘が残っている。図に示すように無窓倒卵形の鐔を伴っており、大きさは、5.5×4.6cm、厚さ4mmを計り、内径は2.9×1.5cmになっている。刀身はわずかに内湾している。

第12図に示す4振りの直刀は前述した3振りの直刀の真下に位置していたものである。このうちの1～3は鉤によって束ねた状態で右側壁と平行して発見された。

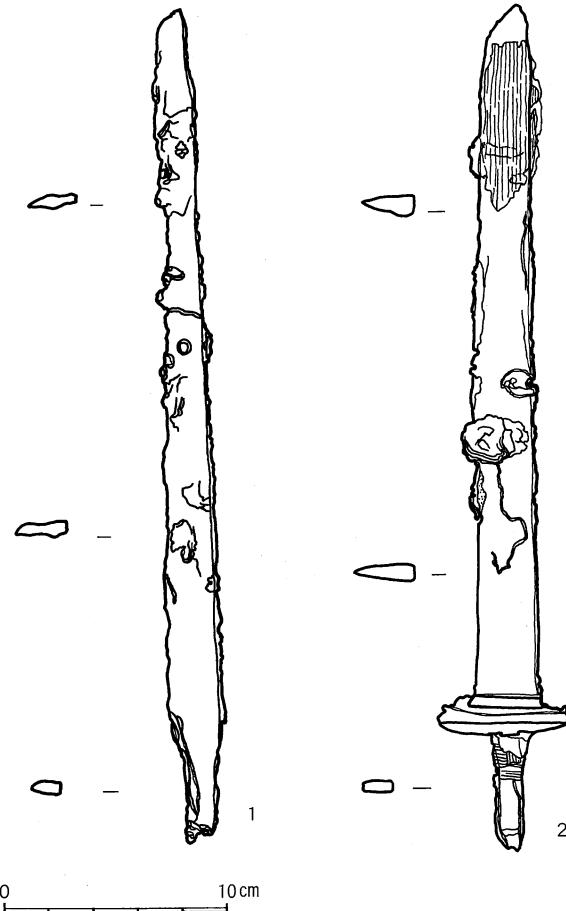
1は本古墳出土中最も長い直刀であり、全長86.5cmを計る。刀身長78.8cm、茎長7.8cm、身元幅3.1cm、棟幅6mmの平棟平造の太刀である。刀身幅、棟幅など非常に均一で、曲がりも全く見られず、全体的にスマートで均整のとれた直刀である。鋒は鉢子^{ばくし}の部分が直線上に造られているカマス鋒である。関は両関で、棟関幅3mmで直角に切り込まれており、刃関は斜角で6mmの切り込みがみられる。茎胴部の形は、関から茎尻に向かって急に細くなり、栗尻の形となってい



第11図 直刀実測図 (1)



第12図 直刀実測図 (2)



第13図 直刀実測図(3)

る。茎尻から1.3cmの位置に径4mmの目釘孔が穿たれている。

2は、全長80.2cmの直刀で、八窓倒卵形の锷を伴って発見された。刀身長72.9cm、茎長7.9cm、身元幅3.6cm、棟幅9mmを計り、平棟平造りである。身元・棟幅共に最大で、重量感のある直刀である。また9振りの直刀の中で唯一の片関で、棟関がみられない。刃関は斜角で6mmの切れ込みになっている。茎は先細になり、栗尻になっている。茎尻から4.5cmの位置に径3mmの目釘孔が穿たれている。鋒部は鋒が著しく形状がはっきりしないが、ふくらついていると推定される。

3は現長71.8cmで茎尻部をわずかに欠損している。刀身長63cm、身元幅3.1cmの平棟平造りの大刀である。関部は鍔元金具によって被われているため形状は不明であるが、両関であると推定される。茎は茎尻にかけて、やや幅をせばめられている。鋒はふくらついている。

4は前の3振りとわずかに離れて発見されたものであるが、同時に副葬されたものと推定される。全長51cmの刀で、刀身長43cm、茎長8cm、身元幅3cm、棟幅8mmを計り、平棟平造りである。関部には、無窓倒卵形の锷と鍔元金具がついている。関は両関式で、茎尻は栗尻の形を呈し、2.7cmの位置に目釘が残っている。遺存状態の良好な直刀である。

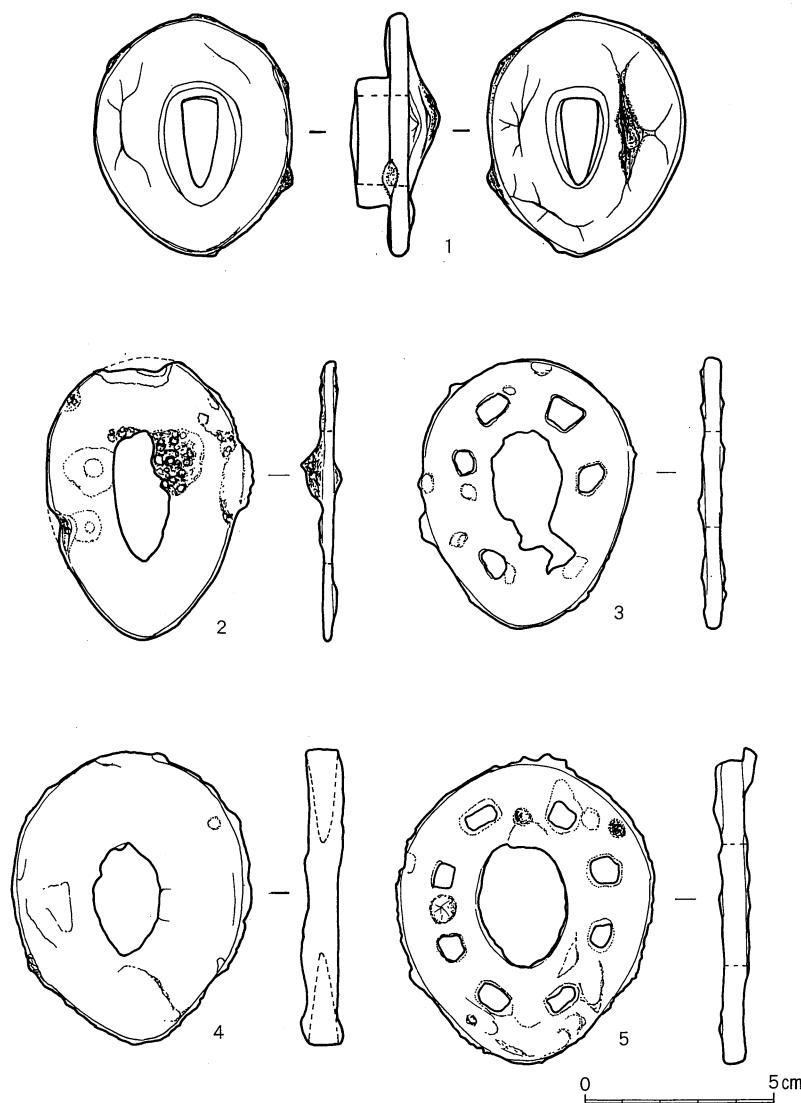
第13図1は羨道入口の堆積土中より発見されたものである。現長37.5cmで茎尻の一部が欠損している。身元幅2.4cm、棟幅7mm、両関式を呈する平棟平造りの刀である。棟関は1.5mmと少ないが、直角に切れ込み、刃関は撫角で曲線を成して切れ込んでいる。鋒はふくらついている。茎は目釘孔から欠損しており、全体に遺存状況が不良で刃部も欠けているところが多い。

2は、玄室中央、やや奥壁寄りの右側壁に添って発見されたものである。全長37cmの完形品の直刀である。身元幅2.7cm、棟幅6mm、刀身長32cmを計る。刀身は平棟平造りで、無窓倒卵形

の鐔を伴っている。鐔は長径5.7cm、短径4.8cmの大きさで、鉄地の上に薄い銅板で被われて制作されている。鋸元金具と一体の形に制作され、喰出鐔の形式である。柄を形成する木質が残り、関部を被っている。茎は関部から急に細くなり、茎尻は隅抉尻に近い形を示している。峰はふくらついており、周辺には鞘の木質がかなり付着している。この状況からして、鞘、柄等一揃いの完全な刀を副葬したものと推定される。

口) 直刀鐔 (第14図)

本古墳には9振りの直刀が副葬されていたが、鐔は8個が確認されている。このうち明らかに直刀に同一付随するものは4個である。第14図には5例を図示したが、5は第12図の直刀に付



第14図 直刀鐔実測図

隨するものである。

1は、鉄地に金銅張り倒卵形無窓式の鐔であり、石室内出土遺物中最も注目されたものである。長径6.4cm、短径5.2cm、厚さ5mmを有するもので、他の鐔とは全く異なっている。鍔元金具に相当する部分は刀身の形に穿たれており、裏側は柄の太さに形作られ、鐔の縁には細い沈線を一周させている。表裏全面に金銅張りが施され、正に金色に輝く「黄金の鐔」という感じである。副葬されていた直刀に付随していた鐔と考えるのが妥当だと思うが、刀身の形状などから推測すると第13図の2も金銅張りの鐔が付随したまま発見されており、形状には類似点がみられるものの、金銅張りの依存状況には大差がみられる。これだけの鐔から類推した時、一連の刀装具も同様なものであったと思われる。第15図に示す金銅張りの刀装具切羽もこの刀に使用されていたのではないかと思われる。「黄金作りの太刀」ということができよう。羨道の中程から出土したものである。

2は、倒卵形無窓式の鉄鐔で、厚さが3mmしかなく薄手にできている。長径7.5cm、短径5.2cmを計り、鍔元金具が通るべく穴が 3.5×1.4 cmの楕円形に穿たれている。

3は、倒卵形六窓式の鉄鐔で、窓透かしの形は鋸によって変形しているが台形が基本形であろう。厚さ4mmとやや薄手である。

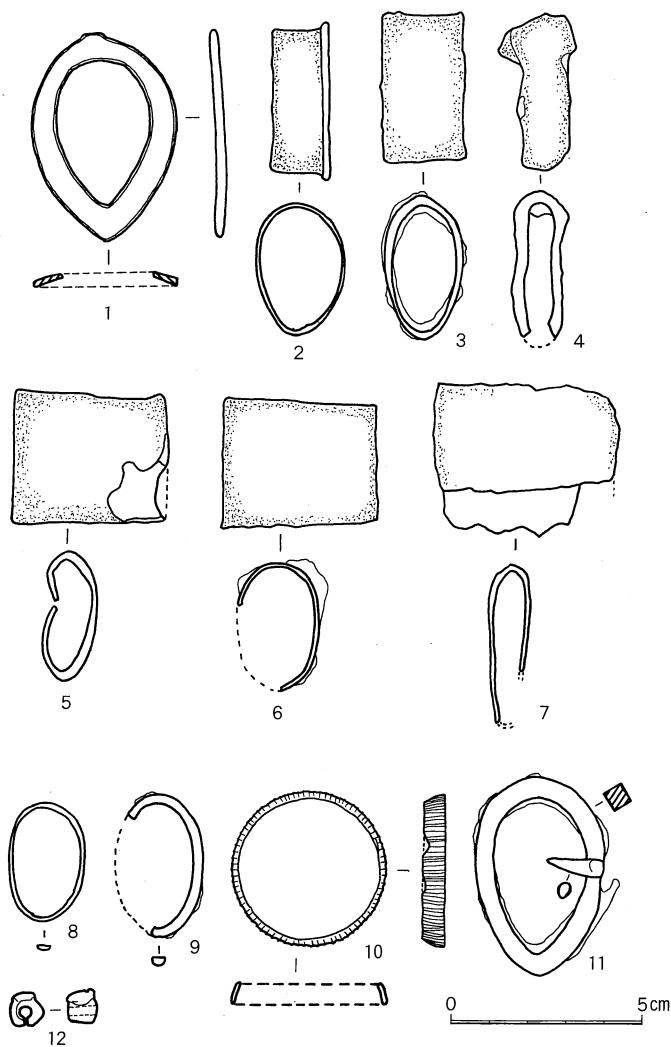
4は、倒卵形無窓式の鉄鐔で、鋸が多く表面は凹凸が著しいが、鉄地が厚いため、重量感があり、しっかりととした鐔である。鐔の周囲は7mmと厚いが、刀身の入る穴の部分は2mmと薄くなっている。外形の大きさに比して、内径がやや小さめの鐔である。

5は、倒卵形八窓式の鉄鐔で、外形、透かし窓の形や配置等、丁寧な制作である。他の鐔に比べ、やや丸みのある形状で、長径8cm、短径6.8cmを計る。透かし窓はやや台形気味の長方形に整えられ、 8×6 mm前後の大きさになっている。鉄地は5mmとやや厚くなっている。

ハ) 刀装具(第15図)

第15図1は羨道入り口の右側葺石の中から発見されたものである。銅地に金張り拵えで、倒卵形を呈している。この形状からして、太刀の柄頭の部分に用いられている「切羽」と考える。長径5.4cm、短径3.7cmを計り、狭い部分で5.5cm、もっとも幅広の部分で8mmの幅を有している。厚さは2.5mmを示し、裏側には鍍金は施されていない。この切羽の確認により、頭椎太刀の存在が考えられる。倒卵形鐔の存在からも充分推定できることである。

2は第14図5に示す鐔に付く鍔金具である。鐔面に付く部分には2mmほどの縁取りがある。鐔面から前方に1.5cmの幅に巻かれている。 3.7×2.3 cmの倒卵形で、厚さ1.5mmほどの鉄板で造られている。3も同じく鍔金具である。 3.5×2.2 cmの倒卵形を呈し、やや厚みのある鉄板で形成されている。内側には木質が鋸状になって付着している。4も同じく鍔金具であるが、外側から力が加わり押しつぶされた状態に見える。鋸が多く、一部を欠損している。



第15図 刀装具実測図

たして円形か疑問である。図化した後に於て本資料について調べたが、前述した責め金具状の形をしていたものではないかと推定した。使用されていた部分としては、飾り太刀の柄頭か、鐔の集辺であろうと思われる。12は径9mm、幅9mmの円筒形を呈した鉄製品である。大豆ほどの大きさで、中心に径2mmほどの円筒状の穴が穿たれている。太刀の柄頭に見られる懸通孔の部分に入れ込んだ金具かと推定したが、使用された場所は不明である。

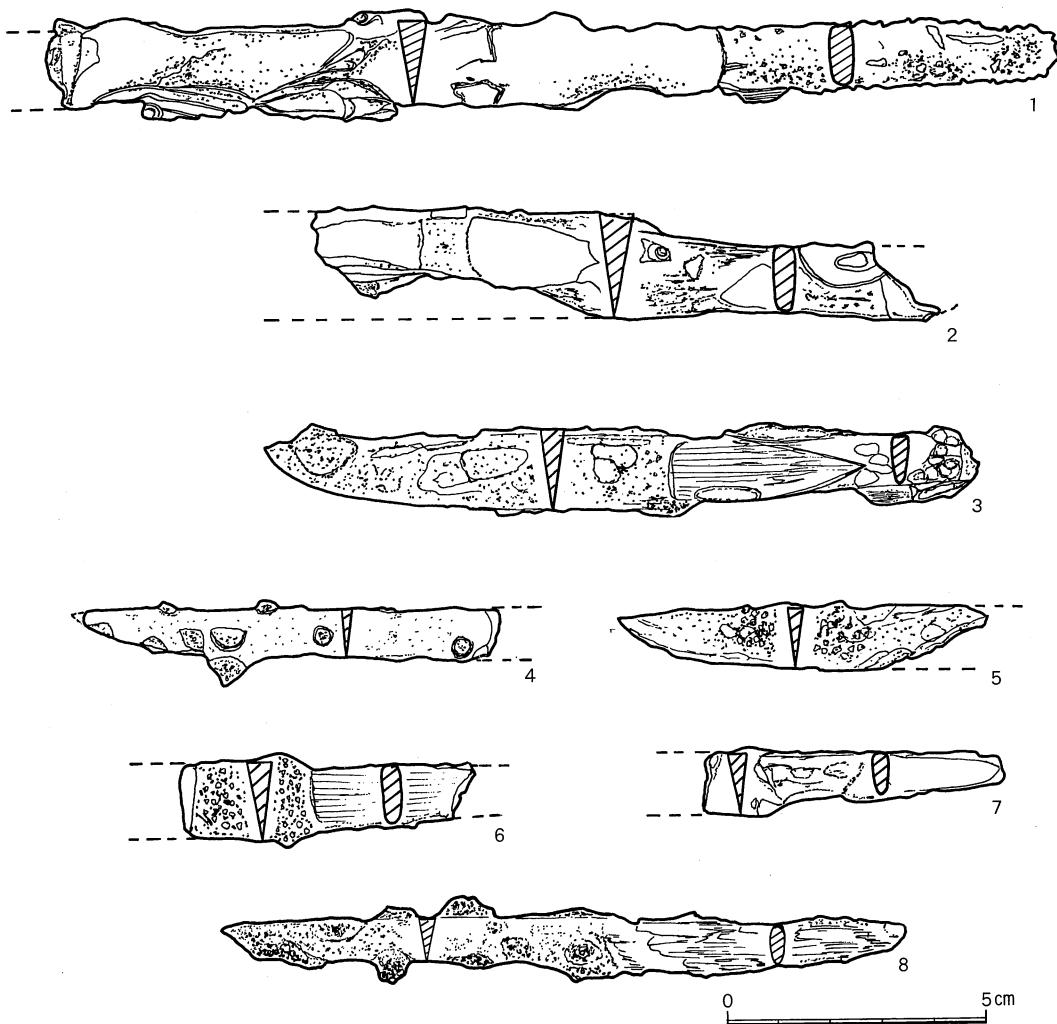
ニ) 刀子(第16図)

多数の金属器の中において、刀子と考えられるもの8点を図化した。いずれも石室内から出土している。1は現長19.3cmと長く、先端部が欠損している。欠損部分の長さがどのくらいか

5～7は鞘尻金具である。

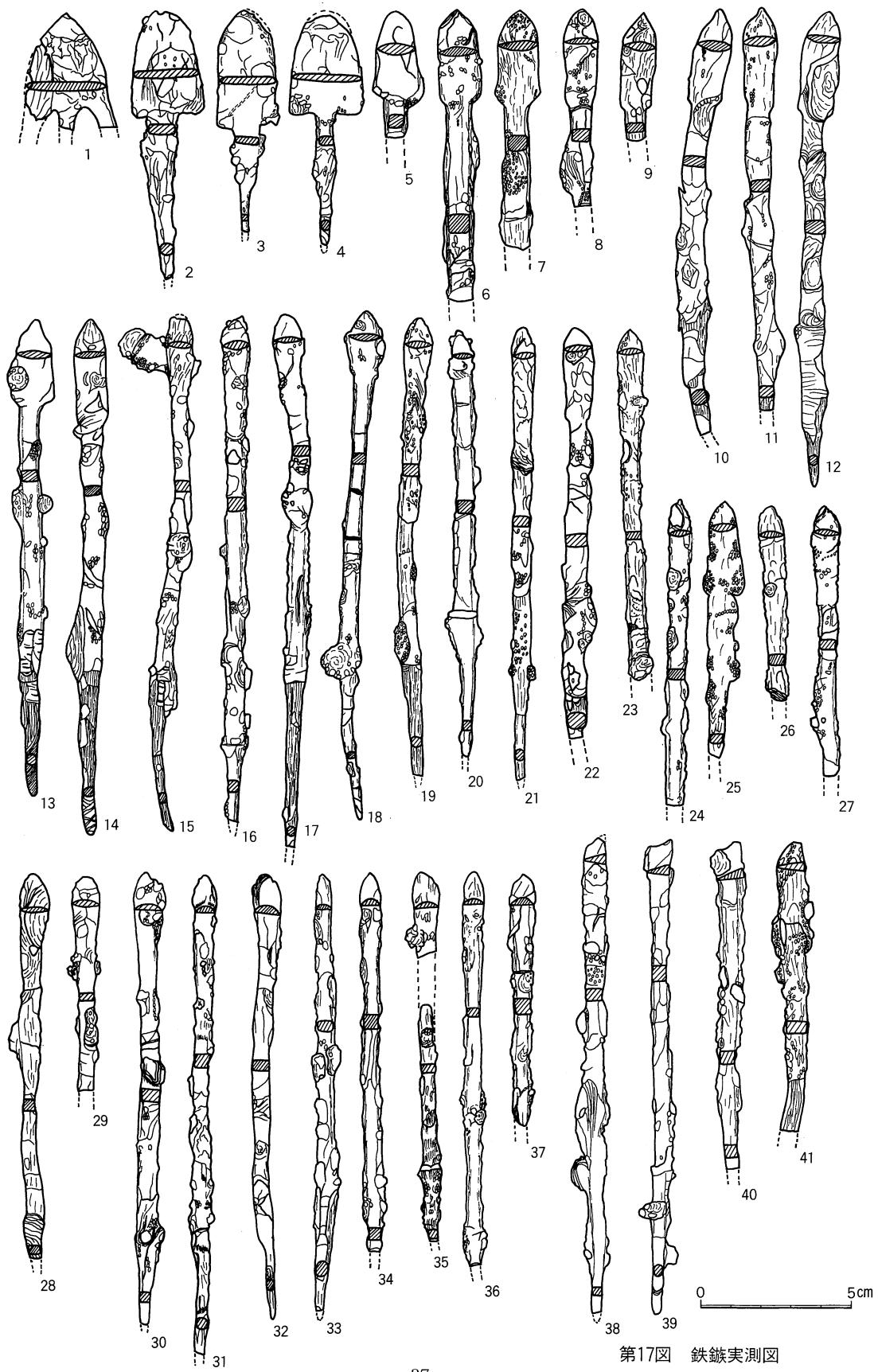
5はやや薄い鉄板で造られ、一部が欠損しており、片側が押しつぶされている。端部は蓋状の金具が付いている。6は長さ4cmを計り、 3.2×2.1 cmの橿円形を呈している。端部の金具もきちんと着けられ、内側にはやはり木質状のものが見られる。

7も同様な鞘尻金具であるが、変形、欠損が多くみられる。8、9は鞘中央部を固定する責め金具である。8は地金が銅であり、外側には鍍金されていたようにも感じる。幅2.5cm、厚さ1mmと極めて細味である。9は鉄製の責め金具であり、大きさが6の鞘尻金具とほぼ同一である。10は銅地に鍍金をしたもので、幅6mm、厚さ1mm弱を呈している。数片に分かれていたものを復元し、円形にしたが、果



第16図 刀子実測図

不明であるため、刀子か小さな直刀か疑問な点もあるが、全体的な状況からここでは刀子として考える。身元幅は1.7cm、棟幅は5mm前後である。茎の長さ9cmを計り、茎幅は1.2cmである。両関をついている。2は欠損部分が多く、全体の大きさは不明であるが、刀子としては大型の部類にはいると推定できる。身元幅は1.9cm前後、棟幅は5mmである。棟関幅は4mmと大きく、刃関は緩やかな撫角を呈している。茎部には木質が鋲状になって付着している。3はほぼ全形を有する刀子である。全長13.8cmを有し、刀身長7.8cmで平棟平造である。切先は緩やかにふくらついている。両関を呈すると考えられ、茎部の片側に、厚さ1mmほどのクサビ状の木片が付着している。茎尻に向かって先が尖っており、柄と茎の空間へ差し込んで、柄が抜けないようにした木片と推定できる。4は茎部を欠損しており、身幅が9mmと小さな刀子である。5は



第17図 鉄鎌実測図

切先部だけであり、緩やかなふくら鋒になっている。身幅1.3cmである。6は刀身と茎の一部分だけであり、茎部の両側には木質が厚く付着している。両関を有している。7も中程から先を欠損しており不明である。茎長は4.4cmを計る。5と7は同一の刀子の可能性もある。8もほぼ完形の刀子である。全長13.2cm、刀身長8cm、身元幅8mmを計る。鏽が付着しているので鋒は確定できないがふくら鋒であろう。両関式で茎部には木質が付着している。

ホ) 鉄鎌 (第17図)

石室内を中心に発見された数は総数100本余であるが、完全に近い鎌は30本ほどであとは復元不可能な折損したものである。鉄鎌はすべて有茎式鎌であり、しかも長頸鎌である。刃部の形式によって鑿箭式鎌・平根鎌・片刃鎌に大きく三分類できる。

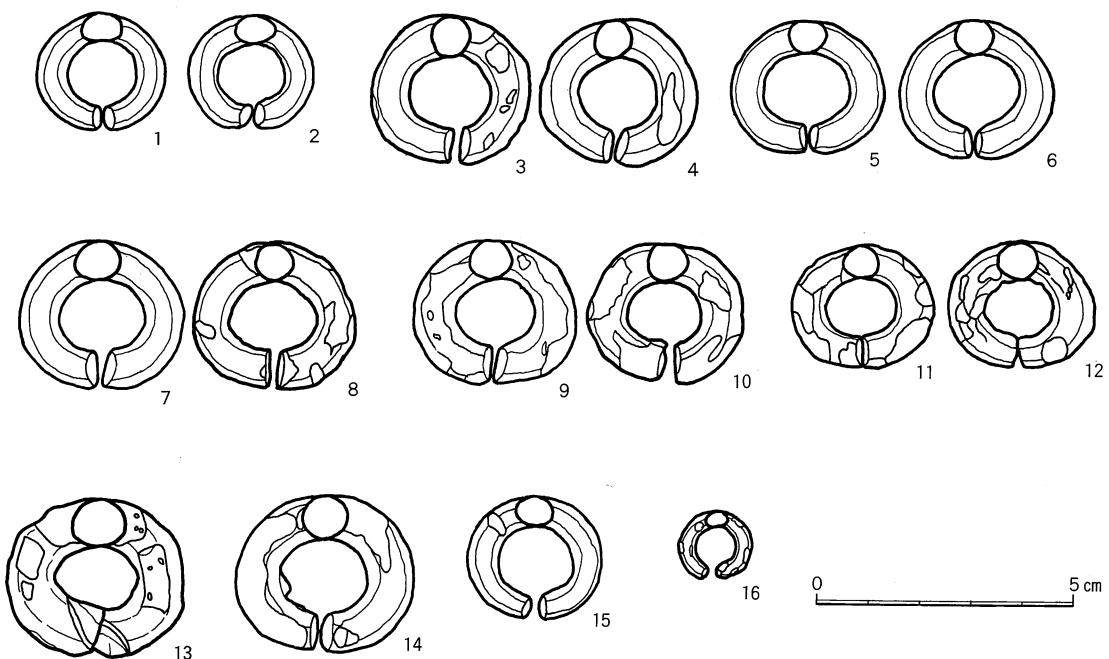
平根鎌は頸部・茎部供に短いが、他は頸部が8cm前後、茎部は4~5cmのものが多い。1~5は平根鎌に分類され、1は刺逆がつけられており、刃部は平造りになっている。2~4は刺逆はつけられていないが、広鋒の平造り形式である。2の刃部は長さ3.5cm、最大幅2.4cmを計る。3もほぼ同型であり、4は刃部がやや長く3.8cm、幅1.8cmを示している。鎗被ぎの長さは、2~2.5cmで茎長もほぼ同様の長さである。鎗被ぎ部・茎部供に断面長方形に造りだしている。次に鑿箭式鎌は(6~37)長い頸先に刃部を打ち出している。刃部の形状にもやや異なるものがみられ、小さいながらも関を造りだしているもの(6~14)と、関無(15~37)とに分類される。また両丸造りと片丸造りにも分けることができる。いずれも鏽が著しく、刃部の造りを判断するのに困難なものがある。また、尖端部の折損や剥落したものも含まれている。

次に片刃鎌は4例含まれている(38~41)。頸部の尖端を断面三角形に打ち出し、片側が刃部になるように造りだし、切り出しナイフ状を呈するものである。刃部は鏽による腐食で形状が変化しており、鎧等は観察できない。

ヘ) 金環 (第18図)

本古墳の調査において検出された耳飾りは16個を数える。このうち2個が、石室外の周溝(羨道入り口の左側)から出土しているが、他は石室内からの発見である。このうち銅地に金張りのものが15個で、ただ1個が鉄環であった。16個のうち10個(5組)が明らかに一対を成すものである。図の1、2は対を成し、金張りの状態が非常に良好なため、鏽による形の崩れもない。環の径は2.6cmで身は8×5mmの楕円形を呈している。身の両端はわずかな間隔が認められる。遺存状態の良い金環である。3、4も同じく一対の金環であるが鏽が著しく鍍金の形跡を一部にみることができるが保存状態は悪い。5、6も同じく一対の金環である。前期した1、2と同様に鏽もほとんど認められず、金色に輝く美しいものである。環の径は3cmで身はほぼ円形を呈している。出土金環中一番の優品である。9、10は環の径が3.1cmと大きめであり、そ

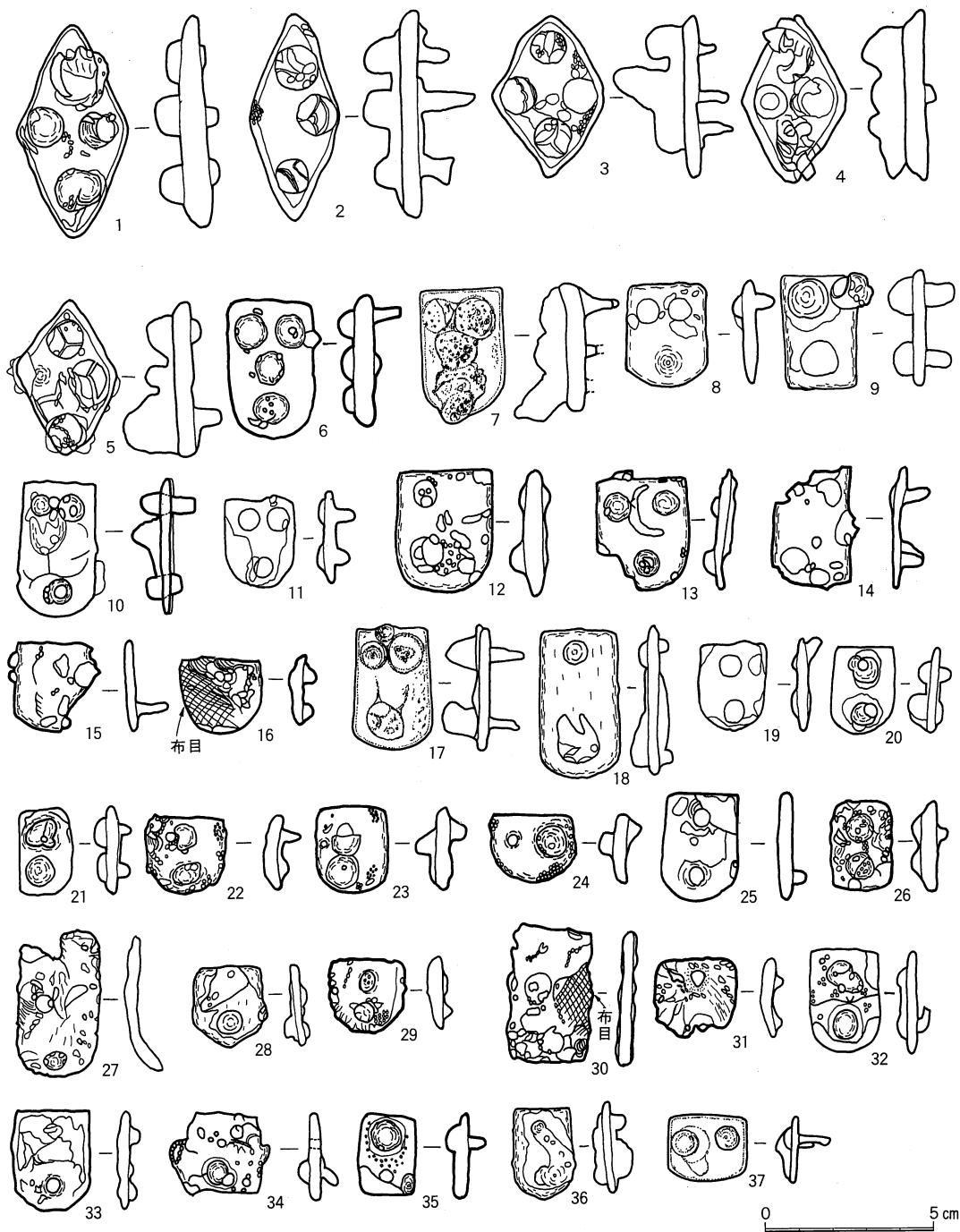
れなりに重さもある。この二個は同一場所からの出土であり、発見時において一対の金環であろうと推定した。ただ出土した場所が羨道入り口近くの周溝内からであり、ここに埋葬されたということも考えられる。身は径 7 mm の円形を呈し、全体に鋸が著しい。11. 12は環の径が2.7cm と、やや小型であり、鋸によって身の両端が間隔が無くなっている。以上 5 組・10個は一対を成すものと考えられる。他の 6 個は対を成すものではなく、このうち13は鉄環であり、金銅張りは施されていない。また、16はひとつだけ極めて小型である。当然の事ながら金環は耳飾りであるため、一対になっているものである。この事から考えると、対でない 6 個は片側だけということになり、少なくとも残り 6 個の存在が推定できる。これらのことから埋葬者の人数もかなりの数が推定される。古墳時代には、金環は装身具として最も広く行われたものと見られ、男女いずれも好んで使用したものと思われる。また、盗掘の対象になったものと思われるが、土中に入り込んでいたためか、残ったものが多い。



第18図 金環実測図

ト) 留金具 (第19図)

第19図は留金具類を記した。1～5は菱形留金具であり、いずれも鉄地に金銅張りの拵えである。図に見るように、1. 2と3～5は形が異なる。四角に鉢を配し、鉢はいずれも大きく、



第19図 留金具実測図

鉢頭の径は、9mmで盛り上がっている。1は長径6.3cm、短径2.8cmの菱形を呈し、地金は厚さ6mmで、裏側が湾曲している。鉢は一本が欠損しているが、他の3鉢はきちんと残っている。2も同様な菱形留金具であるが、地金が厚さ1.5mmほどの鉄板で、四辺を6mmほど、90度折り曲げて形造られている。3～5はほぼ同形状を呈し、長径4.6cm、短径3.1cmの大きさで鉄地に金銅張りの拵えで制作しているものもみられる。6以下は端金具である。形状にもそれぞれ差異がみられるが、長方形のもの、長方形で一辺が半円形を呈するもの、横幅が広く一辺が半円形を呈するもの等に大別される。また鉢数も4から2鉢のものまであり、鉢の配置も端金具の大きさ、形状によって相違がみられる。6は長径4cm、短径2.5cmで一辺が半円形を呈するものであり、4鉢を有するものは2点のみである。鉢頭も径9mmと大きなものを使用している。8～17は鉢数が3個のもので、鉢の配置は方形部に2個並べ、半円形部に1鉢を示している。鉢頭は径6mmを計り、中型の大きさのものと、9のように大型鉢を用いてあるものもみられる。地金の厚さは3～4mmがほとんどである。16は地金に布が付着したまま鋳状になり残っている。18～37は2鉢の端金具である。2鉢のものは、小型が多い。鉢の配置は、金具の形状によって相違し、縦並びと横並びの2種類である。これ等の金具には、帶端留金具として用いられたものも含まれる。

チ) 繡（第20図）

本古墳より出土した繡は図に示すように4組である。細部における形状の違いはあるが、いわゆる環状鏡板付繡である。以下、それぞれの繡について記すが、出土した位置はいずれも玄室入り口部に集中した。

1は鉄製の繡で、環状鉄板の立闇を完全な造り付けの状態にしており、それも大型矩形になっている。その点から「大型矩形立闇造り環状鏡板付繡」の形式に相当すると考える。繡全体の鋲は著しいが、全体の形としてはほぼ完形である。鏡板は偏円形で7.6×6.3cmであり、それに3.8×1.8cmの矩形立闇を鍛接している。

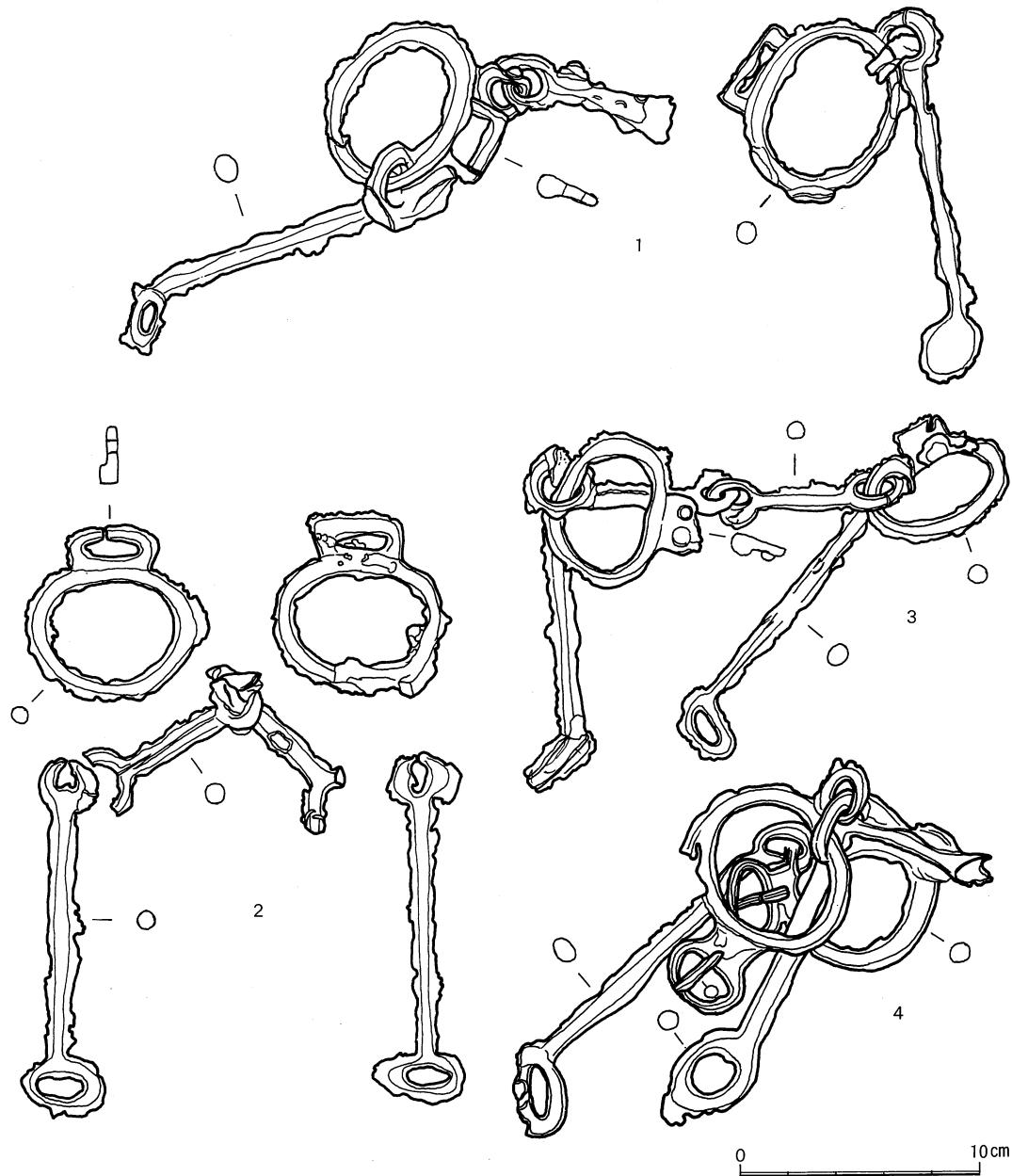
つぎに銜は「二連銜」で長さは約17cmを計る。片方が9cm余の鉄棒を2本連結した形であり、内側の両端にある小円環を連結し、右側の柄が90度捻られている。この部類の銜は、銜先環の径が大きく、鏡板と引手とを供に連結する形式である。

引手は一本柄引手で、柄と壺部とが一体となっているものである。長さは14.3cmであり、壺部が「く」の字に曲がっている。くの字引手と呼ばれる形である。

この繡における各部分の連結法であるが、先の環の一方が大きく造られ、これに鏡板の環と、引手の端環とと一緒に連結する方法である。この種の繡は中川村の六万部古墳出土の物と類似する。

2も1とほぼ同形式の環状鏡板付繡である。わずかな相違点としては環状鏡板に造り付けら

れている、立聞部が円頭鎌形になっている。鏡板は偏円形で、 $7.2 \times 5.6\text{cm}$ の大きさで、それに $3.7 \times 1.8\text{cm}$ の円頭鎌形立聞を造り付けている。銜は長さ約 16cm で二連銜になっている。1と同様に片側環が 90° 捻られて制作してある。引手長 14.7cm で壺部を「く」の字に曲げてあり、柄と一体となっている。1と比べ全体の大きさがやや小さくなっている。形式としては、ほとん



第20図 鏡実測図

ど差異は認められない。

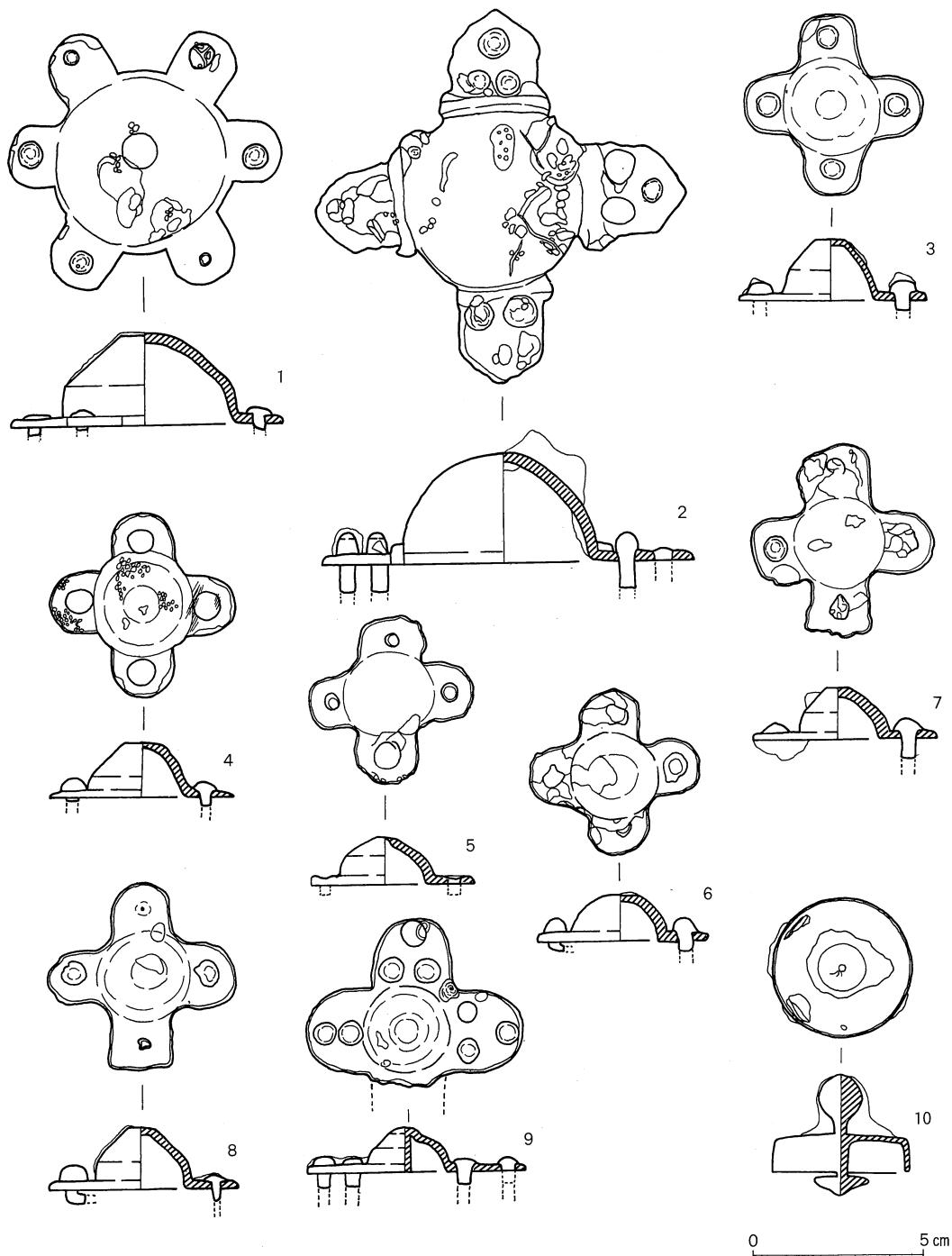
3も同じく、鉄製の環状鏡板付轡である。1. 2の相違する点としては環状鏡板が一段と小さくなり、それに付く立闇部が小形矩形となっている点である。鏡板は偏円形で $6.1 \times 4.5\text{cm}$ と小形で、それに $2.4 \times 1.4\text{cm}$ の立闇部を付けている。この部分に付いては前述の轡とは形式の違いである。そのため、立闇部と面繫の連結方法も相違があり、本例は立闇孔部に2本の鉢が認められる。この部分に、留金具を介在させたことを意味するものである。次に、銜は二連銜で、長さ 15.9cm を計る。引手は一本柄引手で 15.1cm の長さである。壺が曲がる形式は同じである。また、引手、銜、鏡板の連結方法も1. 2と同様である。

4は環状鏡板本体に立闇として鉢具を取り付けたものである。この点において、他の三例と大きく相違している。立闇部を除いては、他はほとんど変わらない形式である。 $7.4 \times 6.1\text{cm}$ の偏円形鏡板に立闇最大高 3.9cm 、最大巾 3.7cm の鉢具を鍛接している。この鉢具に面繫のベルト状の物が直接装着されたのである。立闇部の形式から「鉢具造立闇環状鏡板付き轡」と呼ばれるものである。鉢具造りの轡としては辰野町の御射宮司古墳出土のものと類似している。

4例について示したが、この結果、環状鏡板の状況、特に立闇部の変化により、三分類される。1. 2による「大型矩形立闇造り環状鏡板付き轡」、3の「小型矩形立闇造り環状鏡板付き轡」、4の「鉢具造り立闇環状鏡板付き轡」である。1. 2においても立闇部にはわずかながら相違もみられる。形式的に三分類される轡の時期的考察であるが、鉢具造りの轡は鏡板も大きく、この造りの轡としては古い形式を留めている。そのため6世紀末頃の時期と推定される。これに続くものとして、大型矩形立闇をもつもので、7世紀初頭から前半にかかる時期と考え、次に小型矩形立闇をもつ轡へと時期的な連続があるものと推定した。細部における研究は今後に待ちたい。

リ) 雲珠・辻金具(第21図)

多数の馬具が出土したが、図に示すように雲珠1点、辻金具8点が確認された。1は6脚系雲珠である。雲珠は辻金具の役割を持つものであるが、とくに尻繫の交点で馬の背の部分に取り付けられ、装身具としての性格が強い。雲珠も鉢の形状や脚数などにより細分されるが、本例は中心部の鉢が半球状を成し、半円形の脚が、ほぼ等間隔に6脚配置されている。分類では、「半球状等間隔6脚形雲珠」の系列にはいる。鉄地に金銅張りで鋸の切れ目から鍍金の残存状態がみられる。半球状の鉢の径は 5.3cm 、高さ 2.6cm を呈して稜を有している。脚は6方に水平に張り出し、長さは $1.3 \sim 1.5\text{mm}$ である。頭部は円形に整えられ、脚は鉢部と一体造りとなっている。脚の先端に近い中央部に1鉢を施している。鉢頭の径が 7mm で高さもある大型の鉢である。この点から1鉢半円形脚の系列にはいる。鉢は6脚中4脚に残り、他は欠けており、責め金具は認められない。地金は 1.5mm と薄く重量感はない。



第21図 雲珠・辻金具実測図

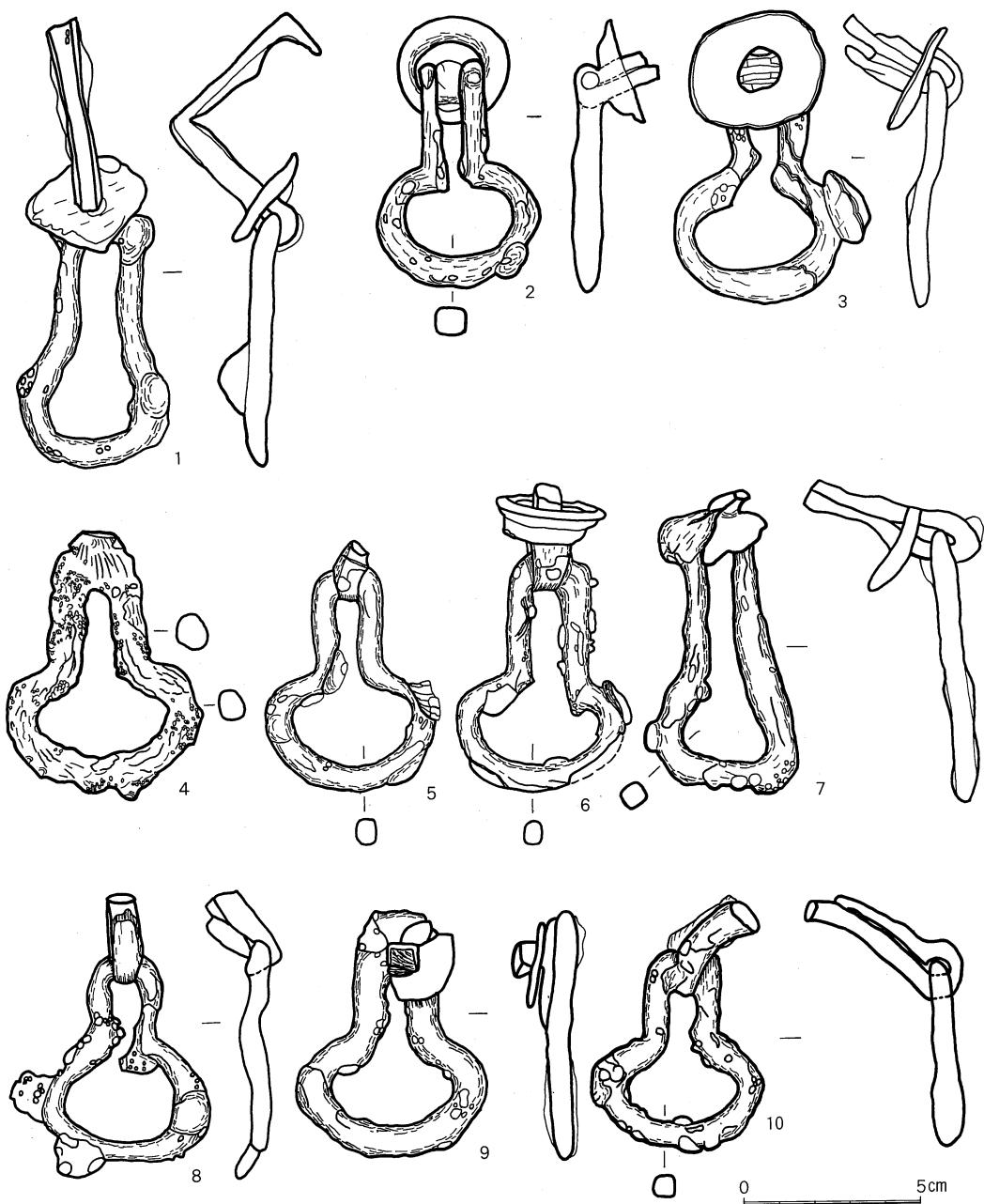
2は辻金具の大型のものである。玄室中央の右側壁寄りから発見されたものであり、鉄地に金銅張りで、半球状の中心部から4方に脚を出す形状を呈している。他に同型の辻金具が7点出土しているが、それより極めて大型で、使われ方は雲珠と同様な状態であったと推定する。鉢は高く盛り上がった半球状で、径は5.6cm、高さ3.9cmを計る大きさである。脚は等間隔に4方に張り出し、3鉢の尖頭形脚である。責め金具は一本だけで、幅4mmを呈する。鉢は鉄地に金銅張りで半楕円大型鉢である。この状況から脚部とへの装着法は、鉢と金具を用いている。3～9は小型の辻金具で、いずれも、玄室入り口部から集中して発見されている。鉄地に金銅張りの拵えで中心部分は半球状の鉢で、等間隔に4脚を出している。鉢はいずれも稜を有し、頂部が平面になっているものもみられる。鉢の径は2.8～2.9cmに規格化されている。脚長は1.8cmを示し3～6の4個は4脚供に半円形を呈し中央に1個の鉢がみられる。鉢は偏平の中型鉢と考える。このことから脚は1鉢半円形脚の部類にはいる。7. 8の2個は、4脚のうち1脚だけが、1鉢方形脚になっている。これは使用する場所によって使い分けを行ったものと考える。9は半球状の鉢がやや低く、径も2.5cmと小型になっている。脚は半円形で、他の半円形脚よりやや大きめになっている。鉢も2個と3個のものがある。いずれも金張りが残り、革帶類に装着されていた当時は美しい光を放っていたものであろう。10は具製雲珠と思われる。円形座金状の金具は径4cm、高さ1cmを計る。その上に球状のつまみが付けられているがほとんど錆で覆われている。一部錆の切れ目から銀鍍金をした部分がみられる。

ヌ) 鞍 (第22図)

鞍金具としての鞍は四方手、四方緒とも表現され、主として鞍の磁金具に取り付けられ、胸繫尻繫と連結させて鞍に留める金具である。本古墳から発見された鞍は10個を数える。普通は半球形の座金を一体として用いる。座金の形跡を留めるものは6個で、うち1個は鉄地金銅張りの座金である。

鞍は鞍橋の木質に打ち込まれる釘の部分を隠したり、飾った座金と、緒や繫などを通す環とから構成されている。釘の部分は細長く打ち延ばした金具を真中から曲げて、環の端に掛けている。1は釘の部分を2回直角に曲げ、先端は平打ちで尖らせてある。他の鞍の釘部は首部や中間から欠損しているものが多く、釘足の長さは確定できないが、残存部から推定して、5～6cm前後であろう。

2は、金銅張りの座金を有する唯一のものであり、環の制作も丁寧で均整のとれた優品である。座金には、四角形のものと円形のものがあり、2. 6のように半球状のものと、1. 3. 9のように平面的な場合の2種類に分けることができる。

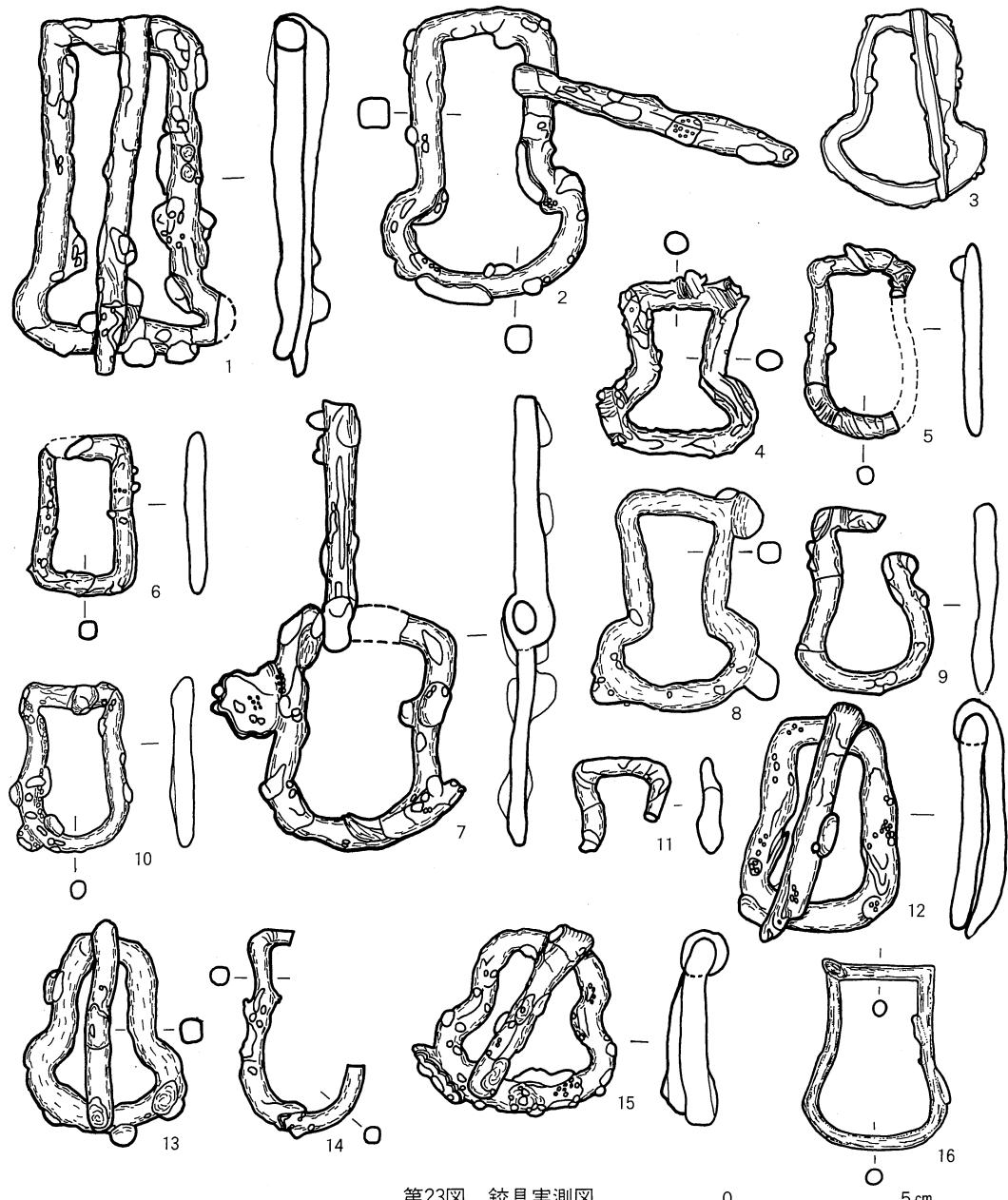


第22図 鞍実測図

ル) 鉸具 (第23図)

多数出土した馬具の中でも鉸具は16個を数える。出土している鉸具はすべて留針式の状態である。地金は鉄であるため錆が著しく、刺鉄のとれてしまっているものが多く、付いているものも錆で、刺鉄の動くものは無い。形から3種類ほどに分けてみた。

A類として、鉸具の形がほぼ長方形に近いもので6. 7. 12



第23図 鉸具実測図

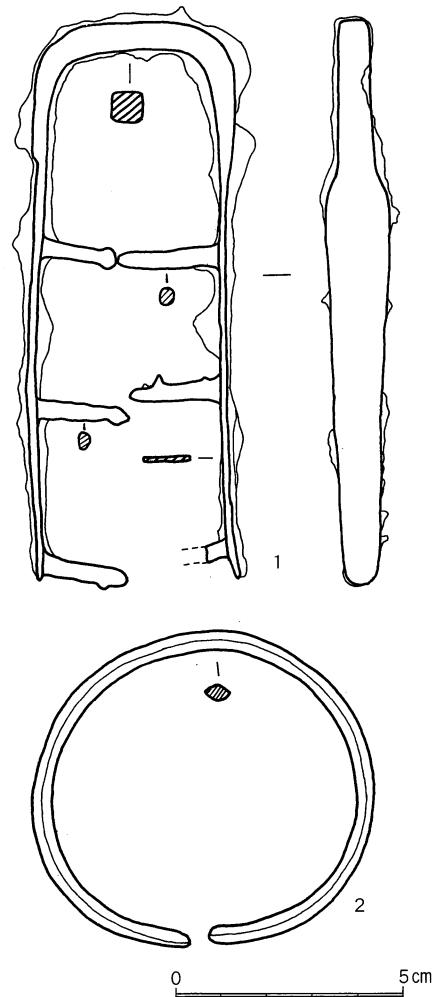
0 5 cm

B類として、刺鉄の留めてある側が狭く、先端部が急に両側に広がるもの 1. 2. 3. 4.

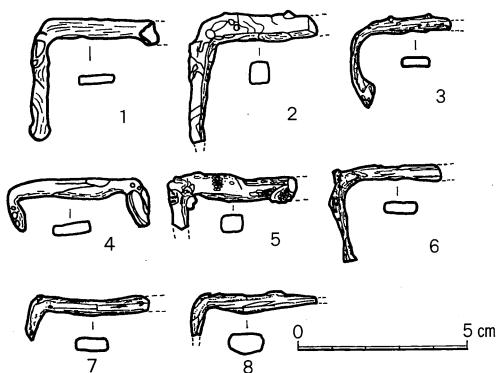
8. 13. 15

C類として、先端部に向かうに連れ、緩やかな膨らみを持つもの 5. 9. 10. 14. 16

大きさなどによって使う場所が異なったと思うが、革緒などの幅も鉸具の大きさに平行したと考えられる。1. 2. 7のような大型のものは鐙に取り付けられたものであろう。1が最も大型で 4.5×9.5 cmの方形を呈し、刺鉄の長さは10cmを計る。



第24図 鐙金具・釧実測図



第25図 鐙実測図

ヲ) 鐙・釧実測図 (第24図)

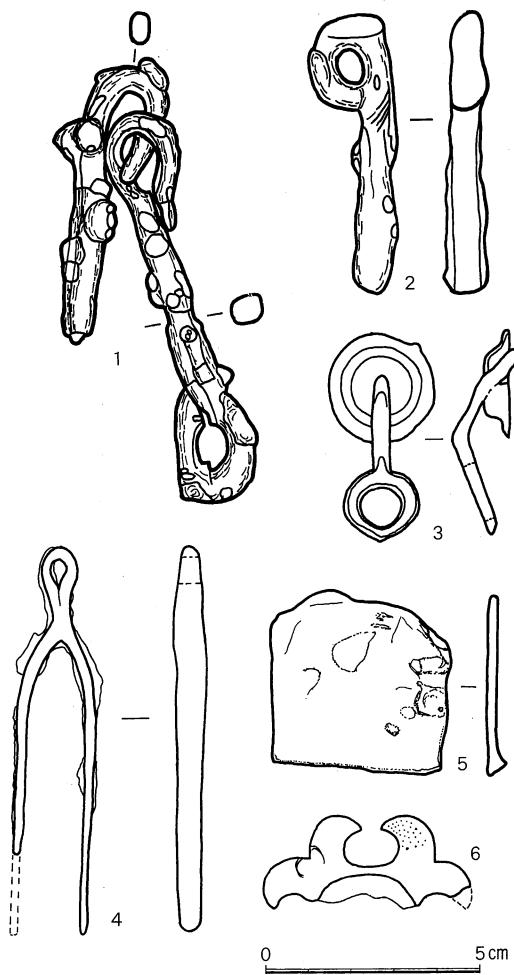
1は鐙の一部を構成する金具である。馬具には鐙が必要なことは当然であるが、形や製作材料などによって分類される。本例は輪鐙で、踏み込みの部分が環状を成すもので、木をたわめてその表面に鍤のある板金具を打ち込んで固定したものと考える。鉄板の最大幅は1.4cm、厚さ1.5mmを計り、上部は一辺6mm程の四角形に造られている。この部分から鐙軸に繋ぎ、鞍に連絡されるわけである。

木心部分は、鉄板などで覆ったものと思われる。このことから、本例は、木心鉄張輪鐙に使用された金具であろう。

2は腕輪で銅製釧である。外形はわずかに橢円形で、長径7.4cm、短径6.8cmを示し、太さ4mm程の大きさで、釧の断面は菱型を呈している。本例は検出状況が極めて珍しく、この環の中に3本の直刀が入っていた。釧で束ねたような状態であった。環体に彫刻したものもみられるが、本例はそのような状況はない。

ワ) 鐙 (第25図)

図に示す8個は鐙と推定する。玄室内の発見が多いが、前庭部や玄室内上部堆積土中からも検出された。ほぼ形をとどめるものは4だけである。他は欠損品である。1. 2. 3. 6は片側のみであるが、全長は6cm前後と推定される。足の長さは3cmほどである。4. 5. 7. 8は足が1cmほどと短く、全体に小型で、全長4cmを計る。造りは平造りのものが5個、角造りが3個である。これらの鐙は、埋葬者を入れた木棺に使用されたものと推定される。



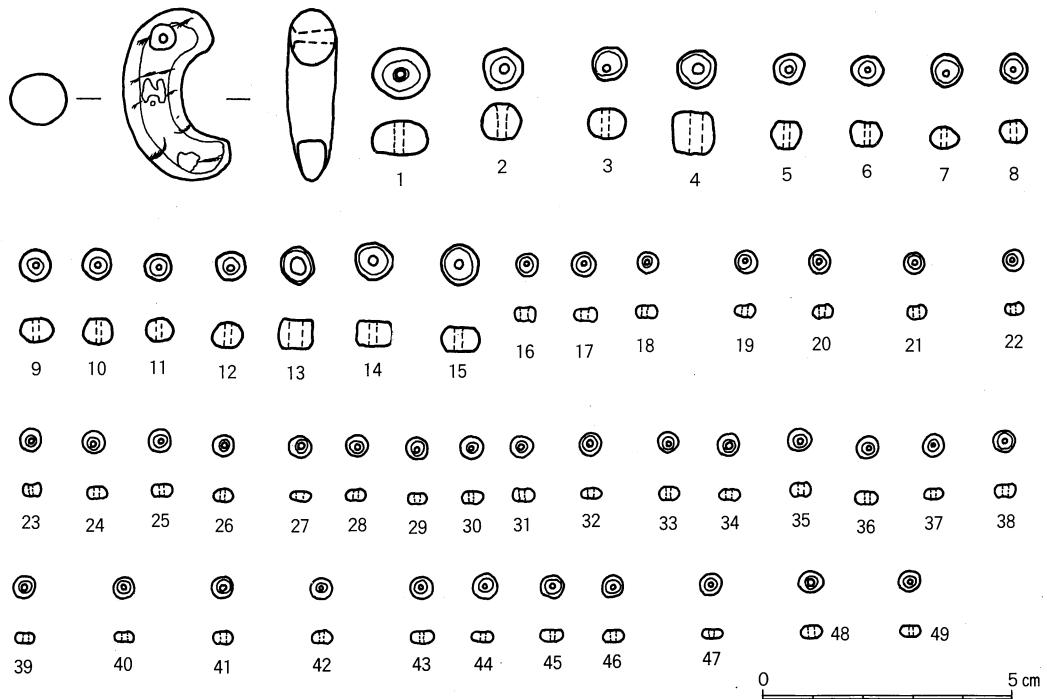
第26図 その他の金属器実測図

カ) その他の金属器 (第26図)

図に示した6個の金属類は、一定の形をとどめているが、使用された場所などを決定できないものである。それぞれに付いて若干の説明を加えながら考察してみたい。

1は両端に輪を持つ鉄製品であり、轡の銜の部分に類似する金具である。また鐙を吊す鉄鎖の役目をする金具として使用しても可能であろう。角造りで全長9.7cmを計る。2もこれに類似する鉄製品である。3は全体が金銅拵えの金具である。鍍金された座金の中心部に径5mmの円孔を穿ち、それに銅に鍍金をした飾り金具状のものを差入れている。座金は円形を呈し、径2.4cmを示す。ドーナツ状の金具は倒卵形を呈し、長径1.8cmの大きさである。全面に鍍金を施しているところから、飾り金具の一部と考えられる。帶金具の中に、これに類似するものがみられる。4はピンセット状の鉄製品で、全長8.9cmを計る。頭部に径2mmの小孔があり、紐状のものならば通すことができる。先端部はやや尖り、平造りになっている。木質部へ打ち込まれたものであろうか。5は鉄

板片である。図に示すように下部が縁状に厚くなり、わずかに円弧を示している。鉄板は2mmの厚さであり、鋸も少なく、しっかりとした鉄片である。6はどのようなものの一部か不明であるが、透かしのような形状に造られ装飾性に富んでいる。杏葉の一部か、帶金具の一部であろうか。いずれも今後の研究に期待したい。



第27図 玉類実測図

2) 玉類 (第27図)

装身具の中で最も一般的なものは、玉類である。本古墳における調査では、勾玉と小玉の二種類が検出された。勾玉は1点のみ発見されただけであり、玄室入り口部分の床面近くの深い位置であった。C字形を呈するもので、一端に孔を穿っている。片側は径3mmの大きさで、一方は1.5mmほどで、穿たれている孔はテーパーがついている。全長3.5cmで、断面橢円形を呈している。材質は瑪瑙^{まのう}であり、形状・大きさ共に一般的である。1~49は小玉である。いずれも玄室内より出土したもので、一ヶ所から集中して発見されている。大きさはほぼ二種類に分かれ、1~15は比較的大きく、以下は径4mm前後のものである。1~15は径5~10mm程の大きさで、円形に近いもの、臼のような形を呈するもの等、形状にバラツキがある。また中央に穿たれている孔も、大きさが相違している。14~49の小玉はほぼ一定の形状を呈している。

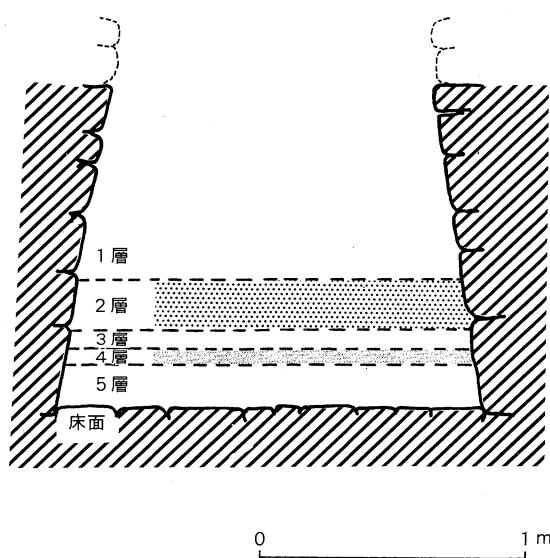
本例のような、後期古墳には、水晶製の切小玉が副葬される例が多いが、一点も検出されなかつた。また勾玉も一点だけと言うのは極めて少なく、盗掘により持ち出されたと推測する。全体的に玉類の少ない古墳である。

3) 人骨・歯の検出状況について

本古墳から検出された人骨及び歯の出土状況は第28図、第29図に示した。平面的な状況は第29図に見るごとく玄室中央部に集中し、また、人骨と歯の出土状況が一致していることがよくわかる。人骨は形を留めているものは少ない。図のイ～へは人骨がかなりまとまっていた部分を示すものであり、この中においてイの骨は明らかに頭がい骨と判明でき、それも後頭部で二人分の骨が側壁にほぼ接して並んで検出されている。これは深さの位置から追葬者のものと考えられる。人骨はかなり搅乱をうけているため細片になり土にまじっているがその量が多い。

次に骨及び歯の垂直分布状況であるが、第28図の模式図に見るごとく、石室床面上55cm前後から検出され出した。そして18cm前後の厚さの中に約75%ほどの歯と骨が含まれていた。(第2層中) この厚さの中には多くの副葬品が含まれていることは当然である。次にこの第二層下に7cmほどの厚さで歯が1点も検出されず、骨も比較的少ない層が位置しており、(第3層) この下に6cmくらいの幅で骨・歯の検出が確認された。(第4層) この下に10cm前後の土層(第5層) があり、床面に達している。この状況は玄室の中ほどから奥壁にかけての範囲から出土した骨・歯の状態である。前述のように大きく二層に分かれているがこの状況は金環の出土状況にも全く当てはまることがあった。このことから本古墳の最初の埋葬者は床面上に10cmほど土を入れそこに木棺直葬が行われたと考えられる。次の追葬者の時には、その面が整地され、7cmほどの厚さにまた土が入れられたのではないかと推測した。以後の場合は、玄室内その都度整地されたり土を加えながら少しづつ厚さを増していくのではないだろうか。埋葬者全体の人数及び性別、年齢は出土した骨・歯の分析を待って今後の研究にしたい。

これは出土した骨・歯等の垂直分布状況を記録した内容から判断したものであるが、追葬の回数や人数を推定する場合に一つの方向を与える資料となるのではないかと考える。



第28図 人骨・歯の垂直分布模式図

4) 人骨及び歯についての所見

出土人骨の保存状態はきわめて不良で、骨質は脆く、崩壊寸前のものが多く、ほとんどが細片状となる。形状を保つ部位は限られ、それらも骨表面の剥落が著しく、原形を残すものは少ない。しかし、歯はエナメル質の歯冠部のみが比較的良好に保存され、複数人骨の埋葬が推定される。

以下、判明した人骨及び歯の概要を記載する。

イ) 人骨について

a : 玄室内

①頭蓋骨：後頭部の一部、ラムダ縫合は内板癒着、外板も一部で癒着している。骨壁は薄く、表面の剥落がはげしい。5×5cm程の残存。側頭骨岩様部の一部。その他に板状の骨片が数片残るのみである。

②下顎骨：左、第二小白歯（歯根のみ陷入）から第三大臼歯（空歯槽）の間の骨体部分が残る。顎舌骨筋線の発達は弱度であろう。

③鎖骨：左、肩峰端寄りの一部の円椎韌帶結節の隆起は強く、菱形韌帶線の溝も深い。

④尺骨：左、半月状切痕の部位のみが残る。

⑤膝蓋骨：1例が縦の半割状態で残る。

⑥大腿骨左：現長約14cm。骨体の上部が残存。骨壁は厚く頑丈な形質であるが、粗面や骨稜の程度は表面の剥離が著しく不明。

⑦大腿骨右：現長約12cm。骨体の上部であるが、形状が上記左側と相似しており、1個体のものかと思われる。

⑧大腿骨左右：不明、骨体中央部分。頑丈な形状は上記のものと同一性がある。接合の可能性もある骨片がやや多量に残存する。これらの大腿部はほぼ1個体としての性状が認められ、強壮な男性人骨とも推定される。

⑨その他：長骨を主とした骨片が多いが、部位形状はすべて不明である。

b : 玄室外

①焼骨：玄室前庭部にて焼けた人骨が検出されている。長骨の破碎片など小量で、すべて火熱により白色、堅緻な骨質となり、変形・湾曲がいちじるしく、微細な亀裂が生じている。部位はすべて不明である。

ロ) 歯について：残存する歯は玄室内で検出され、総計30数本をかぞえる。破損されたものも多く、軟質な歯根はすべて欠失している。しかし、エナメル質で掩われた歯冠のみは、かなり良好な保存状態を保っている。明確に歯種が判明したものは以下のとおりである。（ ）内は類似するが明確でないもの。

- ①切 齒：なし。
- ②犬 齒：上顎左右各1本、同一個体であろう。
- ③第一小白歯：上顎右2本、左1本？。
- ④第二小白歯：上顎左右各1本。
- ⑤第一大臼歯：上顎右（2本？）、左3本（1本）。
下顎右1本、左2本（1本？）、植立歯1本。
- ⑥第二大臼歯：上顎右（2本？）、左3本（1本？）。
下顎左2本、（1本？）、植立歯1本。
- ⑦第三大臼歯：上顎右1本、左1本。
下顎、1本（左右不明）。
- ⑧第一乳臼歯：上顎左。
- ⑨第二乳臼歯：上顎左。
- ⑩第二乳臼歯：下顎左。

同一歯種が最も多いものは、第一大臼歯上顎左3本と第二大臼歯上顎左3本などで、玄室内の人骨は少なくも3体の合葬と推察される。

これらの各歯は個体的に咬耗の程度に多様な差異が見受けられる。歯種別にみて咬耗の強い歯は犬歯、中切歯、第一大臼歯であるとされているが、本例の場合、切歯はまったく残存せず、上顎犬歯が2本残るが咬耗痕は殆んど認められない。第一大臼歯下顎左3本（1本は歯槽に植立）の例をみると、各歯の大きさは近・遠心径、頬舌径に明らかな相違が認められ、咬耗度も異なる。

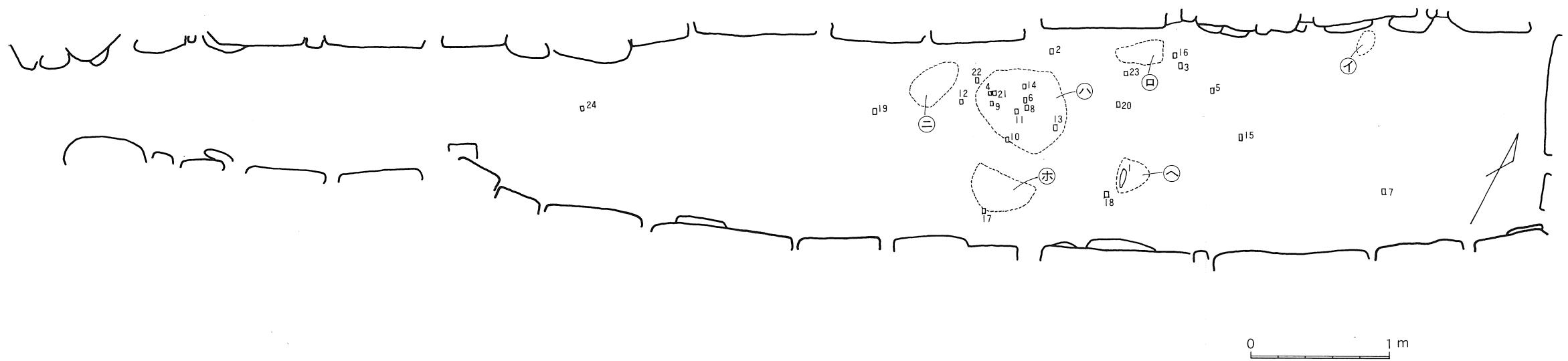
- (1)幅隆線などが鮮明で、咬合面の溝も深く、咬耗が殆ど認められない小型の歯。
- (2)近心頬側咬頭から近心辺縁隆線がやや滑沢で、明瞭な咬耗を残す大型の歯。
- (3)近心、遠心の頬側咬頭が消失する摩耗は、各咬頭の頭頂に点状の歯齶腔の露出を生じ、咬合面は全面的に頬側に傾斜、凹湾し辺縁が鋭い稜状となる過度の咬耗の痕を止めているものなどである。

その他にも、小白歯で舌側咬頭が小平状、頬側咬頭も尖端がそれぞれ咬耗により消失。臼歯（位置不明）で咬合面が滑沢な平面状となり、歯頸近くまで及んでいるなどの各例が観察される。 第二大臼歯上顎右1例において、近心舌側咬頭の舌側面にカラベリ結節（過剥結節）の出現がみられる。

全体的にみた咬耗度はマルチンの0°から2°、初期の各年齢期（青年・壮年期）の範囲に入るものと見なされる。また、乳臼歯を残す7、8歳以下の幼児期の人骨も混在している。

〈最後に〉

歯種の鑑定にあたり、山崎裕、田中實両博士、川本敬一氏の御教示を頂いた。（西沢寿晃）

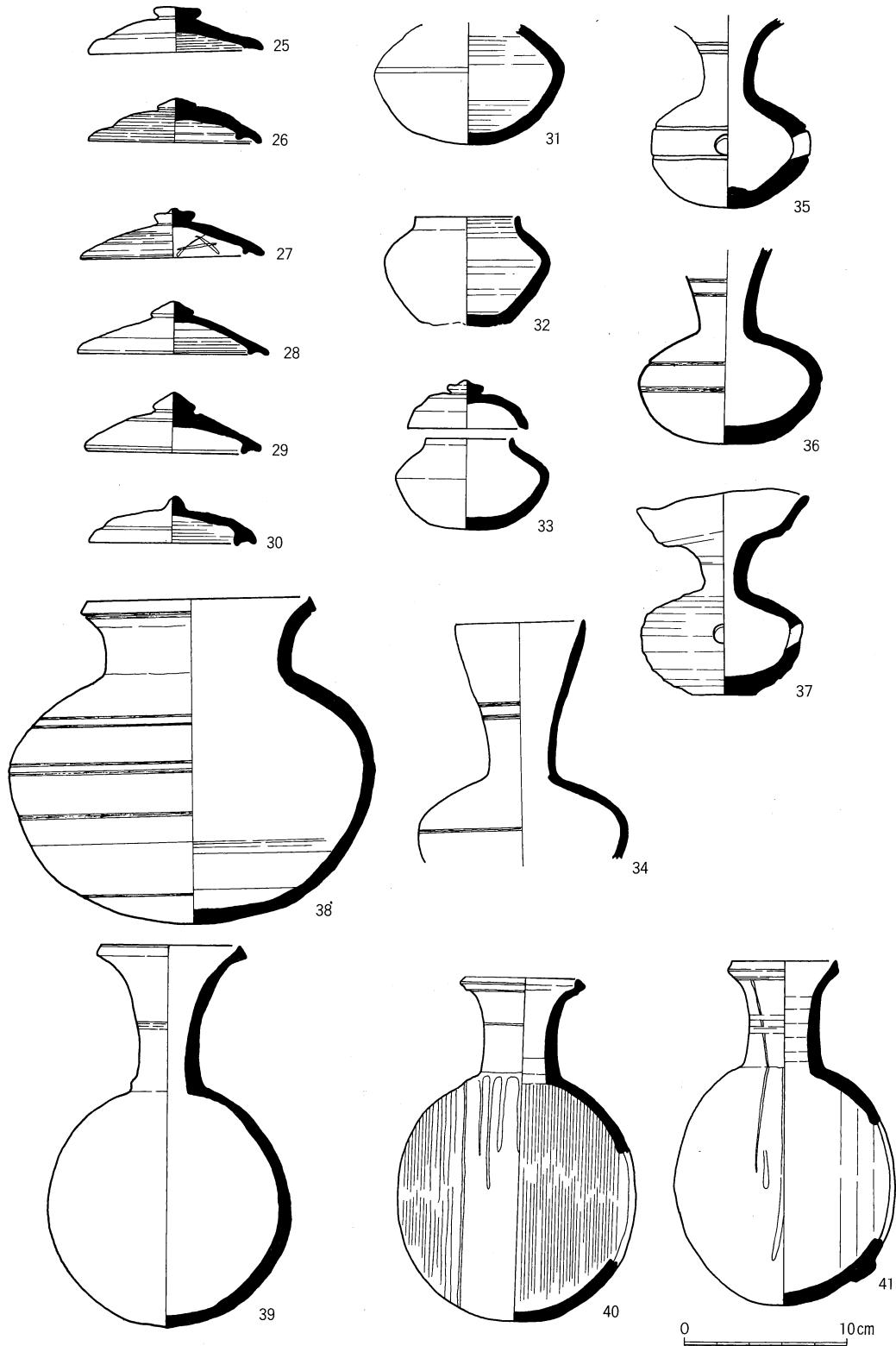


1 骨片 2 齒 3 骨 4 齒 5 骨 6 骨 7 齒 8 齒
 9 骨 10 齒 11 骨 12 齒 13 齒 14 齒 15 骨 16 骨
 17 骨 18 骨 19 齒 2本 20 齒 1本 21 齒 4本 22 齒 4本
 23 齒 1本 24 齒 1本

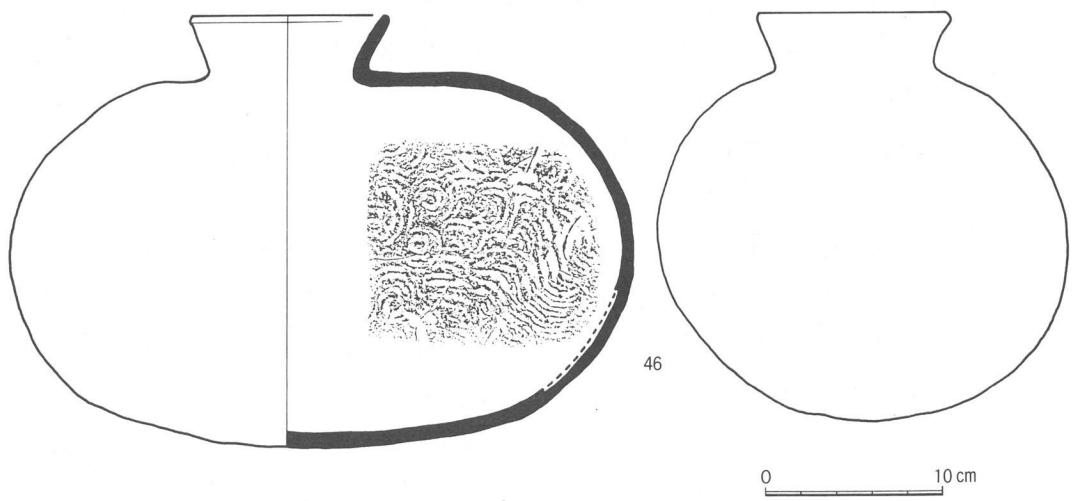
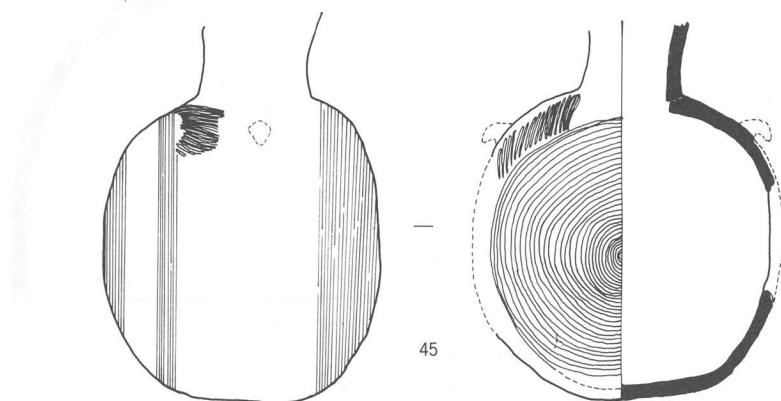
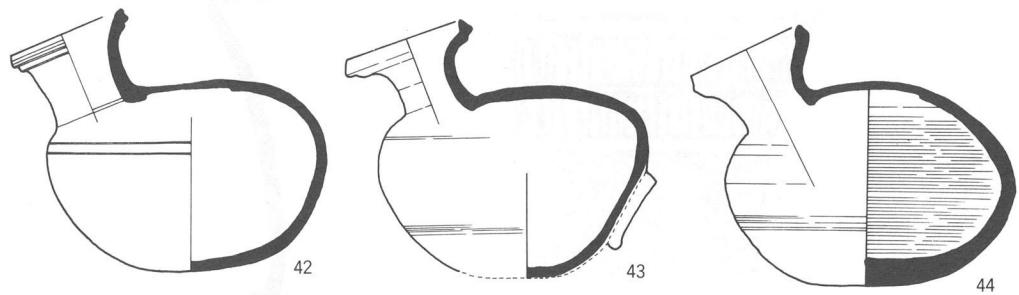
第29図 石室内骨・歯出土分布図



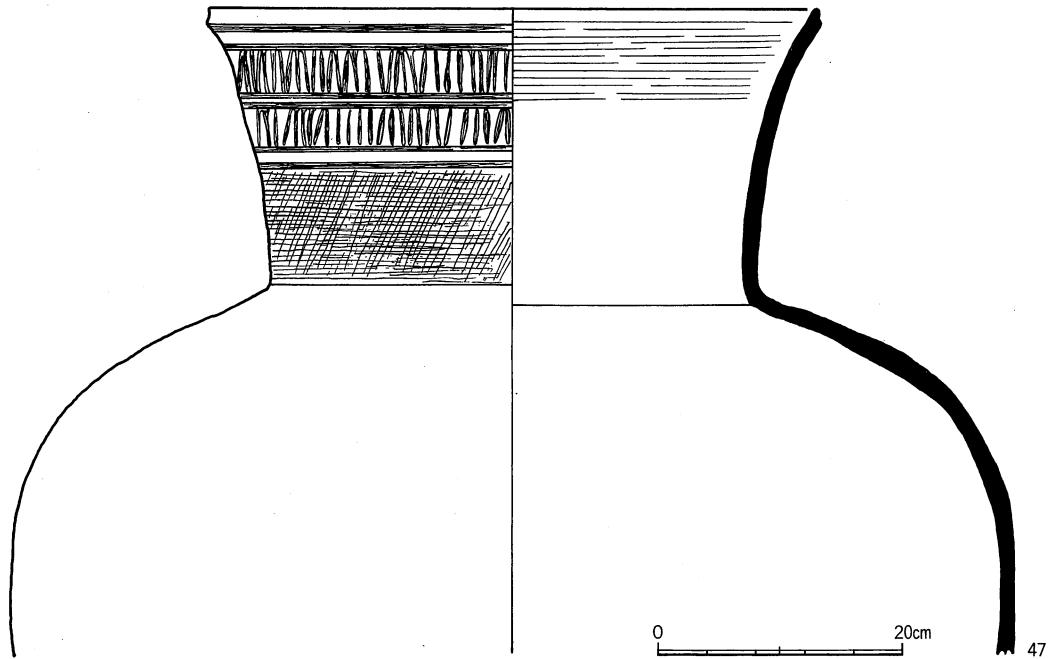
第30図 出土土器実測図No.1



第31図 出土土器実測図No.2



第32図 出土土器実測図No.3



第33図 大甕実測図

5) 出土土師器・須恵器 (第30~33図)

土師器 高坏

高坏と思われる土師器の破片は数10点を越えるが、細片となっているものがほとんどであり、接合作業によって復元が成され、全器形を知りうるものは、3個体だけである。そこで各部位に分けて、その特徴について調べる。

- ◎ 坯部
 - a、有段口縁の形態を呈し、口縁部が外反、口径18.5cmとやや大形のもの。
ヨコ方向のヘラミガキ
 - b、内黒で内湾氣味に立ち上がり、坏底部との稜はなし。口縁部が短いため、坏部は浅い形状を呈し、皿形に近い。坏部にホゾを有し、坏部 ヨコ方向のヘラミガキ
- ◎ 脚部
 - a、柱状部が10~11cmの長さを持ち、裾部への移行部の開きは5cm以内に留まる。
タテ方向のヘラミガキ
 - b、柱状部が6~8cmの長さを持ち、裾部への移行部の開きは、5cm以内に留まる。
タテ方向のヘラミガキ

◎ 坯部との接合面は、いわゆるホゾ状の突起によって充填されているが、脚部a類は、脚部に属す。b類は、ホゾは坏部に属し、脚内に挿入されている。

A類・坏部a類は、胎土は精選されており、焼成は良好で、焼き締めは硬い。脚部は、a類でヘラミガキも丁寧である。ホゾは脚部に属す。比較的大型の高坏といえよう。器壁は、

やや厚めであり、全体的にボッティリとした外観である。

B類・坏部 b類、脚部 b類、胎土は、長石を多く含み、焼きはやや軟質器壁は薄手である。

出土土師器観察表

No.	名称	色調	焼成	胎土	成形・調整・形態の特徴
1	高坏 (脚部)	・赤褐色	良好	長石多量混入	・坏部と脚部の接合ホゾは脚部に属する。 ・種状部タテ方向のヘラミガキ。 ・柱状部円筒形。・柱状部と裾部の境区別あり。
2	高坏 (完形)	・多面赤褐色 ・坏部内面黒色	良好	長石多少混入	・ホゾは脚部に属する。・坏部内外面ヨコ方向、脚部タテ方向のヘラミガキ。・坏部は直線的に外方へ開き、坏底部の稜線は明瞭で、柱状部は長脚。
3	高坏 (完形)	・外面赤褐色 ・坏部内面黒色	やや良	長石多量混入	・ホゾは脚部に属す。坏部内外面ヨコ方向、脚部タテ方向のヘラミガキ。坏部は、浅く椀状を呈し、坏底部との稜は不明瞭である。脚部はさほど高くなく、筒部下端が大きくふくらみ裾部が開く。
4	高坏 (完形)	・外面赤褐色 ・坏部内面黒色	やや良	長石多量混入	・ホゾは脚部に属す。坏部内外面ヨコ方向、脚部タテ方向のヘラミガキ。坏部は、浅く椀状を呈し、坏底部との稜が不明瞭である。脚部は高くなく、筒部下端が大きくふくらみ裾部が開く。

須惠器

・坏 (No.5～9)

坏は、小型のもの (No.5～8) と大型のもの (No.9) に分けられる。前者は、およそ7世紀頃の所産と思われる。それに比し、後者のNo.9は、口径15cm程と大きく、丸底でヘラケズリが施され、底部から内湾ぎみに口縁部が立ち上がる。前者のものよりも時期はやや下がり、およそ8世紀初頭と推定される。

・蓋坏 (No.10～16)

No.10～12は蓋で、器高が高く深い。口縁部との稜線が不明瞭であり、口縁部端部は内傾した凹面を形成している。

No.13～16は身で、器高は低く薄い。口縁部はハの字状に短く内側へ開いて立ち上がり、口縁部端部は丸く仕上げられている。蓋受部は短く、やや上方に伸び、端部は口縁部同様に丸く仕上げられている。また、蓋、身の外面の一部に、焼成時における自然釉の付着がみられる。蓋と身のセット関係は不明である。

・高坏 (No.17～24)

高坏は、坏部が稜をもって内湾しながら立ち上がり、脚部は柱状部が短く裾部が大きくハの字状に広がりをみせるもの (No.17～22. 24) と、柱状部が長く、2段の透し孔入りの脚部のもの (No.23) とに分かれる。後者は坏蓋の稜線や、端部の仕上げが甘くなっている。

前者と後者との間に時間差が認められ、後者が前者よりも後出のものと考えられる。

・蓋 (No.25～33)

No.25～30は、およそ7世紀中頃から後半の産出と思われるものである。No.31～33は、小型有

蓋短頸壺であり、焼成時における自然釉の付着が認められる。両者共、胎土は精選されており、焼き締めは堅い。

・長頸壺 (No.34)

口縁部のほぼ中位よりやや内湾ぎみに直線的に立ち上がる。頸部は、くの字状に屈曲し、大きく肩が張るように胴上位の最大径を有するもので、稜を形成して沈線を施し、胴下半部へ逆への字状に移行する形態のものである。

・疋 (No.35～37)

No.35・36は、頸部が細く縮り大きく外反するもので、口辺部は段を有しやや内湾ぎみに立ち上がりを見せるものと思われる。胴部のほぼ中位に小孔が穿けられ、その上部と下部に沈線が施される。それに比し、No.37は形態的には前者と大きな違いはないものの、ロクロ成形時の陵線がはっきりと残るもので、沈線が施されない。

・広口壺 (No.38)

口頸部はほぼ直に立ち上がり、口縁部は外反を見せる。頸部はくの字状に屈曲し、大きく胴部がふくらみ、丸底ではあるが安定性のある形態をする。口縁部から胴下半部まで、ほぼ等間隔で沈線が施される。

・フラスコ型長頸壺 (No.39～41)

口辺部は外反し、ヘラ状工具による口縁部の丁寧な作出を行っている。胴部は、ほぼ球状にふくらむもので、平瓶との大きな違いを見せる。体部成形時の回転軸をはずして口頸部を取り付けてある。

・平瓶 (No.42～44)

口縁部がくびれ、頸部は短く、胴部は平らで安定した形態である。およそ8世紀頃の所産と推測される。

・提瓶 (No.45)

体部成形時の回転軸をはずした部位に口頸部を取り付けてあり、ちょうど肩の部分が欠損しているため明らかではないが、把手があったのではないかと思われる。

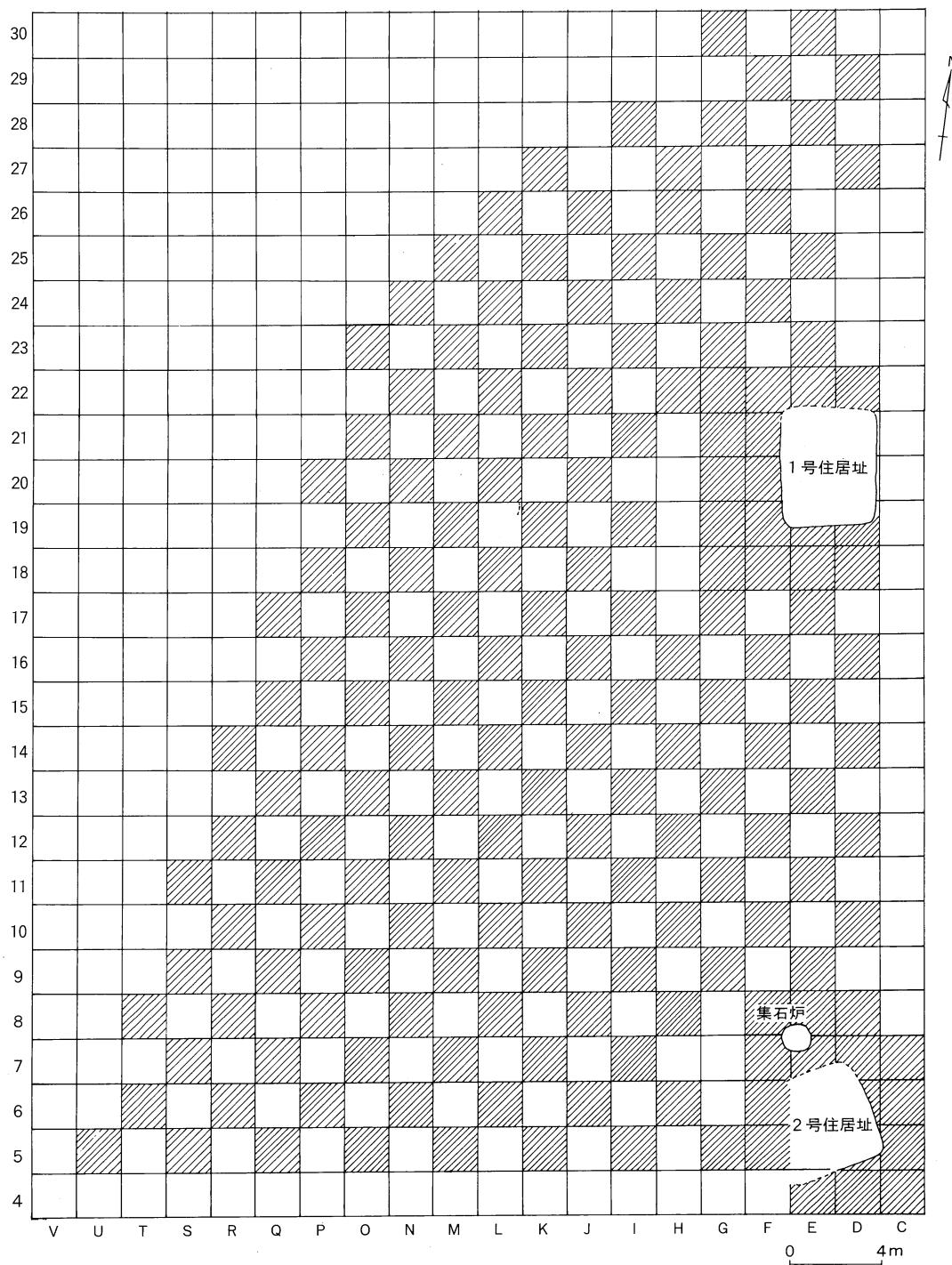
・横竈 (No.46)

外面平行線文、内面同心円文の叩き目が残り、器面のほぼ半分に緑色の自然釉の付着がみられる。

・大甕 (No.47)

口縁部はあまり大きな外反をみせず開くもので、口辺部は成形上やや内湾ぎみに立ち上がりをみせる。頸部はくの字状に屈曲し大きく肩を張るように胴部を作出し、胴上位に最大径を有するものである。口径51.0cm・胴部最大径82.5cmあまりであり、器高の推定数値は、およそ1.0m前後になるものと思われる。外面は平行線文の叩き目を残すが、内面は丁寧なナデによる調整であり、内外面共に自然釉の付着が認められる。

第IV章 その他の時代の遺構と遺物

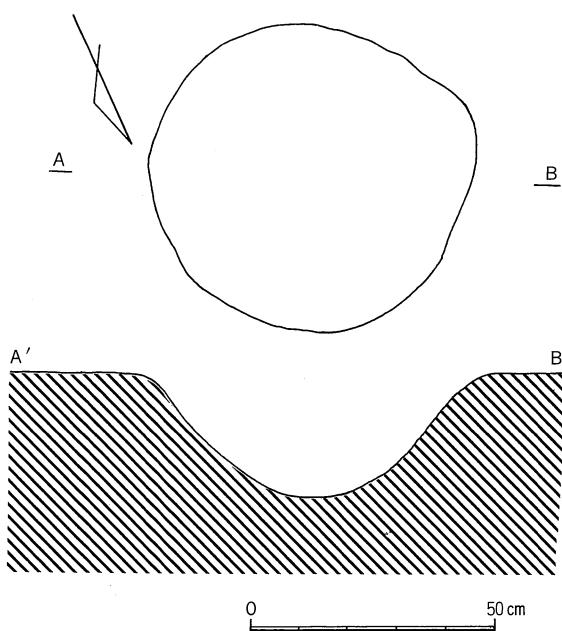


第34図 遺構全測図

第1節 繩文時代

1. 遺構

1) 集石炉 (第34図)



第35図 集石炉実測図

本遺構は第2号住居址の西側、E-7・8グリッドに位置している。直径70cmほどの円形内に拳大から頭大くらいの石を集め、半球状に盛り上げられている。これらの石はほとんどが焼けた石と思われる。掘り込まれた穴の下部に位置している石は、ほとんどが真っ黒で煤と油を混ぜ合わせたものの中に入っているように感じた。穴の壁も同様で、一部分は焼土と炭が混入している。石は700余を数え、ほとんどが花崗岩系統のものである。掘り込まれた穴の深さは30cm弱で、その中にぎっしりと積み重ねられている状態で入っている。このような集石状況は町内においては、並木下遺跡、上の林遺跡等3例ほど見られる。いずれも縄文時代中

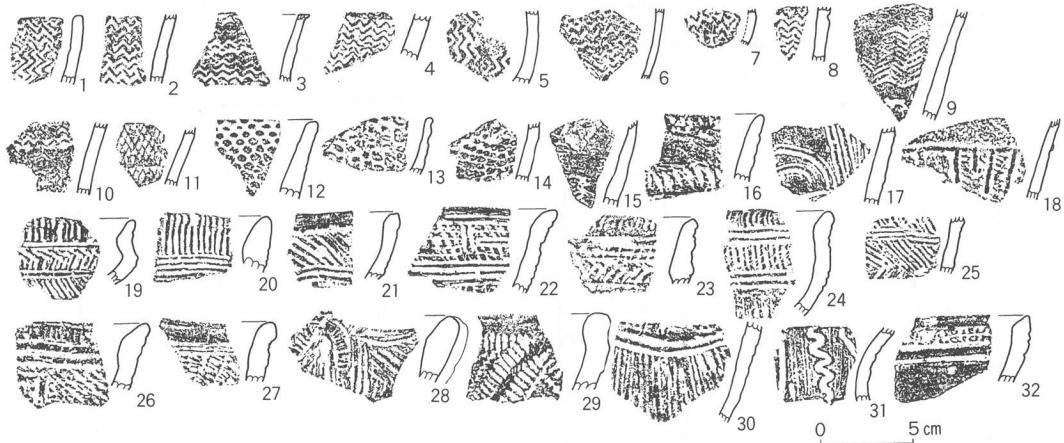
ごろの遺跡に位置していた。本遺跡においては、縄文時代の遺構は顕著に表れなかつたが、周辺からは、前期から中期初頭にかけての土器片がみられた。本遺構の性格を決定することは難しいが、類例を捜し、今後の研究に待ちたい。

2. 遺物

1) 土器 (第36図)

グリッド調査による土器片の主なものを第36図の拓影に示した。全体的には縄文時代早期の押型文土器の一群と、前期末から中期初頭に位置するものが多い。1~10は文様として山形文を施している。山形の大きさは大小2種になり、口縁に添って施文されているものが多いが、1は縦・横の二方向になっている。11はただ一つの格子目文土器である。12~15は楕円文土器であり、口縁に平行して施文されている。16は爪形を施しており纖維の混入が見られる。18~20は前期末の土器でソーメン状貼付けが見られる。晴ヶ峰式に平行する。21~28は中期初頭梨

久保式土器である。29は藤内式土器の口縁部である。30～31は半割竹管を用いて文様が施されおり、曾利式土器の古い部類に入る。

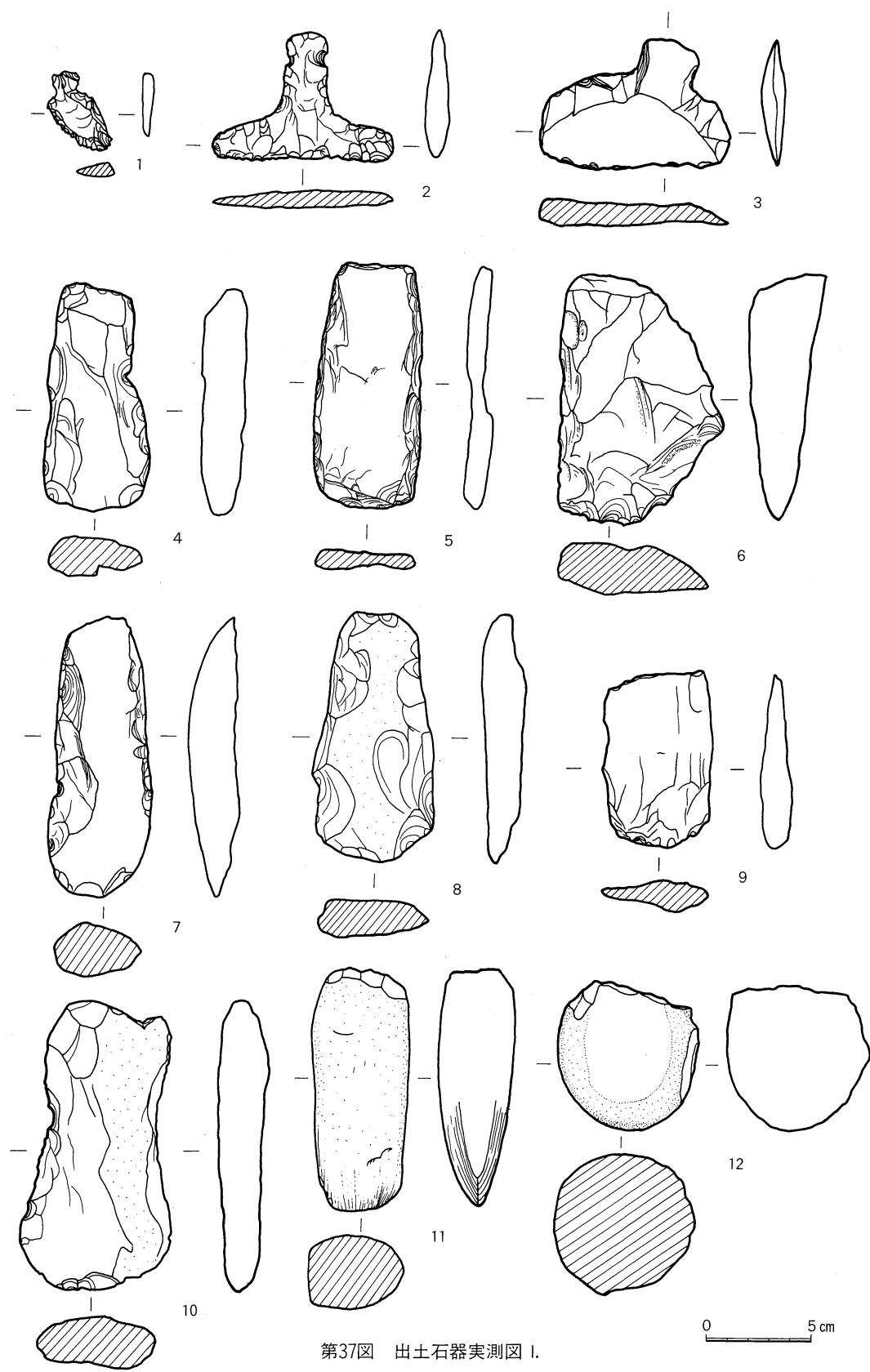


第36図 出土土器拓影

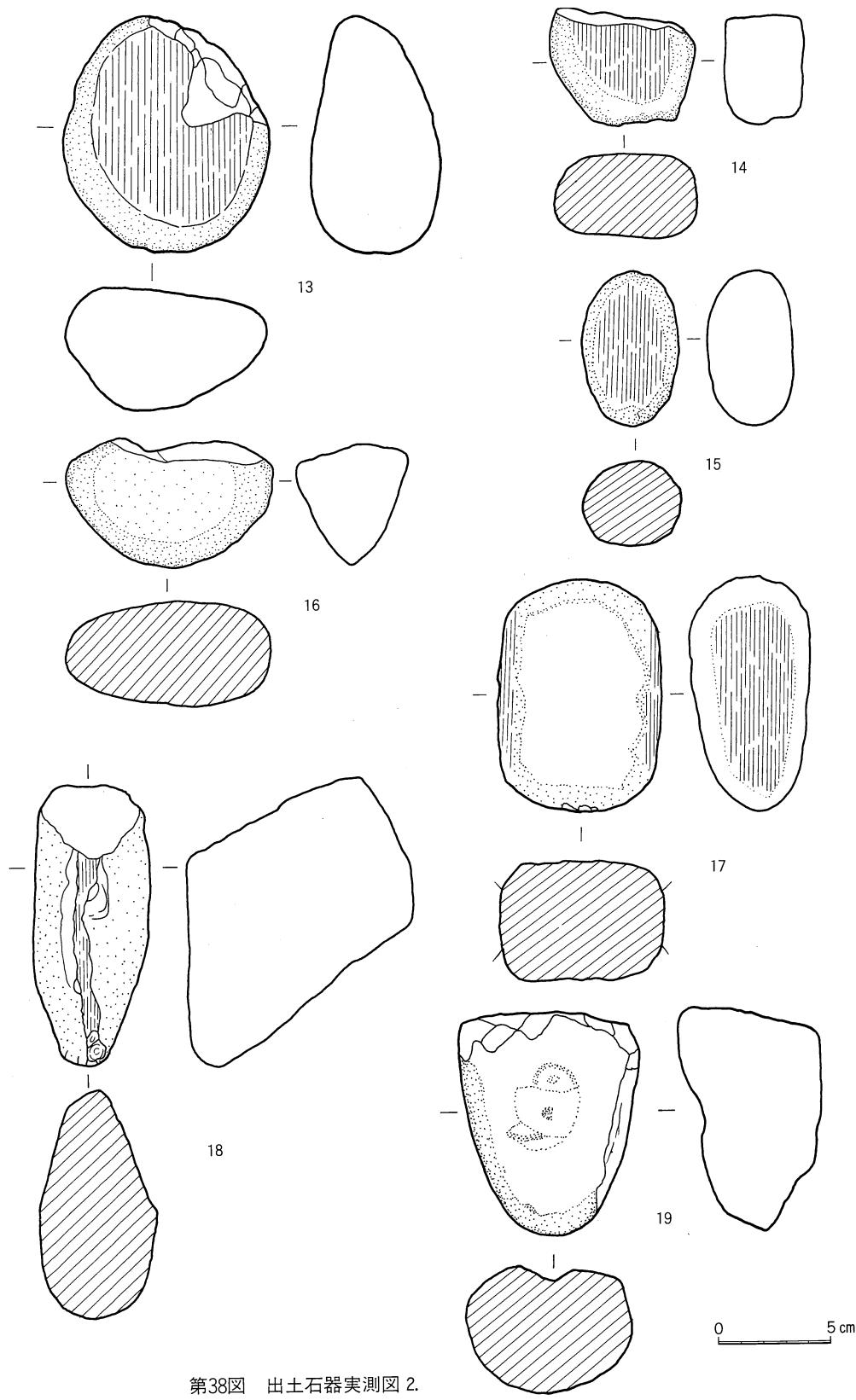
2) 石器（第37・38図）

本調査において石器として取り上げたものは総数19点である。うち石斧が8点、磨石7点、石匙が3点、凹石1点である。

第37図1～3は石匙である。1は刃部がつまみにたいして斜行する形態を示し、いわゆる縦形と横形の中間形のような部類にはいる。つまみの部分には両側からノッチをいれ、刃部は斜辺に形成されている。小型の石匙で石質はチャートである。2は刃部がつまみに対して直交する形態（横形）である。刃部の長は7.8cmで両側から調整し、両刃になっている。形態は左右対象形で均整のとれた形を呈している。3は2と同じく横形の石匙である。母石の側片を用いて、それから打ち出して形を整えている。刃部は床面に平らになるように調整しており、全体的に薄く作られている。基部の抉りはやや浅い。石質は砂岩である。4～10は打製石斧である。うち2点は頭部が折損しているが、残りは完全である。6. 8. 10はバチ型を呈し、他は短冊型の石斧である。6は母石の芯を用いて形成しているが、他は剥片を利用している。10は刃部がかなり摩耗しているところから、繰り返し使用されたことを物語っている。石質は緑色凝灰岩・砂岩等である。11は磨製石斧である。刃部を両面から擦り落として、蛤刃状に形成している。領家变成岩を用いている。12～18は磨石に分類される。円形・橢円形を呈する自然石を用い、いくつかの面に擦痕が見られる。また、石の底に位置する部分に付いては敲きに使用したものと考えられる痕も見られる。17は両側縁の使用により、石の形状がかなり変わっている。安山岩・砂岩質のものが多い。19はいわゆる凹石と呼ばれる石器である。磨石としてまた敲き石としても使用されている。片面ほぼ中央部に2個の凹みが残っており、大きなロート状を示し、回転摩耗の痕跡を残している。小さな凹みも回転摩耗と見るのが適当であろう。石質は砂岩である。



第37図 出土石器実測図 I.

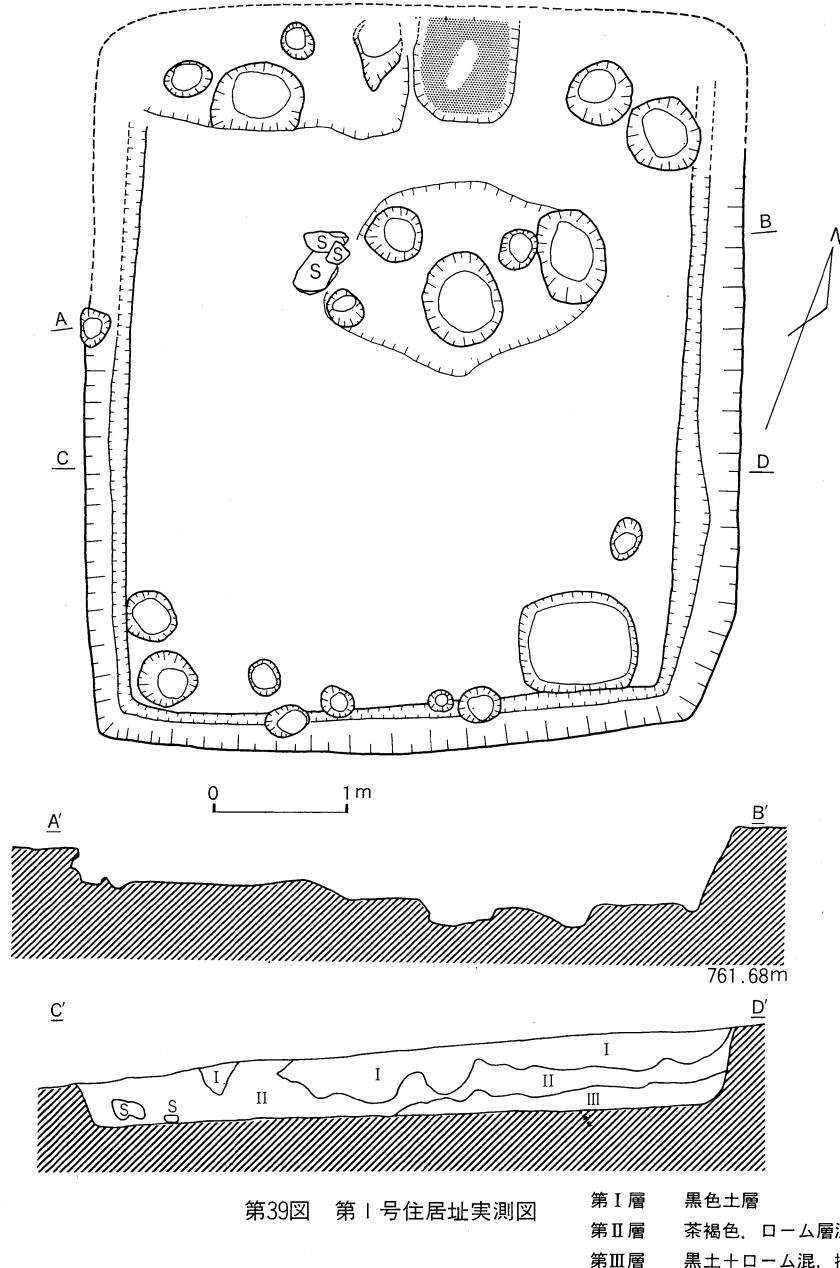


第38図 出土石器実測図 2.

第2節 平安時代

1. 遺構

1) 住居址

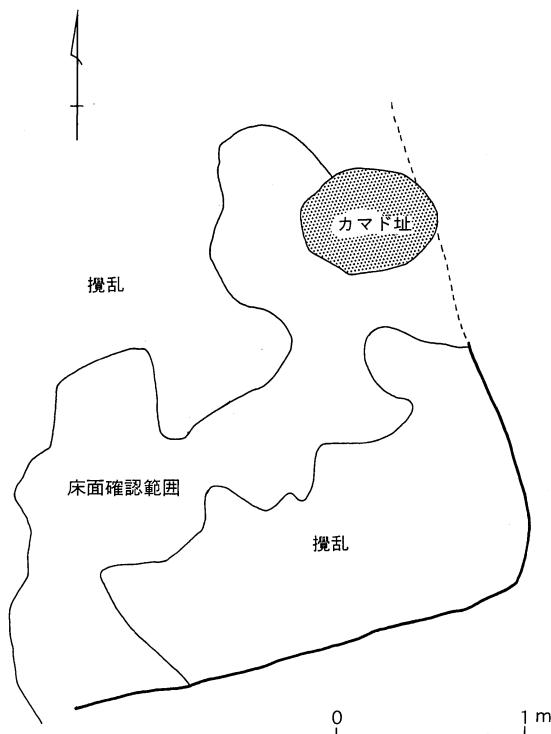


イ) 第1号住居址 (第39図)

調査地東よりのD-20、21グリッドを中心にして住居址が発見された。北西に緩やかな傾斜を成す遺跡地は日当たりの良い好条件を備えた場所である。斜面上の東側壁を深く掘り込み、南

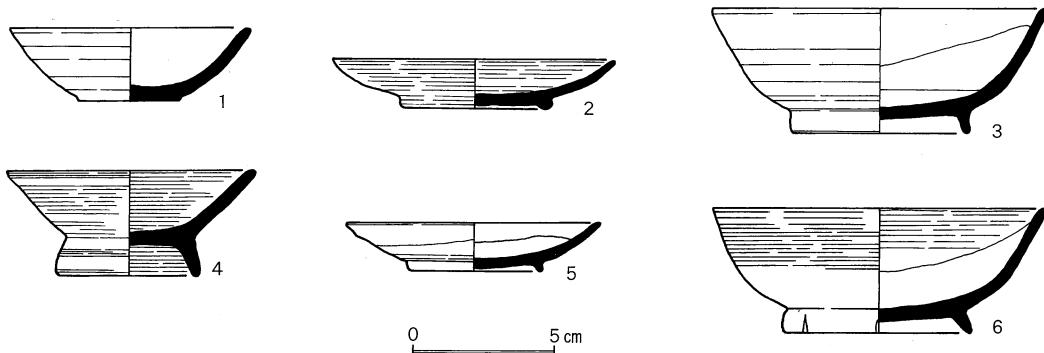
北がやや長い方形を呈している。カマドの位置している北壁が、長芋掘りの機械によって、ベルト状に全く掘り返されており、北壁は不明である。プランは東西4m55cm、南北推定5m40cm程と考える。カマドは北壁ほぼ中央に位置していたと推定される。それを物語るようにカマドの芯石が掘り込まれていたと推定される穴と、焼土が検出された。本住居址もカマドの片側にピットを伴っている。床面中央やや北西よりに平石が置かれているが、作業台的な役割をしたものであろうか。床面は全体的にほぼ平らで、しっかりとをしている。壁は全体的にはやや急な斜壁で、東側は壁高58cm、西壁で30cmを計る。周溝がほぼ全面にみられ、5~10cmの深さを示している。住居址ローム層を掘り込み、壁、床面供に敲いて調整している。出土した土器から推定して10世紀末から11世紀にかけての住居址と考えられる。

口) 第2号住居址(第40図)



調査地北東の角に発見された住居址である。図に見るごとくカマド跡と考えられる一部と、住居址の一部分が検出されただけである。長芋栽培による耕作土の掘り返しで、住居址はほとんど搅乱されている。カマドを構成していた石は全くみられず、焼土が炉跡に残っている。床面確認範囲はカマド前の一帯と他は、わずかである。そのため、プランの推定もできないが、北壁中央部にカマドを有する方形住居址と考える。出土遺物などから11世紀中ごろの住居址であろう。

第40図 第2号住居址実測図



第41図 第1・2号住居址出土土器・陶器実測図

2. 遺 物

1) 第1・2号住居址出土土器・陶器 第41図

1～4は第1号住居址床面から検出されたものである。1は土師器の壺で、茶褐色を呈し、胎土中には雲母・長石を含み、焼成はやや良である。器の一部を欠損している。2は灰釉の皿で小さな高台が付いている。灰白色を呈し、焼成は良い。3は灰釉碗である。精選された胎土で、焼成は良好である。4は土師器の壺で、2cm近い高台を有している。茶褐色の色調で、胎土中には雲母・長石を含み、焼成はやや良である。第1号住居址は10世紀から11世紀前半頃に位置する住居址である。5・6は第2号住居址土中から検出されたものである。5は灰釉の皿で、灰白色を呈し、焼成は良好である。6は灰釉碗で、径17cmと大きなものである。灰白色を呈し、焼成は良い。第2号住居址は、1号住居址に續く。11世紀中ごろに位置するものと考える。

第V章 まとめ

源波古墳そのものの考察の前に周囲の状況について少し触れてみたい。伊那谷の古墳文化をみると、その中心は下伊那郡にあり、それも飯田盆地に密集している。神坂峠を越えた文化は前方に広がる広々とした飯田盆地に根をおろし、そこに大きな古墳文化が花開くのである。その時期は4世紀末から5世紀初頭と推定される。そして古墳時代中期から後期にかけ、多くの古墳が築造されるのである。その数は600余基といわれ、そのうち前方後円墳は17基余を数える。飯田盆地においても南部地区に古い古墳が目立ち、後期になると北部に移っている。これは古墳文化が北進を開始することを示したものと見られる。

6世紀中頃に至り、北進を開始した文化は上伊那に入る。北上した古墳文化は上伊那で第二期の展開を示す。その中心がわが箕輪町に位置する松島王墓古墳である。本古墳を中心として上伊那郡内には160余基が確認されている。

次に箕輪町内における古墳分布状況であるが、大きく4地区に分けて考えられる。

1. 松島王墓古墳群

松島区北部で深沢川右岸段丘上に位置する王墓古墳を中心とするもので、現在陪塚が1基確認されている。以前には他にも何基か存在したと伝えられている。

2. 長岡古墳群

長岡地籍一帯に展開する多数の古墳で、町内で最も古墳の密集した地域である。現在12基ほどが確認されているが、消滅したものは10基余といわれている。源波古墳はこの古墳群に属するものである。

3. 三日町古墳群

三日町・福与地区に分布する5基の古墳で、形を留めるものは少ない。天王塚古墳は整備事業により消滅の運命にあったが、昭和57年の調査後、町郷土博物館前の庭に移転復元されている。

4. 西部山麓古墳群

竜西の山麓に分布する古墳で5基を数える。他にも存在したという伝承が残っているが不明である。

町内に分布する古墳は4群の中にはほぼ含まれるが、墳丘を留める古墳は少なく、消滅したものや、わずかにその形跡を残すだけのものが多い。箕輪町内における古墳の分布状況は以上のようなであるが、源波古墳の位置する長岡古墳群について考えてみる。

長岡は沢川の押し出しによって形成された扇状地である。古墳の立地は段丘上の縁辺に並ぶ

群集墳と、台地の上部に位置する単独墳に分けることができる。源波古墳は台地の最上部に位置している単独墳で、長岡古墳群の中では最大級の部類に入る。

・古墳築造の背影

古墳築造の背影として豪族の存在が考えられなければならない。豪族の発生にはその経済的裏づけが何であるか、長岡古墳群の場合を推定した時、まず第一に肥沃な農耕地が上げられる。これは主として畑作である。第二として眼下に見る天竜川面の水田である。しかし、これだけであのようない古墳を築造し得るだけの富を誇ったとは考えられない。そうした時はたして何でその経済力を補ったのであろうか。

古墳から出土した多量の馬具を考えた時、馬の存在を無視することはできない。長岡・南北小河内また天竜川右岸・大出から沢上地籍にかけて、馬の飼育があったのではないだろうか。馬の飼育は、中央政府にとっても重要な仕事であり、良い馬を多量に必要とした。信濃国には多くの牧が設置されたことからも、それをうかがうことができる。農耕による生産の他に牧の経営を推測したい。また東山道の開設により駅馬制が設定されることにより、深沢駅の存在とそれに携わる駅馬の育成、等、馬の飼育によって大きな経済力を持つ集団ができ上がったのではないだろうか。古墳築造の背影を以上のように考えたい。

・古墳の概要

源波古墳は台地の最上部に位置している単独墳である。墳丘は長い間徐々に削平され、わずかにその盛土状況を感じさせるだけとなっていた。発掘調査の結果、径約20m、高さは推定3.5～4mであったと考える。内部構造は片袖の横穴式石室で、石室の全長は11.5m、玄室は7.5m、羨道部は4m、玄室最大幅1.65m、奥壁付近1.45m、玄門部付近1.05m、羨道部幅0.95m、の規模である。幅が狭く、長い石室が特徴で、石室及び古墳そのものは大型の円墳といえる。

次に石室を構成する積石は、根石にやや大き目の平石を使用し、二段目以上は自然石を小口積みにし上になるに従い前にせり出す形（持ち送り状況）になっている。側壁は3～4段まで形を留めているが、その上段及び、天井石は全く確認することはできなかった。また側壁の裏積みは、石は使用されておらず、赤土を練って裏詰めにしている。石の少ない場所であるため、考えた結果の工夫であろう。周溝はほぼ全周しており、前庭部右の東南寄りが最も幅が広く顕著な状況である。石室は西南に開口し、古墳の位置からは眼下が一望できる絶景の場所である。

・副葬品

副葬品のうち金属類及び玉類はほとんど石室内からの出土である。須恵器及び土師器類は前庭部と周溝内からの出土で、一部羨道部から発見されている。石室内の副葬品は盜掘及び、追葬時における石室内の片付け等において移動しており、原位置を保っていると考えられるものは極めて少ない。直刀は9振りを数えるが、玄室の最奥部に近い右側壁寄りに位置していた短い直刀は、鞘、鐔の状況を見る能够唯一のもので、これは埋葬時の原位置のままと考

えたい。また玄門部に釧で束ねた状態で検出した3振りの直刀も原位置を保っていると考えたい。袖部の角に立て掛けた状態で検出された3振りの直刀は、追葬時において片付けをした時に置いたのではないかと思われるが、鋒を上にし、抜き身のままで立て掛けるという状況は何を意味するのか、今後の類例を待って考えたい。次にこれらの直刀はすべて平棟平造りで、鋒はふくらついているものが多く、1振りだけがカマス鋒になっている。また鍔元に穴を穿っているものが1振り見られる。儀仗刀としての意味が強いものと思われる。また鰐等の刀装具類も多く、鍍金をした切羽の出土は頭椎大刀の存在が考えられる。

次に耳飾りであるが、2個を除いて他はすべて石室内において検出されている。総数16個を数え、そのうち10個、5組は対をなすものである。この数は埋葬されている人数を推測する手掛かりになるという考え方もあるが、どうであろうか。

次に馬具であるが、轡、鞍金具、辻金具等の金属類には鍍金をしたものが多く、「飾られた馬具」という感じが強い。またこれ等の金属類も3分類ほどに分けて観察することができ、時期的な相違と共に、追葬の回数や古墳を使用した時間などについて今後の研究資料としたい。

玉類は総数も少なく、盗掘時に持ち出されたと考えることができよう。勾玉が1個、切子玉は無く、小玉は1人分ほどもない。

石室外から検出した遺物は、須恵器が最も多く、前庭部や東南部の周溝内に集中している。これ等の器類にも、金属類と同様な時期的な相違が見られ、東南部の周溝内より出土した大甕は古墳築造時に持つて来たものと推測される。検出された器類は、墓前祭祀に使用したものと考えられ、石室内にはほとんど見られなかった。

・被葬者について

長岡古墳群の存在は、その地に豪族が位置していたことを示すものであり、同時に、豪族が発生する経済的裏づけになる要因をそなえていたのである。箕輪町内に存在する古墳は20余基が確認されているが、築造時期が推定できるものはきわめて少ない。伊那谷を北上した古墳文化が上伊那に入ってきた時期を6世紀中頃と考えた時（中にはその時期より以前に築造された古墳も確認されている。）箕輪町内の多くの古墳は6世紀中頃から築造したと考えられる。この中において松島王墓古墳は、北部伊那谷の古墳文化を代表するものであり、他の円墳類とは古墳の性格が異なる存在である。同古墳は6世紀後半の築造と考えられている。

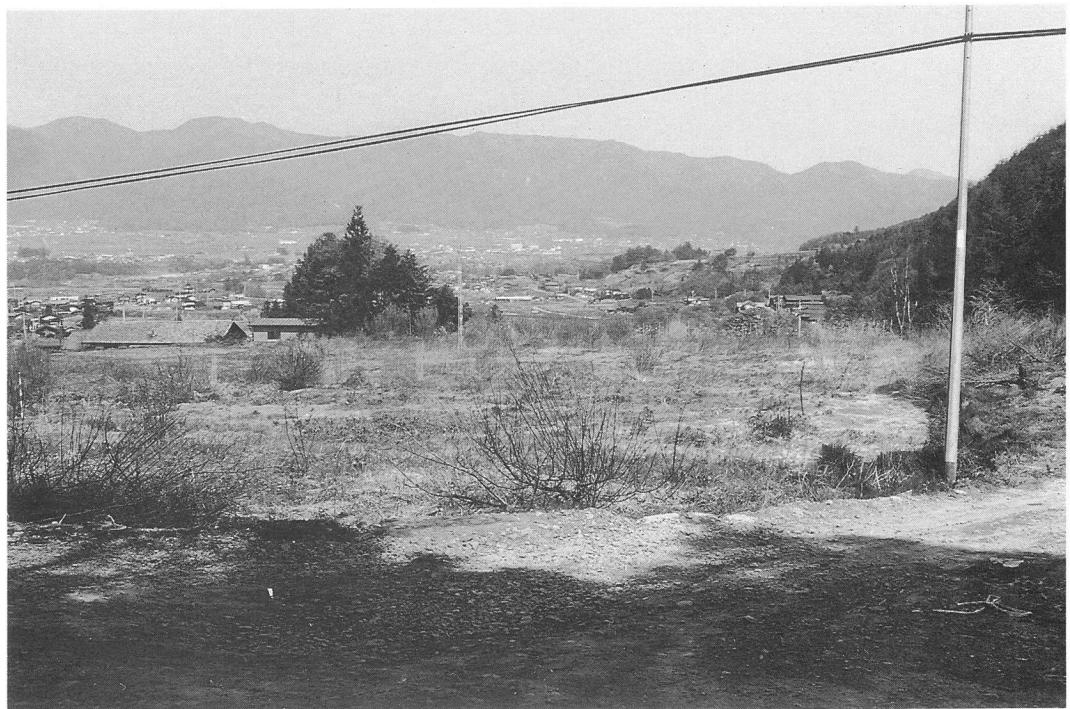
さて、今回発掘調査された源波古墳は、王墓古墳とはやや時間をおくが、これに続く時期の6世紀末から7世紀初頭の築造時期とされる。前述のように肥沃な農耕地を持つ長岡の台地上に位置し、径20mの規模である。そして副葬されていた遺物を見た時、古墳の被葬者は、当時の中央と密接なつながりがあったと感じられる。頭椎の太刀を佩用し、鍍金の飾り金具によって、きらびやかに飾られた馬具を用いた馬に乗った人物が浮び上ってくる。数多くの武器の副葬品は、被葬者が武人的性格の人物という推測はできないものであろうか。長岡の台地の最上

部に位置する単独墳である本古墳は、竜東の一角を領有していた有力豪族の族長の墓であったと考えたい。

副葬品についての細かな考察や、古墳の性格等、研究しなければならないことが多いが、今後、機会を改めて考えたい。

終りに、本古墳の調査開始から適切なご指導を下さった県文化課の小林秀夫主事、調査時にご助言をいただいた友野良一先生、人骨及び歯の分類をして下さった西沢寿晃先生、また報告書のまとめにあたり、ご指導、ご助言を下さった桐原健先生、馬具を中心にアドバイスを下さった大和市の岡安光彦氏、また出土した器類についてご指導下さった小平和夫先生方には心からお礼を申し上げます。また、発掘に参加していただいた調査団の皆様方、発掘調査及び、移転復元作業等に深いご理解とご協力を下さった地元、長岡区に対し、お礼申し上げます。

図版



図版1. 源波古墳

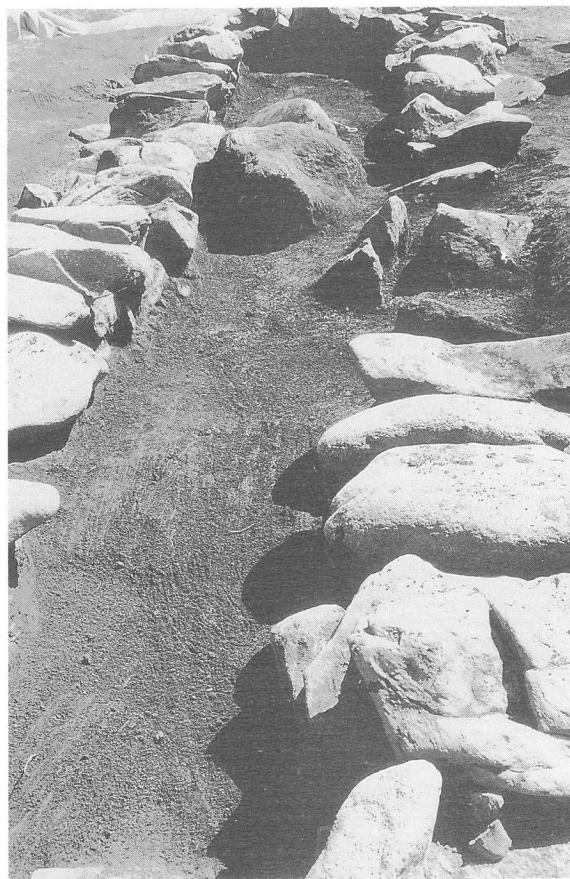


古墳調査全景



奥壁から羨道部を見る

図版2. 源波古墳



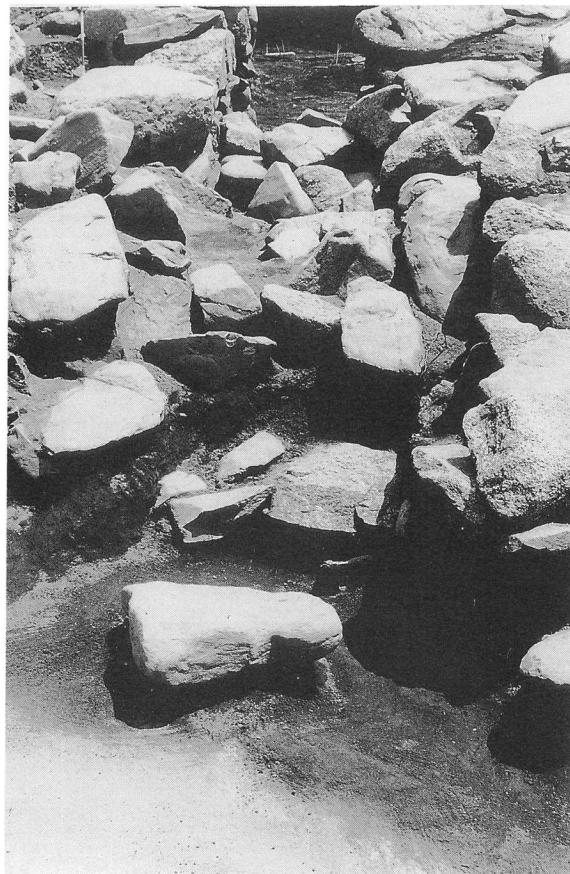
図版3. 調査中の石室上部



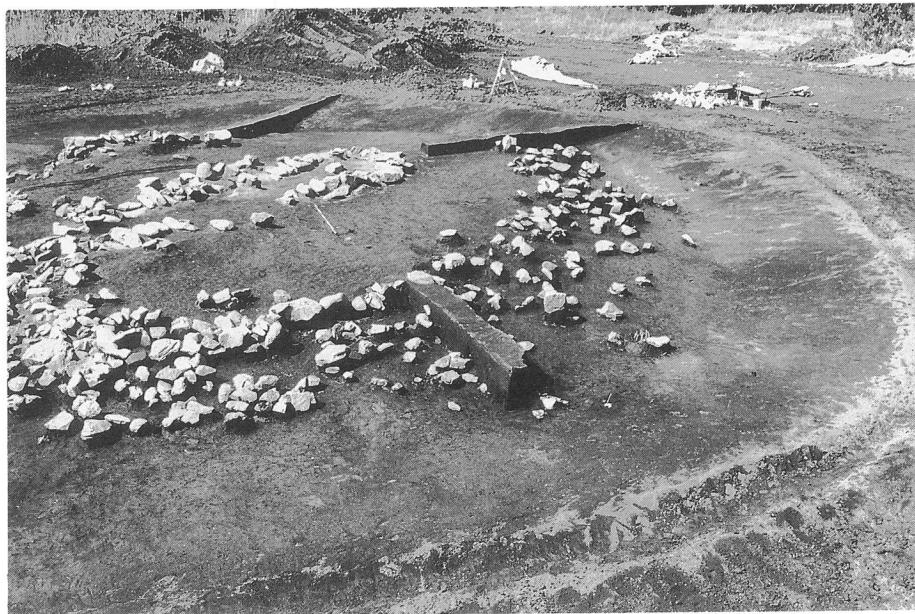
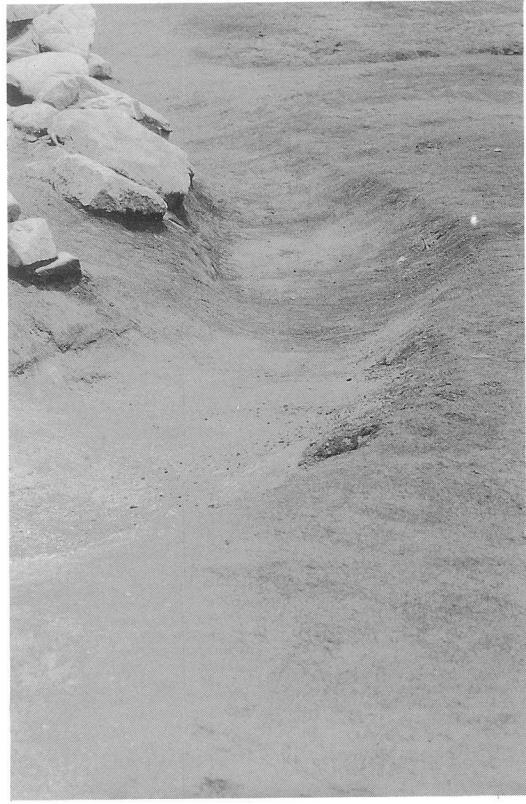
図版4. 葦石の状況



図版5. 石室状況



図版6. 羨道閉塞状況



図版 7. 周 湛



図版8. 側壁裏積(ロームで固めている)